

すべて上所は進上を賞翫とし、謹々上謹上これに次ぎ下輩へは上所を缺く。又宛所を日附より高く上げて書きたるを賞翫とし、等輩には頭を揃へて書き、下輩には少しく下げて書くものとす。其の他殿の字體にも自ら品あり、貴賤によつて行草とそれ〴〵字體を異にす。假名にて『ど』と書きたるは書かざるほどの事なりと云へり。

連署書はすべて奥あがりとなしたり。即ち次に示すが如し。

..... 恐々謹言	
何月日	五何がし名乗
	四何がし名乗
	三何がし名乗
	二何がし名乗
	一何がし名乗
	五何がし殿
	四何がし殿
	三何がし殿
	二何がし殿
	一何がし殿

但し三人への連署書は書中にては前より奥へ中下上、上卷にては同じく上下中となし、二人への連署書は書中にては前あがり、上卷にては奥あがりとなす。さて捺文は正式の書狀にして式の堅文ともいひ、腰文小文は略式とす。捺文は紙一重に狀を書きたるを巻き、其の上を白紙にて巻く。これを禮紙といふ。禮紙の上を別の白紙にて包みたるを上卷の上下其の狀より餘りたる分を捻りて、これに宛所を書くなり。其の捻り様は筋違に左へ折り、又右へ折りて後、裏の方へ折り、其の捻りたる所を紙捻を後より前へ廻はし眞結にして切る。

禮紙は等輩には別の紙を用ひ、上輩には友紙を用ひ、又謹上進上、書には引墨を付けず、受領の人は其の苗字を裏の方に書すべきものとす。小文は半切紙の狀をいひ、捺文を略したるものにて、薄様杉原などを半切にして調べ、残りたる半分を上卷に用ふ。其の捻り様は捺文の如し。隱密の狀は捻り目に糊を用ふることあり。腰文はいはゆる切封じにて狀の上卷の端を細く裁ち、上の方は裁ち残して其の細き所にて狀を巻き、餘りを中程より。少しく上の方にて留めるなり。其の留め様は上より下に挟みたるまでにて、封目に墨を二筋引きて點を打つ。宛所を高く書きたるを賞翫とし、脇付は封目より上げて書くを賞翫とし、等輩には封目より下げて書き、下輩

にはこれを缺ぐ。

又女子の書状は書留の詞を「御心得候て申給へ」「御心得候て申入られ候べし」など書き、「あなかしこ」と留め、宛所は假名眞名を交へて書く。

封目は墨を長々と二筋引き、遠所の状は上巻の裏に小さく月日を書くなり。又紙は薄様を用ひ、これを重ねて書く。其の襲に薄様の色目の式とて、四季をりくゝの色目あつて、春は「梅がさね」夏は「あやめ緑」の薄様、秋は「紅葉かさね」冬は「松がさね」など用ひたり。もと襲の色目より出でたるものなるべし。

又歌を散して書く事より出で、散らし書行はれたり。散し書には定りたる法なく、唯文字の太きと細きとにて見わくるやうに書くにて、二行づゝ揃へて書きたる小筋書といひ、上を揃へて下不同なること例へば藤の花の咲き亂れたるが如きを藤花様、上不同にして下を揃つて書くこと例へば山水の立石の如きを立石様、各行の歌を次々に下げて雁の列りて飛ぶ様に似たる雁行様など呼びたり。もし文言長くして一べんに餘らば、二へんに書く。後世三べん返し、五へん返し、七へん返しなど稱へて讀方の次第のしるしに一二三などの文字を附したる書を見れど故實なき事にて、三べん以上散らして書く例はなく、長きことは使者に言含めて遣はすべきものとせり。

とせり。

其の後徳川時代に至りても書札禮は將軍家康によりて保護せられ、家康が秀吉の右筆曾我尙祐に就き足利幕府の右式を下問して故實を採録せしに始まり、専足利時代の式法を襲用し、唯足利氏の制の繁褥なりし弊に鑑み、これが繁を去りて簡に従ひ、又公文書往復の外は殿の尊稱を廢して様字を一般に用ひしめたるが如きことあるのみなりき。

されど天下大平に屬してよりは漸く繁文縟禮に流れ、用紙は檀紙、鳥の子、奉書、西内、杉原、美濃紙、半紙等の別あり。又字書一に繁簡の煩はしき等差を立て其の用法は誤れば譴責を受くるに至れり。

すべて書状始めのあけ方、上下のあけ方、墨付など足利時代と同じく端は文書には二行ばかりを置き、常の書状には三寸六分ばかりを置き上下は同じほどに残し、上を高く置きて下を上よりも書きつとめたるは見苦しとなせり。其の他墨付用紙忌詞など續々繁瑣なる制度行はれたりき。

随分繁瑣なものです、しかし参考に資すべき點が少くありません。書簡文は斯うした社會的の儀禮を背景にしてゐるところに意味があるのでありますから、適宜參案して用語其の他の様式

に就いて一通りの了解を與へておきたいものです。

第二十課 害蟲と其の敵

廣い意味で害蟲と云へば、人類に有害な蟲類を總稱し、狹義では農作物及び樹木に害を及ぼす昆蟲のみを意味してゐます。元來昆蟲の種類は、全動物界中三分の二以上を占めてゐますから、害蟲の大多數も昆蟲類に屬し、其の農作物を害するものも甚だ少くありません。農作物の害蟲は年々絶えず多少の害を流すものでありますが、平常は多く發見せられないで、年によつて大いに繁殖して慘害を與へることが屢々です。其の化生經過の状態を知るのは、普通の人では容易ではありませんから、從來農家では害蟲を以て、湧出するものと信じ、自然化生の説が行はれ、其の豫防法を講じないのは勿論、往々驅除さへも怠つて意外の慘害を見ることがありました。必竟害蟲大繁殖の現象が餘りに急激な爲に、卵生ではないものだと信じてゐたのであります。

害蟲の産卵数は極めて夥多でありまして、一旦氣候などの影響で其の發生を誘致する場合には、突然繁殖して多大の慘害を與へることが屢々です。而も害蟲の種類は漸々増加する傾向がありまして、山林開墾の爲に平地に移り來るものがあるのは無論のこと、各國の交通が盛んなるに連れて、檢疫を嚴にしなければ新らしき害蟲を輸入し來るの恐れが少しとしません。現に林檎の一大害蟲たる綿蟲は斯うしてアメリカから輸入せられたものであります。

害蟲には幼蟲に限り害を爲すものと、成蟲期に限り害を爲すものとがあります。前者は樹木蔬菜類の葉を食害する俗に毛蟲、青蟲など、稱するものでありまして、是等はすべて胡蝶及び蛾類の幼蟲であります。後者は蔬菜の葉を食ふ多數の甲蟲の如きものがこれです。その他幼蟲、成蟲共に害をなすものもあります。浮塵子、飛蝗などがそれです。

今害蟲の種類の主なるものを挙げますと次のやうです。

(一) 彈尾目 此の種類に屬するもの、最も普通なものは衣魚いぎょでありまして、其の衣類、書籍等を食害するものは人の能く知るところであります。『ぢのみ』は瓜類に害をなすものとして有名です。

(二) 直翅目 此の類に屬する蝗蟲科は、皆禾本科植物を食害します。其中蟲蝻、蝗蟲は有名なもので、『とのさまばつた』も亦時に甚だしく發生して大害を與へます。螻蛄ろうこも亦有害でありまして、小麥、葡萄などの根を食するを以て有名です。蛭螂こやぶらむし一名「あぶらむし」は、厨

房に最も普通な害蟲です。

(三) 擬脈翅目 此の種に屬する食蟲虱科は皆禽獸に寄生して其の毛を食ひ、同時に血液を吸収します。就中羊虱は綿羊に大害があります。又家禽類に次ぐ羽蟲なども有名です。茶柱蟲科の『こなむし』は動植物の標本を害することが大です。白蟻科も亦有害でありまして、熱帯地方に於ては樹木のみならず、建築物などもこれが爲に盡滅に歸することがあると云ひます。

(四) 有吻目 これは殆ど全部が害蟲でありまして、無翅亞目の虱科は人畜に寄生します。毛虱、頭虱は其の主なるものです。植蟲亞目にては、蚜蟲科の麥蚜蟲は麥に大害を與へます。其他介殼蟲科、羽蚤科など皆害があります。蟬亞目には最も有名な浮塵子科があります。就中『つまぐろよこばへ』は最も害があります。又蟋蟀、鳴蜩等も其の幼蟲は地中にあつて樹根を害します。半翅亞目では盲椿象科の『ちやはねあをむし』は、稻麥の葉液を吸収し、松藻蟲科の『まつむし』は水中に住んで魚兒を害し、其他床虱科の『とこじらみ』一名南京蟲は、汽船兵營旅舎などに存し、人のよく知るところであります。

(五) 微翅目 これは蚤の類でありまして、人畜に寄生し、犬蚤、猫蚤、鼠蚤など種類を含んで居ります。

(六) 雙翅目 此の科に屬する虱蠅亞目は皆禽獸に寄生し、蠅亞目の蠶蛆、牛蠅、馬蠅などが最も有名です。馬蠅の幼蟲は之を筒蟲と稱し、能く人の知るところであります。其他家蠅、青蠅等數多あります。蚊亞目には大蚊科があり、禾本科植物を食害します。其他蚋は人の血を吸ひ、虻科の『はなあぶ』は人畜を螫します。又蚊の一種にマラリヤを傳播するものがあります。

(七) 鱗翅目 此の種に屬する蟲類の幼蟲は、所謂蝸蝓、烏蠅、螟蛉、尺蠖等でありまして、概ね植物を食害します。此の主なるものには小蛾亞目に穀蛾科、葉捲蛾科、螟蟲蛾科等があり、尺蠖亞目には樹尺蠖科の『えだしやくとり』は、甚だしく桑樹を害します。地蠶蛾亞目には地蠶蛾科、粟蠶蛾科、螟蛉科等があります。蠶蛾亞目蠶蛾科の松蝸蟲の幼蟲は松を害し、『うめけむし』の幼蟲は、苹樹、梨、櫻、桃等の害蟲です。其他同亞目の毒蝶、避債蟲、燈蛾は皆人の知るところ、天蛾亞目の幼蟲は種々の草本を食害し、蝴蝶亞目拮蝶科の一文字拮の『はまぐりむし』は有名な犬の害蟲でありまして、蛭蝶科の『こむらさき』の幼蟲は柳に生じ、粉蝶科の『きてふ』『もんしろてふ』の幼蟲は蔬菜を害し、鳳蝶も亦柑橘を害するなど一々枚

學に違がありません。

(八) 鞘翅目　これは頗る種類に富み、全昆蟲の三分の一、乃至二分の一は皆此の類の占むるところでありますから、益蟲も亦隨つて少くありませんが、害蟲の種類は遙に多く、瓢蟲科、螢科の如き少數のものを除くの外は概ね害蟲に屬してゐます。今其の一斑を述べますと、隱五節亞目の天牛科の幼蟲は俗に鐵砲蟲と稱し、樹幹を穿つ害蟲でありまして、『とらふかみきり』『ほしかみきり』『くはかみきり』菊虎などの種類があります。小蠹蟲科も亦人類の大害蟲で、象鼻蟲科は森林並に果樹園を害します。『ひめさうむし』は其の一つでありまして、桑芽の害蟲であります。五節亞目の木蠹蟲科は樹木の材質部を害し、又動植物の標本を害するものがあります。竹蠹蟲は最も普通に見るところでありまして、人參蟲は藥舖に貯藏する人參其の他の藥草を害し、標本蟲は博物標本特に昆蟲標本に大害を加へますので、何れも此の名があります。叩頭蟲科は其の幼蟲が作物の根を食害します。金龜子蟲科の幼蟲も亦同様でありまして、之を蟻蝻と名づけます。此の科の『こがねむし』は葡萄及び豆科植物を侵し、金龜子蟲は種々の植物を害します。又齧節蟲科の幼蟲は毛皮、蠶繭、齧節其の他動物性の貯藏物に大害を加へます。龍蝦科の如きは池沼にあつて小魚を捕食し、吉丁蟲科の吉丁蟲は其

の體の美麗なるを以て名がありますが、幼蟲は松を害しますので農家に有害です。

(九) 膜翅目　此の科に屬する蟲類には益蟲が多くて害蟲が比較的に少いのですが、有錐亞目の樹蜂科の如きは、針葉樹の材質又は禾本科植物の莖稈に穿入して大害を加へます。又蟻科の如きは蚜蟲を保護して有害なことは普く人の知るところであります。

益蟲は人類に有益な昆蟲類の總稱です。昆蟲以外の蟲類にも有益なものがないではありませんが、昆蟲の種類は頗る多く、全動物界の三分の二以上を占めて居るのでありますから、通常益蟲と稱せられるもの、殆ど全部は皆昆蟲であると云ふことが出来ます。そもく蟲にして有害と云ひ有益と云ふのは、何れも相對的の語でありまして、彼の蚕兒の如き、一方にては桑の害蟲でありますが、其の絹絲を吐くに至つては、人類に利益を與へることが多大です。又蠶蛆、寄蠅の如き害蟲と雖も若し野外にあつて野蠶、蝸蠶などの害蟲に寄生して、之を斃す時には却て有益となるのであります。ですから益蟲と害蟲とは劃然たる區別があるのではなくて、たゞ吾人類に於ける利害の輕重を考へて之を定めるに過ぎません。

益蟲には直接有益なるものと、間接に有益なるものとの二種類があります。彼の絹絲を出す家蠶、柞蠶、天蠶を始め、釣絲を得べき樟蠶蛾などは皆益蟲なのであります。洋紅を得べき臘脂蟲、

其の他蜜蜂、沒食子蜂、五倍子蟲、水蠟蟲、白蠟蟲からは、蜂蜜、沒食子、五倍子、水蠟、白蠟などを得べく、芫菁は藥材に供します。以上は皆直接に有益なものでありますが、間接に有益なる種類も亦頗る多く、彼の蜜蜂などが植物の受精を媒介し、埋葬蟲、蜻蛉が鳥獸の屍體又は糞尿を食とし、路傍の腐敗物を除去するが如き其の益するところが少くありません。併し其の最も著しいのは、農作物の害蟲を驅除するに有益なる昆蟲であります。即ち直翅類にあつては螳螂の如き、擬脈翅類にあつては蜻蛉、蜻蛉の如き、或は膜翅類の草蜻蛉、蚊蜻蛉の如き、有吻類の食蟲椿象の如き、又鞘翅目の紅娘、螢、步行蟲、斑螋の如き、雙翅類では『しほやあぶ』の如き、何れも其の成蟲或は幼蟲は食肉性で害蟲を食み、其の益する所頗る大です。若しそれ膜翅類に至つては、小蜂、卵蜂、小繭蜂、尾馬蜂、姫蜂などの諸科は何れも小型の種類でありまして、其の幼蟲は皆作物の害蟲に寄生し、農業上最も有益なものであります。蓋し年々七割半の害蟲は、皆是等の寄生蟲の爲に殞れると云ふのを見ても、其の如何に有益であるか想像されませう。

此の教材は害蟲と其の益蟲との關係を中心として、害蟲の被害の莫大なることを述べると共に其の益蟲が害蟲驅除の一助として農業家に多大の利益を興へてゐることを略説してゐます。

文は七段に別れ、第一段は稻の害蟲特にする蟲の被害の莫大なること、第二段はする蟲と其の敵蟲、第三段はうんかの被害の甚大なこと、第四段はうんかと其の敵蟲、第五段は害蟲驅除と敵蟲の利用、第六段はイセリヤかひがら蟲と其の被害、第七段はイセリヤかひがら蟲の驅除とベタリヤてんたう蟲の利用となつてゐます。

『うねのする蟲』 うねのする蟲は年二回發生する螟蟲類の一つで、幼蟲は春季蛹化して、六七月頃蛾となります。蛾は稻の葉面に産卵し、其の卵は母蟲の體毛で被覆せられ、二週間で孵化します。幼蟲は凡そ三週間ばかりの間に蛹化します。第二回の蛾は九月頃に現はれ、其の卵から生ずる幼蟲は切株内に越冬します。幼蟲は長さ一寸、帯赤黄色、頭は赤褐色であつて、稻莖に穴を穿つて髓部を食ひます。蛹は長さ五分半ばかりで赤褐色であります。蛾は翼を開けば九分に達し、前翅は脈太く灰黄色であつて、四個の濃點を散じ、後翅は三角形をなし灰白色です。胸は肥大にして黄色を帯び、目は黒褐色で細毛を有してゐます。

『うんか』 うんかは雲霞の義で浮塵子と書きます。昆蟲學上では有吻類の浮塵子科に屬する害蟲で、近年諸國の稻田に發生し、大いに其の被害を逞ふしうする小型の昆蟲です。其の種類が頗る多く、形態は蟬に似てゐますが一般に小型で、其の體長も概して二三分に過ぎません。頭は突出し、是から生ずる觸角は三節乃至數十節からなり、其の末端は細くて刺毛状をなし、復眼は其

の後に位してゐます。翅は前後同形、概して半透明です。静止する時には之を背上に納め、屋瓦状をなしてゐます。口吻は基節が太く、尖端が細くて葉基から液汁を吸収するに便してゐます。其の幼蟲は俗に泡蟲と稱し、泡をふいて身體を保護してゐます。此の蟲は種類が頗る多く、『つまぐろよこばへ』『くはよこばへ』『ふたてんよこばへ』『よつてんよこばへ』『むつてんよこばへ』『きよこばへ』『うなづまよこばへ』『まだらよこばへ』『うすばよこばへ』『かばいろよこばへ』『ひしよこばへ』『べつかうよこばへ』『てんぐよこばへ』『くはじらみ』『なじらみ』などは其の主なものです。皆稻田の害蟲でありまして、其の繁殖の甚だしい時には其の害は頗る恐るべきもので、全稻田を擧げて全く荒廢に歸せしめることも敢て稀有のことではありません。

『かひがらむし』 介殼蟲は有物目に屬する昆蟲の一部類で、介殼蟲科なる一科を形成してゐます。種類が多くて形状も亦様々ですが、一般に小型の昆蟲で、雌雄形を異にしてゐるのが常です。雄蟲は形が瘠小で、後翅が退化し往々前翅一對のものもあります。觸角は連鎖六節乃至二十五節からなつてゐます。雌蟲は概ね翼を有しません。成長すれば一種の分泌物を出して自體を擁護し、外形が介殼のやうですから此の名があります。卵は雌蟲の腹部に附着し、母體が老成して樹皮などに固着した後、體側を破つて逸出するのが普通です。介殼蟲の中には少數の有益なものもあり

ますが、多くは植物に害を與へ、特に盆栽品温室品の葉莖に固着して、一見動物とは見えないやうな外觀を呈してゐます。桑の介殼蟲、梨櫻の介殼蟲、薇薔の介殼蟲などは特に著名です。

『てんたう蟲』 瓢蟲は鞘翅類に屬する小昆蟲で、體は半球形をなして光澤があります。觸角は前縁に附着し、末端は桿棒状をなしてゐます。腹部は五環節から成り、各節皆運動することが出来、脚は伸縮に適してゐます。幼蟲は紡錘状をなして刺を有し、又は白粉を被つてゐます。成蟲幼蟲共に肉食性であつて、蚜蟲、介殼蟲などを食するを以て頗る有益です。種類が頗る多く、黒くて紅色紋を有するものがあり、或は黄色で黒紋を有するものもあり、何れも頗る美麗です。此の蟲に酷似した昆蟲に『てんたうむしたまし』と云ふのがあります。これは茄子や西瓜などに付く小型の甲蟲で、體長が二分五厘、赤褐色に黒點が二十八個あります。外觀は頗る愛すべきも農作物には甚だ害があります。

【寄生】 獨立で生存の出来ない動植物が、他の動植物に著生して、其の動植物の營養で生存すること、生物學上の熟語、

【惨害】 いたましき損害の意で、むごくそこなはれること、

『柑橋類』 芸香科柑屬に屬する果樹の通稱、蜜柑、橙、橘の類、

『孵化』 卵が成熟して遂に一個の動物體となること、卵がかへること、

『分泌』 動物物の液汁が内部から體外へしみ出ること、振假名は『ぶんびつ』とあるが、正しくは『ぶんび』でなければならぬ。

補充文には寺田寅彦博士の『冬彦集』から、次の『簍蟲と蜘蛛』を擧げておきませう。

簍蟲と蜘蛛

二階の縁側の硝子戸のすぐ前に大きな楓が空一杯に枝を擴げて居る。其枝に澤山な簍蟲がぶら下つて居る。

去年の夏中は此の蟲が盛に活動して居た。いつも午頃になると這ひ出して、小枝の先の青葉をたぐり寄せては喰つて居た。身體の割に旺盛な彼等の食慾は、多數の小枝を坊主にしてしまふまでは満足されなかつた。紅葉が美しくなる頃には、もう活動はしなかつたやうである。兎に角私は日々に變つて行く葉の色彩に注意を奪はれて、しばらく簍蟲の存在などは忘れて居た。

併し紅葉が干からび縮れてやがて散つて仕舞ふと、裸になつた梢にぶら下つて居る多數の簍蟲が急に眼立つて來た。大きいや小さいのや、長い小枝を杖のやうにさげたのや、枯葉を一枚肩に羽織つたのや、いろ／＼さま／＼の恰好をしたのが、明るい空に對して黒く浮き出して見えた。それが其日々々の風に吹かれてゆらいで居た。

かよはい絲で吊されて居るやうに見えるが、如何なる木枯にも決して吹き落されない程、しつかり取り付いて居るのであつた。縁側から箒の先などではね落さうとしたが、そんな事では中々落ちさうもなかつた。

自分は冬中此の死んで居るか生きて居るかも分らない蟲の外殻の鈴成りになつて居るのを眺めて暮して來た。そして自分自身の生活がなんだか此の蟲のによく似て居るやうな氣のする時があつた。

春がやつて來た。今迄灰色や土色をして居たあらゆる落葉樹の梢には何時となしにぼうつと赤味がさして來た。鼻のさきの例の楓の小枝の尖端も一つ／＼膨らみを帯びて來て、それが恰度ガーネットのやうな光澤をして輝き始めた。私はそれがやがて若葉になる時の事を考へて居る内に、それ迄に此の簍蟲を驅除して置く必要を感じて來た。

多分だめだらうとは思つたが、試に物干竿の長いのを持つて来て、たゞき落し、はね落さうとした。しかしやつぱり無効であつた。はねる度にあの紡錘形の袋はプロペラーのやうに空中に輪をかい廻轉するだけであつた。悪くすると小枝を折り若芽を傷つけるばかりである。今度は小さな鋏を出して来て竿の先に縛りつけた。それは數年前に流行した十幾通りの使ひ方のあるといふ西洋鋏である。自分は今其十幾種の外のもう一つの使ひ方をしようといふのであつた。鋏の發明者も、よもや此れが養蠶を取る爲に使はれようとは思はなかつたらう。鋏の先を半ば開いた形で、竿の先に縛り付けた。圓滑な竹の肌と、ニッケル鍍金の鋏の柄とを縛り合せるのは餘り容易ではなかつた。

ぶら／＼する竿の先を、狙ひを定めて蟲の方へ持つて行つた。そして開いた鋏の刃の間に蟲の袋の口に近い處を喰ひ込ませておいてそつと下から突き上げると案外にうまくちぎれるのであつた。それでも可也に強い抵抗の爲に細長い竿は弓狀に曲がる事もあつた。幸に枝を傷つけないで袋だけをむしり取る事が出来たのである。

或るものは枝を離れると同時に鋏を離れて落ちて來た。しかし又或るものは鋏の間に固く喰ひ込んでしまつた。始めから面白がつて見て居た子供等は、落ちて來るのを拾ひ、鋏に挿

まつたのを外したりした。二人の子が順番で交る／＼取るのであつたが、年上の方は蟲に手を付けるのを嫌がつて小さなショベルですくつてはジャムの空罐へはふり込んで居た。小さい妹の方は却つて平氣で指でつまんで筆入れの箱の上に並べて居た。

庭の楓のはあらかた取り盡して、他の樹のもあさつて歩いた。結局數へて見たら、大小取り交せて四十九個あつた。ジャムの空罐一つと筆入れは丁度一杯になつた。それを一遍庭の芝生の上におちまけて並べて見た。

一つ／＼の蟲の外殻には矢張りそれ／＼の個性があつた。割に大きく長い枯枝の片を並べたのが大多數であるが、中には殆んど目立つ程の枝片は附けないで、澁紙のやうな肌をして居るのもあつた。えに、したの豆の莢をうまくつなぎ合せて居るのもあつて、此れがのそ／＼這つて歩いて居た時の滑稽な様子が自から想像された。

就中大きなのを選んで袋を切り開き、蟲がどうなつて居るかを見たいと思つた。竿の先の鋏を外して袋の兩端から少しづつ蟲を傷つけないやうに注意しながら切つて行つた。袋の纖維は中々強靱であるので鈍い鋏の刃は屢々切り損じて上滑りをした。やつと取り出した蟲は可也大きなものであつた、紫黒色の肌がはち切れさうに肥つて居て、大きな貪慾さうな口嘴

は褐色に光つて居た。袋の暗闇から急に強烈な春の日光に照されて蟲のからだにどんな變化が起つて居るか、それは人間には想像も付かないが、なんだか酔つてゝも居るやうに、或は未だ永い眠がさめ切らないやうに懶氣に八對の足を動かして居た。芝生の上に置いてもとの古巢の空き殻を頭の處におつゝけてやつても、最早それを忘れてしまつたのか、這ひ込むだけの力がないのか、もうそれ切り身體を動かさないうちとして居た。

もう一つのを開いて見ると、それは身體の下半が干すばつて舍利になつて居た。蠶にあるやうな病菌が矢張り此蟲の世界にも入り込んで自然の制裁を行つて居るのかと想像された。しかし養蟲の恐ろしい敵は未だ外にあつた。

澤山の袋を外からつまんで見て居るうちに、中空で蟲の御留守になつて居るのが可也多くのパーセントを占めて居るのに氣が付いた。よく見て居ると、そのやうなのに限つて袋の横腹に直徑一耗かそこらの小さい孔がある事を發見した。變だと思つて缺で其一つを切り破つて行く中に、袋の中から思ひがけなく小さい蜘蛛が一疋飛び出して來て慌たゞしく何處かへ逃げ去つた。ちらりと見たゞけであるがそれは薄い紫色をした可愛らしい小蜘蛛であつた。

此の意外な空巢の占有者を見た時に、私の頭に一つの恐ろしい考が電光のやうに閃いた。

それで急いで袋を縦に切り開いて見ると、果して袋の底に滓のやうになつた養蟲の遺骸の片々が残つて居た。あの肥大な蟲の汁氣といふ汁氣は悉く吸ひ盡され骨め盡されて、唯一つまみの灰殻のやうなものしか残つて居なかつた。唯あの堅い褐色の口嘴だけは其儘の形を留めて居た。それはなんだか兜の鉢のやうな恰好にも見られた。灰色の壙穴の底に朽ち残つた戦衣の屑といったやうな氣もした。

此の恐ろしい敵は、養蟲の難攻不落と頼む外廓の壁上を忍び足で這ひ歩くに相違ない。そして僅な弱點を捜しあてゝ、其處に鋭い毒牙を働かせ始める。壁がやがて破れたと思ふと、もう養蟲の脇腹に一滴の毒液が注射されるのであらう。

人間ならば來年の夏の青葉の夢でも見ながら、安樂な眠に包まれて居る最中に、突然脇腹を喰ひ破る狼の牙を感じるやうなものである。此れを拂ひのける爲には養蟲の足は全く無能である。唯一の武器とする物を使はうとすると餘りに窮屈な自分の家は身體を曲げる事を許さない。最後の苦惱に藻搔くだけの餘裕さへもない。生物の間に行はれる殺戮の中でも、此れは恐らく最も残酷なものゝ一つに相違ない。全く無抵抗な状態に於て、そして苦痛を表現する事すら許きれないで一分だめしに殺されるのである。

蟲の肥大な身體は其の十分の一にも足りない小さな蜘蛛の腹の中へ消えてしまつて居る。残つたものは僅な外皮の屑と、そして依然として小さい蜘蛛一疋の『生命』である。差引きした残りの『物質』はどうなつたか分からない。

養蠶が繁殖しようとする處には自ら此蜘蛛が繁殖して、其處に自然の調節が行はれて居るのであつた。私が養蠶を驅除しなければ、今に楓の葉は喰ひ盡されるだらうと思つたのは、餘りに淺墓な人間の自負心であつた。寧ろ唯其儘にもう少し放置して自然の機巧を傍觀した方がよかつたやうに思はれて來たのである。養蠶にはどうする事も出来ない此の蜘蛛にも、又相當の敵があるに相違ない。『昆蟲の生活』といふ書物を讀んだ時に、地蜂の或るものが蜘蛛を攻撃して、其毒針を正確に蜘蛛の胸の一局部に刺し通して此れを麻痺させるといふ記事があつた。麻痺した蜘蛛の脇腹に蜂は一つの卵を生みつけて行く。卵から出た幼蟲は親の据膳をして置いてくれた佳肴を食ふて生長する。充分飽食して眠つて居る間に幼蟲の單純な身體に複雑な變化が起つて、今度眼を覺すともう一人前の蜂になつて居るといふのである。或る蜘蛛が、或る蛾の幼蟲である處の養蠶の胸に喰ひついて居る一方では、養蠶のやうな形をした或る蜂の幼蟲が、他の蜘蛛の腹をしやぶつて居る。此のやうな鬭争殺戮の世界が、

美しい花園や庭の木立の間に行はれて居るのである。人間が國際聯盟の夢を見て居る間に。

或る學者の説によると、動物界が進化の途中で二派に分れ、一方は外皮に硬いキチン質を具へた昆蟲になり、其の最も進歩したものが蜂や蟻である。又他の分派は中心に硬い脊骨が出来て、其の一番發展したのが人間だといふ事である。私には此説がどれだけ本當だか分らない。併しいづれにしても昆蟲の世界に行はれると同じやうな鬭争の魂があらゆる有脊椎動物を傳はつて來て、最後の人間に到つてどんな工合に進化して來たかをつく／＼考へて見ると、つまりは吾々の先祖が養蠶や蜘蛛の先祖と同じであつてもいゝやうな氣がして來る。

四十九個の紡錘體の仕末に困つたが、結局花畑の隅の土を深く堀つて其奥に埋めてしまつた。其中の幾パーセントには、屹度蜘蛛がはひつて居たに相違ない。かうして私の庭での養蠶と蜘蛛の歴史は一段落に達した譯である。

併しこれだけでは此の歴史はすみさうに思はれない。私は少なからざる興味と期待を持つて今年の夏を待ち受けて居る。

第二十一課 夏の田園

無難の詩です。しかし嚴密な自由詩の立場から眺めますと、鋭さ、深さ、新しさを缺いたところに少々物足りない氣もします。午前の感じを『草いきれ』で代表させ、眞晝の暑さを『鋏の刃先』に依つて表現すると云つた風に、陳腐の詩境を平凡に取扱つてゐると云ふ憾みがないでもありません。随つてグツと胸にこたへるところがないのは惜しいことだと思ひます。

なほ然を云へば曉景をもう一つ入れて欲しかつたのです。夏の田園の特色は、何と云つても朝露の青葉をこぼれる景色と氣分を見逃すことは出来ずまい。若しも長さの關係が假にあるとしますならば、此の詩の中で最も平凡な『草いきれ』を省いても宜いかと思ひます。

兎に角自由詩らしい新しい詩形を取入れたのは、從來兎角の批評のあつた讀本としては、確に一轉機を劃したものと推獎して憚らないところであります。

片岡に日輝き、

山田の稻葉は光り、

道の粉砂は焼けて、

吹く風に舞上る、

諸聲に鳴くせみ、

今日も暑さう。

午前です。

道の左は雜木山、右は田、田のほとりの原、そして原の中にポツカリと浮上つた丘——これが先づ此の詩の道具立です。

午前九時頃でもありませんか。朝の日が燦と輝く、照るものではありません。輝くと云つてこそ片岡も、稻葉の光りも特に印象的な鮮明さを持つのであります。そして輝く強い陽光である爲に、岡の半面が洗つたやうにすつきりと映え浮んでゐる様が思はれ、又其の半面のどす暗さもピンと來ます。

稻葉の光りも同様更に加へて時々風に揺ぐ廣い葉面をサツと流れる光りのキラリと、恰度秋水の闇に一閃するとても形容しませうか。さうした鋭さまでが想像されませう。

風が吹く、連日の炎暑に焼けた粉砂がバツと白く舞上る。ジイツ／＼……と雜木林に蟬が鳴く。

壊れた金属を幾つも打鳴らすやうな重苦しい騒音です。『今日も暑さう』の感じがハッキリと肯かれます。

右も青田、

左も青田、

中の小道を、

あふごかたげて、

行く我が顔に、

草いきれ。

草いきれです。

右も青田、左も青田、一面の青田の中を貫く野道、もう道のほとりの雑草も稻葉も可なりの埃りを浴びてゐます。

天秤棒をかたげて行く顔にむつと来る草いきれ、太陽は漸く中天に近い。そろ／＼十一時でもあらうか——

草いきれの一つで午前の暑さを出さうとしたのが此の詩の持つ価値であり、技巧であります。

天秤棒は両端に近い箇所に釘を打ち、物を之に掛けて荷ふ棒です。

島打つ鉄の先、

日の光り照返し、

きら／＼ときらめくを、

桑畑越しに見る

眞夏の眞晝。

一抹の雲もない碧空、眞夏の眞晝です。

朝から桑畑の手入をしてゐる青年。廣縁の麥藁帽子が可なり黒い。もう二三年前のものらしい。流れる汗がともすればじくりと眼に滲みる。『あゝ疲れた』と腰を伸した途端にピカリ、二三町むかふの畑を耕す四五人の群、其の群の鉄の光りです。又ピカリ、鋭い照返し。

『兄さん飯だよ』今し方學校から歸つた弟が畔道の方から叫ぶ。——

むつとするやうな暑さと、金属の鋭い光とを對立させて、其の間に此の焦々しい夏の眞晝の暑さを醸出しやうとしたところに、此の詩の味があり技巧があります。

午後の二時、草葉はしをれ、

牛眠り、鶏いこふ。
鳴くせみのはたとやむ時、
自轉車のタイヤの音は
道をよぎりぬ。

牛は眠り鶏はいこふ。畑の所々に鉋が投棄てられたとけで人氣もない。眞晝の暑さがきびしいからでせう。

道端の草はぐつたりとしをれて、蟬もはたと鳴き止めた、所謂萬籟寂とした中に灼熱たる太陽のみがじり／＼と照りつける。――

と、前の道を自轉車がじやり／＼／＼と氣味悪い音を残して行き過ぎた。パツと砂埃りが立つ。ポツチリと咲いた晝顔の一輪が微かに揺れる。――

午後の二時、まさに一日の暑さの頂上です。

『タイヤ』はゴム製の自轉車の輪、

谷川のせいらぎに

かゝりたる水車、

車輪に水砕け、
水晶のしづくは
中空より滴る。
車の朽木の香は
涼しき風さをひて、
しみ／＼にほふ。

右も山、左も山、山の峽を潺々と流れる谷川、谷川の水車、コトリ、コトリ、ジャブ、ジャブ、……水晶の滴が中空からしたゝる。

水車場に運ぶ米俵を背から下して、そこらの岩に腰かける。涼風が吹く、山の青葉をもれた日の光りが二條三條足もとに揺ぐ。

あたりは物靜かに、たゞ水の音、草摺れの音、

と、車の朽木の香りがなつかしく、ゆるやかにあたりに漂ふ。――眞に光景目睹です。

村の灯は二つ三つ。

牛追ひて行く方は

落日の名残して、

ほの明き大空、

涼しげに夕星一つ。

物皆はよみがへる、

夏の夕暮。

夕暮です。

村の灯が二つ三つ、野風呂焚く煙が緩やかに流れる。

『夕焼小焼で日が暮れて、山のお寺の鐘が鳴る。』

子供等の合唱がにぎやかに然も餘音長く響く。

牛を追ふて歸り行く野道の果の空に、落日の名残か、橙紅色の曳雲二刷毛三刷毛、

鎮守の森の上にはもう宵の明星がキラリと冴える。

草も、木も、人も、總ての物象がホツと一息、耳をすませば喜びの合奏曲がかすかに響いてゐ

るかも知れぬ。

『今晚は、』

『お、×君、さあおかけ、』

『今日の暑さも随分だつたね。』

『うむ、しかし夕方は又格別だなあ。』

軒の忍草が揺れて風鈴がチリリ、――

物皆はよみがへる夏の夕暮れ、涼味はひた／＼と讀者の胸裏に迫りませう。

言ふまでもないことですが、此の詩は同一場所の移り行く景色を歌つたものではありません。

それ／＼場所を異にした斷章を六篇程集めて、夏の田園と云ふ氣分情調を一括して出さうとしてゐます。

ですから、此の詩を唯々夏の田園の暑さ、或は夕方の涼味だけを平面的に歌つたものとして取扱つてはなりません。今少しく深い省察の下に詩中に潜む農村の生活と、若者の潑刺とした意氣とを眺めなければなりません。

暑いとこぼしながら、しかし其の暑さに決してへこたれてゐるわけではありません。寧ろ暑さに克ち、暑さを喜び迎へると云つた程の青年の赤い血が根底を流れてゐるのです。此の點は少しく鋭い詩眼を加へましたら、直に肯けることだと思ひます。

随つて此の詩は單なる叙景的のものでもなければ、消極的のものでもありません。此の點に平凡とは云ひながら、又無下に捨て去り難き所以のものが存在してゐるのです。

詩と云へば文語雅語に依る定型詩のみと考へ、小學校時代から殆どさうした類にのみ接して來た彼等に、自由詩の存在と尊さを十分知らせることも大きな任務の一つでせう。詩と云へば高尚らしいもの、高踏的なもの、ロマンチックなものとのみ考へてゐる誤つた概念を捨て、人間の複雑な生活感情をさながらに表現し、固形した律格を捨て、内面律を主とし、其の用語も我々の日常語即ち口語に依るところの所謂自由詩が、何れの點より考察するも動かすべからざる本質的に優秀なものであることを知らして欲しいのです。

補充文として夏の詩二篇を舉げて直きませう。前者は或る田舎の青年の作です。どこか荒削りな、まだ推敲不足の箇所もありますが、夏の日の熾烈は聽て若者の意氣の象徴で、そこらに本課の教材と類似した點がないとも云へますまい。

後者は詩人多田不二氏の作で、都會、それも東京の眞夏の午後の蒸苦しい暑さを歌つたもので『田園の夏』とは全然反對の境地を歌つたところに對照の妙があります。

夏 日 禮 讚

八月の蒼穿に、

輝く白雲、

太陽は

熾烈の光を投げて、

たくましい裸體の男に燃える。

蒼茫として

地上を包む一ばいの青色、

生あるものゝ鬱勃たる姿よ。

夏は若者の天地、

夏は若者の象徴、

しかして

われは

われは
あゝ若者。

眞夏の詩

砂漠のやうに息苦しい七月の空

生ぬるい風が街路樹の緑葉を重く揺り動かす。

乾ききつた地面には埃が高く積つてゐる。

電車の響や荷車の震動がひつきりなしに続く。

頭脳はまるでふくろを冠つたやうだ。

酔漢のやうになつて手を振つてる交通巡査の顔を見るとたまらない気がする。

こんな炎熱の道路を

まばゆいほどきら／＼光る黒塗の裝飾馬車が十餘臺の自動車に囲まれて町を練つて行く
たれか華族か金持の葬式に違ひない。

軒下に立止つてそれを眺める人々の顔にも、

興味の代りにたゞ疲れと倦怠が見られるばかりだ。

これが大日本の首都、東京のまん中の眞夏の午後光景である。

大きな建築の煉瓦塀によりかゝつて、労働者らしい男がいぎたなく晝寝してゐる。

その傍には犬がからだを丸くして睡つてゐる。

自然の増場は今を盛りとたぎつてゐるのだ。

第二十二課 船津傳次平

農村用の讀本として、特に近世三老農の一人たる船津傳次平翁の略傳を掲げてゐます。

教材の出所は東京の郊外飛鳥山公園にある船津翁の碑銘で、原文は故品川彌二郎子の手になつてゐます。参考の爲左に其の原文を擧げて置きます。

近世三老農の中に就きて伎倆功績最も優れたるは船津傳次平翁なり當時學理未だ開けざり

しかば老農の稱あるものすら徒に手加減と目分量との經驗を頼とするのみなりしに翁痛く之を斥け實驗に加ふるに學理を以てし大に農事の改良を唱へ足跡全國に周からざる隅なく到る處に農民の迷夢を警醒し我邦の農事をしておのづから刷新の運に向はしめき蓋農事改良の木鐸たるべき農學士は大かた年齒猶弱く研究未だ至らで實地に精しからねば翁が指南を仰がざるはあらざりけりされば學理實驗相和して我國の農事を發達せしめたるは翁の力とこそ謂ふべけれ翁は幼名を市藏といひ天保三年十月一日上野國勢多郡富士村大字原之郷に生れたり其先は甲斐の武田の家臣なりしが後上野に移り世々農を治めて翁に至れり翁の父は俳借を善くし白庵と號し午麥と稱せり翁は父の教訓を守り弱冠より躬づから犁鋤を搦りて月を踏み星を戴きて力耕を事とせり抑翁の父は多く田園を兼并することを誡められたるまゝに翁は數頃の小圃を耕耘し敢て怠らざりき其の餘暇には父に請ひて和漢の學と數理を修めぬ就中數學は其蘊奥を窮め遂に關流の皆傳を受く翁が世の老農と異なるはその根底實に此處にあり翁が常に數理を應用して裨益する所多かりしも亦宜なる哉翁又俳借を好み冬扇と號し俗調にも通ぜしかば山田守る賤が男をも感化する便を得たり翁が多才なる率ね此の如きものあり翁は躬づから求むるにあらねど桃李の下いかでか蹊をなさざらむ名聲漸く揚り大總代名主たらむこ

とを請ふものありしかば翁は剃髮して避けぬされど尙免れ得て遂に假髮をつけて職に就くに至れり其間治績顯著なりしかば村民今に至るまで猶其德澤を仰げり時の大久保内務卿翁の名聞を聞きて親く囑するに駒場農學校農場監督の事を以てし且つ廣く日本全國の農業を改良するを以て任とせよとて揀揚極めて懇篤なりしかば翁感奮遂に出て仕へぬ實に明治十年の冬にして翁が四十有六歳の時なりき駒場の野素より惡草彌蔓し地味亦薄かりしかば其開墾は極めて困難なりしも翁の伎倆と熱心とは終に荒野を化して熟圃となしぬ翁が心神を勞せしは駒場野や開き残りに響むしの吟あるを以て知りぬべし後農商務省に入り更に農事試験場に轉じ累進して技師に任ぜられ高等官六等に至れり正七位に叙し藍綬章を賜はりて其功を表せられぬ既にして年老い郷に歸り尙農圃の間に周旋したりしがやがて病を以て逝きぬ時は實に明治三十一年六月十五日齡は六十有六歳なりき翁天資勤勉にして業に倦まず勞を厭はず其の堪能なるは獨農蠶の道のみならず花卉盆栽割烹の末技に至るまで能く精通せり其の講話は筆記又は印刷したるものすら東西相傳へ南北相争ひて家寶とすれども其既刊の著者は僅に稻作小言里芋法韭菜法及効用直杵歩刈用法等三四の小著あるのみ翁の遺稿豈是のみならず有志將に相謀りて之を公にせむとす又翁性溫厚にして功に誇らず人と争ふことなかりしかば遠近其逝去

を悼ざるものなく其高德を慕ひ其偉績を仰ぎ碑を建て、不朽に傳へむと有志余が文を請ふ余翁と交深く有志の意亦獨翁に私するに非ざるを知る嗚呼學理の深遠なるも之を實地に應用せずば何の益かあらむ學理實驗相待ちてこそ眞の農事は進む可けれ翁が詢々として彼農民を誘導し致々として此木鐸を指南し以て能く調和するに至らしめしは實に翁の功勳なり況して翁の著書悉く世に出でなば翁は逝くとも其志や千載の鏡とならむ是余が喜びて有志の請を諾せし所以なり

明治三十二年七月

從二位勳二等子爵

品川彌二郎選文

文は十一段に分れ、第一段は其の生立ち、第二段は研究心に富んでゐたこと、第三段は赤城山麓に松を植ゑて水源の涵養に資したこと、第四段は三十六ヶ村の大總代となつて勸業に力を用ひたこと、第五段は選ばれて内務省の官吏となつたこと、第六段は駒場農學校の創設に力を用ひたこと、第七段は駒場農學校に於ける翁の逸話、第八段は翁が學理と實際とに兼通じてゐたこと、第九段は其の逸話で、翁が實驗に熱心であつたこと、第十段は翁の晩年、第十一段は其の餘榮となつてゐます。

船津傳次平は、天保三年十月一日、上野國勢多郡富士見村に生る。云々

この段は生立です。

翁は群馬縣上野の國勢多郡富士見村原之郷村の農民です。天保三年十月一日を以て其の家に生れました。幼名は市造、長じて傳次平と改めました。其の先は武田氏の家臣で甲斐の國都留郡船津村に出てゐます。天正年間に移つて上野に住み、世々農を業とし相傳へて翁に至りました。父傳次平は幼名を利兵衛と云ひ、同郡芳賀村大字嶺村の青木氏の娘よし子を娶つて翁を生みました。父利兵衛は多少文字があつたので、推されて所謂寺小屋師匠となり、農業の暇を以て讀書習字を近郷の子弟に教授し、時に好んで俳偈を弄び、自ら號して白庵と呼び、俳名を午麥と云ひました。翁も亦幼時父に隨つて書を読みました。父傳次平は常に翁を戒めて云ふには、「金貨と商法とは爲すべからず、其の他終りの疑はしきことは決して着手すべからず、田畑を多く所有すべからず、又多く作るべからず、農業は雇人二名馬一匹にて營み得る位を度とすべし、稽古事は冬春の兩期に於てし書物は小滿（五月二十二日）より白露（九月八日）の候までは封じ置くべし、暑中は實業一途に勉勵すべし、是我が家の遺法なり」と、翁は固く此の教へを守つて農業に従事し、其の閑暇に學問を勵みました。

翁は數理を好み、年十八父の許を得て下野國足利郡小俣村の人、大川茂八郎に就いて最上流の算術を學び、翌三年に轉じて上野の國那波郡板井村の數學者齊藤長次郎に従つて學ぶこと前後三年、遂に能く算數の奧義に通曉し、當時人をして最も難しとせる點竄圓理に至るまで熟達せざるところなく、關流の皆傳を受けました。翁が兩師に學ぶや終始自宅から通學したものだと言ひます。小俣は原之郷村を去ること十一里、板井村は同じく四里、篤學の人でなければ能くし難いことなのです。

彼は學問と實地とを分たず、學びし所の知識を悉く農事に應用し、云々

此の段は翁が研究心に富んでゐたことを叙してゐます。

翁は少時人と相往來して談笑嬉戯することを好みませんでした。獨り自ら好むところの植物の播種、蔬菜の栽培を爲すことを以て無上の楽しみとしました。是を以て翁の幼少時代には特に親交ある友人を持ちませんでした。翁は夙に俳偈の趣味を解し、始め父に就いてこれか作法を學び、後漸く上達するに及んで隣村小出村の俳偈師蓼園無滿翁に師事しました。『すひごろのたばことひねる蠶裏かな』これは翁が當時の句です。此の句に見るやうに、翁は早くから既に蠶兒飼育の業に心を潜めつゝあつたことを察するに足りませう。之を實際家に質すに、蠶裏の乾濕は蠶兒飼育

上最も注意を拂ふべき點でありまして、其の適度は翁が此の句に示し得て又盡したものと云はれてゐます。翁が飼育上に潛心致思した結果、たま／＼其の好めるところの文學の一形式を藉つて斯業の好参考に資したのも亦面白いことだと思ひます。

翁が農蠶のことに従ふや、徒に舊來の方法を踏襲することを以て足りとせず、必ずや事々物々に工夫を凝し、實驗を重ね、發明自得するに至らなければ止みませんでした。之を以て農業の如きも土壤の性質、肥料の配合に依り、種子の選擇播種の方法に至るまで、必ず一々考察實驗を経ないものはありませんでした。二十歳の頃工夫研究の結果里芋甘藷の作法と簡易貯藏法とを發見しました。要之翁が農産上の習得は、文に學んだものゝ外は全く自己が實驗工夫に出でたものと云はれてゐます。安政四年十二月、翁が二十六の時父傳次平が歿しました。翁は家業を繼いで其の名を繼承して傳次平と改めました。翁も亦父と同じく農業の暇を以て讀書算數を近傍の子弟に授けました。翁に就いて學ぶ者數十人、翁の子弟を遇するや親切懇到、嘗て叱責したことがなかつたさうです。而も弟子能く其の徳に化し、皆品行方正、世の青年輩に似ず能く家業を努めたと云ひます。

選ばれて名主となるや。云々

此の段は翁の村吏時代を叙してゐます。

翁の徳望漸く高く、父歿するの翌年即ち安政五年正月二十二日、翁年二十七を以て始めて選ばれて名主となりました。翁は豫て其の地方の田畑數百町歩が時々早魃の害を受けるを憂へてゐましたが、名主となるや他の村吏と諮り、赤城山の原野に植林して水源を涵養せんことを領主前橋侯に建議して其の採用するところとなり、三年に亘つて自ら率先して植付の勞に當り、遂に赤城山南麓の秣場に四百餘町歩の松林を造出するに至りました。今の芳賀、富士見、北橋、横野の各村に亘つて、鬱蒼たる官林がそれです。後明治七年士族授産の爲、此の官林を伐採して前橋藩士に分與するの議がありました。翁はそれを聞いて大いに驚き、直に早魃豫防の官林として永久に存在せしめんことを其の筋に建議しましたので、大藏省は特に吏を派して臨檢し、翁の議を採用して其の事なきを得たと云ひます。

明治初年、三十六箇村の大總代に任ぜらる。云々

此の段は翁が三十六ヶ村の總代となつて、勸農に力を用ひたことを叙してゐます。

萬延元年二月、翁は村の定例に依つて職を辭し、世の煩累を避け専ら農蠶のことに従ひ、傍ら童蒙に教授しました。思へらく、公職を奉ずるに至れば俗事に忙殺せらるゝ結果、豫て好める研

究を進めることが出来ないばかりでなく、從來の施設までも擧げて放擲しなければならぬことになる。これは我が志ではない。如かず公職を奉ぜざらんにはと、即ち斷然剃髮して其の決心を明にしました。而も郷人の信頼は容易に之を許さず、慶應三年正月再び名主に當選し、明治元年十月十二日、前橋侯松平大和守直克公翁に命ずるに原之郷外三十五ヶ村の大總代を以てし、二人扶持を賜りました。翁は固辭すること再三皆許されず、止むを得ずして髭をつけて就職し、公事を行ふ時には常に髭を懷中に探つて之を着けました。郷人口善惡なき者は窃に字して、「傳次平法頭」と云ひました。翁が事に當るや苟も忽せにせず、之を以て治績能く擧り、明治三年二月郷中取締役勸農方兼勤を命ぜられました。忠勤の功に依り賞を受くること數次、されど公職は固より翁の志ではありませんでしたから、三年十二月十二日兼勤を辭職しました。同五年正月組頭役となり、同六年正月二十日又辭職しました。其の三月三十日を以て勢多郡北代田村八幡社及び其の他十有餘社の祠掌となりました。仍て時々町村に出張して勸善懲惡の説教をなし、併せて農蠶改良の方法を講じました。當時養蠶の業が尙ほ未だ振はず、僅かに飼育せる蠶兒も専ら婦女子の手に一任して、男子の殆んど顧る者なき状態でありましたから、翁は到る處に其の謬見なるを説き、養蠶の業は男子の専務としなければならぬことを唱へ、兼て飼育の方法を俗耳に入易い極めて卑

近なチヨボクレ節と云ふものに作つて、祭日又は集會の席など衆人群集せる處に於て朗讀せしめましたから、人々は漸く其の説に服し、漸次蠶業の改良を見るに至りました。男子の進んで蠶業に従事するに至つたのは、實に翁の首唱の力大きにあつたものと言はなければなりません。翁の熱心は之に止まらず、尙ほ普く世人を警醒せんと欲して右のチヨボクレ節を印刷して廣く近傍各村に配布しました。其後引續いて自己が多年實際の餘暇になれる稻作、甘藷、里芋等の培養耕種の法をチヨボクレ節に作つて、自費を以て印刷に附し各地に配布しましたが、其數實に一萬に達したと云ひます。

翁の文學は頗る平民的のものでありまして、其の文章は極めて平易な普通文體を以てしてみました。俳偈は翁の得意とするところでありまして、時々所感を俳偈に依つて發表しました。尙ほ又農業上の改良事項を俗耳に入易く、且つ記憶に便する爲チヨボクレ節即ち阿呆陀羅經に作つて村民に示したのは前に述べた通りです。左に翁の俳句二三を擧げ、其の俳風の一斑を想像するの資に供しませう。

笑ふ子の大きくなるや今朝の春

梅ヶ香やたびたび風呂を呼びに来る

油斷して寝た夜に柳青みけり

降りさうな雲から出たり夏の月

卯の花や道のなくなる村境

山里や藤にふさがるくゞり窓

冷汁のかんばんみゆる峠かな

案の外輕う落ちたる一葉かな

ありだけの山が見ゆるや秋の夕

鳴の立つあとから出たり渡し守

幼子をほめて髪ゆふ小春かな

一夜かる宿さへ寒し鳴く千鳥

鶏の嘴にもおくや霜ばしら

つき合す膝に日のさす師走かな

澁柿を知らで指さす子供かな

目と耳に風薫りけり東山

大根によき香あり櫻島

此寺の寶や月を清見潟

以て其の詩藻の一斑が想像されませう。

時に内務卿大久保利通は、産業の發達に力を注ぎ、云々

此の段は翁が選ばれて官吏となつたことを叙してゐます。

翁が農蠶の事に老熟なることは遂に官の認むるところとなり、熊谷縣の當時から群馬縣に至つても、勸農の事に就いては官は屢々翁の意見を徴し、又翁に依囑して改良のことに従はしめました。明治六年三月二日（熊谷縣當時）官は管内有爲の人物を岩鼻に召集して諮問のことがあり、翁も亦其の中にありました。子弟教育の途如何と問はれて、翁は「學者にあらざれば知らず」と答へ、再度の詰問に遭つて、さらば予は百姓の事故我が道を以て答へんのみと、

『子弟教育は耕作を爲すが如く、大根を太らすに米糠を用ひ、漬菜を繁茂さするにはフスマを用ひ、桑苗を殖すには簾伏を用ひ、各其の所の入用に順ひ、其の種に隨ひ、蒔く時節を失ふべからず。子弟教育も亦如此、國家入用の人物に仕立候儀に可有之奉存候 敬白』と記して差出したと云ひます。

縣令揖取素彦は能く翁を知り、信頼が頗る厚く、事毎に翁の意見を聴取してゐました。明治八年三月時の内務卿大久保利通が府縣に令して、各管内に於て現業練熟、且つ老實なる農學家精選の上、樹藝、養蠶、本草三科の中にて特秀の者一兩名を選抜推薦せしめました。素彦は即ち翁を

以て之に應じました。

之より先大久保内務卿は一日速水堅曹（富岡製糸場長たりし人）に問ふに、『本邦に於て農事を改良すべき適任者なきか』を以てしました。堅曹答ふるに翁を以てしました。堅曹は前橋藩士であつて、翁と友として親交がありました。翁の前橋に出づるや必ず堅曹を訪ひ、會談時の移るを忘れました。是を以て堅曹は能く翁を知つてゐたのであります。後堅曹は當時のことを語つて云ふには

『極めて適任の人あり、されど其の人は月給三百圓位ならでは出仕せざるべしと、公の曰く、かゝる人物果して日本にあるべきか、よしありとするも政府はかゝる高給の人を用ゆるに堪へずとありしかば、余更に、否とよ、必しも三百圓を支給するに及びし、其の人はそれだけの價值ありとして待遇せざらんには、金錢の如きは多寡を論ぜざるべし、三十圓にても可ならんと云ひしに、公の曰く、其の人を誰とか爲す、余答ふるに群馬縣の老農船津傳次平なりを以てせり、云々』

と、大久保内務卿は内外の推薦に依つて翁の名を知り、即ち速水堅曹の設立經營に係る群馬縣勢多郡關根村製糸場の視察に託して、勸業頭松方正義を從へて前橋に至り、翁を引見し親しく農

業上の所見を聞き、其の用ふるに足るを喜び、本邦農事改良の爲出仕すべきことを諭しました。實に明治十年十月二十三日のことでありました。翁は未だ決するところがありません。縣令揖取素彦は頻に出仕を勸めて已みません。翁は即ち意を決して上京し、十年十二月二十四日を以て内務省御用掛勸業局事務取扱の辭令を受けました。これ實に翁が仕官の始めであります。時に年四十六。

當時駒場の地たる茫々たる荒原なりければ、云々

此の段と次の段とは翁が駒場農學校の創設に力を用ひたことゝ、其の逸話とを叙してゐます。翁が駒場にあるや、駒場農學校の校内段別五十三町步の中六町五段步の地を開墾して、農場を作ることに従事しました。翁は先づ原野中に假屋を造つて之に居り、鉢巻をなし股引を穿ち、自ら鋤を手にして人夫を督勵しました。一日大久保公は、親しく開墾の實況を視察せんとして臨場せられ、翁の在らざるを怪しみ、人夫に就いて搜索し、始めて翁が全く人夫と伍して勤勞を共にしてゐるのを見て驚き問ふて言ひますには、『斯く自ら人夫と其の勞を同じうせば、種々の事務上の調査を爲す時が無からう。如何にするか』と、翁は答へるに凡て調査上の事は夜業と定めてゐるので、聊かも差支へること無きことを以てしました。翁の精力絶倫なことは此の一例でも知ら

れませう。公は又『假屋中の夜業定めし物寂しく感ずるであらう。』と、翁は『駒場の地は都人士の豫想外な自然の詩境である。絶えず天來の妙音を聞くを得、又何ぞ寂寥を感ぜんや』と云つて

駒場野や開き残りにくつわ蟲

の俳句を以てしました。

翁が當時の實驗談に山の開墾は別に資金を要しない。發掘せる樹木の根を焼きて木炭を製せば裕に其の資を得べし。と、地味瘦薄にして惡草瀾漫せる駒場野も、翁の力に依つて遂に沃饒なる熟圃と化しました。

かくて駒場に勤むること八年、云々

此の段は翁が學理と實際とに兼通じてゐたことを叙してゐます。

始め大久保公は翁が出仕に意なきを知るや、獎勵頗る努め且つ曰く、唯々駒場農學校に來つて實業を默視すれば足ると、茲に至つて右の辭令を受け職を農學校に奉じ、校長關澤清明を助けて農事の現業を指導し、別に十一年三月から十九年七月まで本科生及び試業科生（別科生）の爲、本邦農事の講義を爲しました。農學校幹事片山遠平翁が當時の講義を學生の筆記せるものゝ中か

ら、桑樹栽培に關する部を拔萃して『栽桑實驗錄』と名づけましたが、此の書は明治十六年に農務局から出版して世に公にされました。

翁が農學校にある時、明治十四年一月、岐阜縣令の懇請に依つて岐阜農學校に出張を乞はれ、該校生徒に對して三十日間、本邦農事の講義及びこれが實際を授けたことがありました。其の後頻りに再出張を乞ふて已みませんでした。果しませんでした。

斯くて農學校に居ること八年、後農商務省農務局に轉じ、樹藝課を本務とし、蠶桑課を兼務しました。樹藝課とは穀菽、野菜、果樹は勿論、其他栽培上に關係する普通農事の諸件を取扱ふところでありました。これから以後翁は各府縣に出張講話に忙はしく、殆ど席の暖まる暇がありませんでした。明治二十四年までに、沖繩縣其他二三島を除くの外、ほぼ日本全國を巡回し盡しましたので、知人は會して祝宴を張り、來客一同三組の銀盃を贈つて之を祝しました。盃中に『賀船津君日本周遊』の八文字を現はし、裏に『農商務省及農科大學員等知二十六名』と刻しました。其の後更に七年の久しき出張講話に寧日がありませんでしたから、府縣に依つては再三再四足を入れた所が少くありません。翁が國本培養の爲に勞したことは、實に多大であつたと云はなければなりません。大日本農會は爲に有功賞を贈與して其の名譽を表彰し、賞勳局は勅定の藍

綬褒章を賜ふて其の功績を永遠に傳へました。

傳次平かつて赤城山に草刈してありし折、云々

此の段は翁が少時の逸話で、翁が實驗に熱心であつたことを叙してゐます。

翁の郷地は赤城の南麓にありましたので、少壯子弟は夏時早起して馬を牽き、赤城山の山野に草刈に行くのを常としてゐました。翁も亦其の中の一人でしたが、しかも翁の原野に至るや、單に草を刈取り來るのみを能事了れりとしません。必ず原野に就いて草木の繁茂枯落の状況を考察しました。一日茅の一株が若しく秀でてゐるのを見て、これが原因を探究して、其の傍らに大きな石があつて、太陽の高熱を受けて之を反射放出して茅を温むるが故だと自得し、喜び歸つて己が畑に植付けた植物の根本に同様一本毎に石を並べて之を試みたことがあります。又或る時の如きは菊の培養の爲に土壤を改造しようと思立つて、自ら數里を隔てた伊香保原に往復して、淺間の火山灰を脊負つて來て試作したことなどもあります。其の熱心は往々斯の如きものがありました。二十歳の頃工夫研究の結果里芋・甘藷の作法と、簡易貯藏法とを發見しました。

彼後に農商務省に入り、更に農事試験場に轉じ技師に任せられ、云々

翁の晩年です。

翁は官に在ること實に二十年、其の間東奔西走、南船北馬、席暖たまるに暇なく各府縣に出張して農事の改良を指導し、諄々説いて倦むところがありませんでした。明治三十一年三月其の健康著しく衰へ又激職に堪へませんでしたから、職を辭せんことを乞ひ、其の三十一日を以て非職の恩命を受け、故山に歸休し靜かに晩年を養はんことを期しました。官は翁の材を惜しみ、非職を命ずると同時に農事試験事項の調査を囑託しました。翁は家に歸つて新に一室を營み、養老の居と爲さんと欲し、自ら工事を監督して、工殆ど成つて俄に病を發しました。病むこと數日、病の少しく間なる時は立つて親しく工事を指揮しました。六月十五日病頓に革り、醫藥其の効なく、晚鐘無常を報ずるの刻を以て遂に其の新室に永眠しました。時に年六十七。

同七月二十日、嗣子傳次郎禮を具へて翁の遺骸を原之郷先塋の墓側に葬りました。遠近集り會して禮を助け、未曾有の盛況を極めました。其の後嗣子傳次郎は碑を翁の墓地に建てました。碑は祖先に倣つて至つて質素なものでしたが、石質構造に意を用ひ、前面に「故正七位船津傳次平之墓」右側に「天津院義嚴行善清居士」裏面に「駒場野や開き残りにくつわ蟲」「こぼれても草間にきえず春の露」の俳句を刻し、又左側には保岡亮吉氏の撰並書に係る次の碑銘を刻してゐます。

船津氏、上州勢多郡原之郷世農、君天保三年十一月一日生、幼名市造、後改傳次平、自少時、精算法、傍嗜俳歌、至其田圃山林、栽培養殖之術、平生專心所在、多所發揮、明治十年、故大久保内務卿起君、使司教駒場農學校、尋巡教諸縣、皆爭乞君講說、足跡天下、無所不到、叙正七位、任農事試驗場技師、在職二十年餘、歸郷、纔數月、以疾而卒、年六十七、明治三十一年六月十五日也、君以農夫起身、名聞當時、利播後代、亦偉哉。

東京府飛鳥山の櫻樹立ち並ぶ處、彼の傳を刻したる丈餘の碑あり。云々

此の段は結尾で、其餘榮を叙してゐます。

飛鳥山の碑は、飛鳥山公園南隅の一角に建てられてゐて、篆額は大日本農會々頭故小松宮彰仁親王殿下の御染筆、碑文は故品川子爵の撰、小野鷲堂氏の書、碑石の高さ一丈餘、幅八尺、建設の境域約十四坪、之に松其の他の樹木を配し、芝を植ゑ、周圍の垣に馬糞に形どりたる鐵柵を八稜に圍らしてゐます。

「農閑」 農繁に對する語で、農事のひま「農隙」に同じ。

「播種」 種子をまくこと、孟子の「今夫粢麥、播種而耨之。」に出づ。

「涵養」 「涵」はひたすの義、涵養は自然にしみこむやうに教へ養ふこと、陳書の「王者之德、覃及無方、矧彼翔沉、孰非涵養」に出づ。

「俗謡」 通俗の謡ひ物の意で、一般民間に行はるゝ歌曲、古くは催馬樂、今様、早歌の類、近くは小唄、箏歌、長唄、端唄の類の總稱、

「感激」 後漢書の「感激忘身」に出で、深く感じ入りて奮激すること、「感奮」に同じ、

「茫々」 左傳の「茫々禹跡、畫爲九州」に出で、廣々として果のつかぬさま。

「駒場野や開き残りにくつわ蟲」 茫々たる荒野の駒場野は一見如何にも殺風景のやうだが、しかし住めば都だ、開墾地の片すみに残つた草原には、夜になると毎晩くつわ蟲が鳴いて何とも云へない趣がある。——といふのである。

「藍綬褒章」 褒章の一つで、學術技藝上の發明、改良、著述、教育、衛生、慈善、防疫の事業、學校、病院の建設、道路河渠、堤防、橋梁の修築、田野の墾闢、森林の栽培、生産の繁殖、農商工業の發達に關して公衆の利益を興し成績著名なる者、又は公同の事務に勤勉

し、勞效顯著なる者に賜ふもの、藍色の綬を以て左助に佩ぶ。

【篆額】 舊唐書の『華嘗爲魯山令元德秀墓碑』、顏真卿書、李陽冰篆額、後人爭摸寫之、號爲『四絶碑』に出で、石碑などの上部に篆文にて書したる題字、

【小松宮彰仁親王】 初め東伏見宮、後小松宮と改め給ふ。仁孝天皇御養子伏見宮一品邦家親王の第八子弘化三年正月十六日御誕生、明治元年正月軍事總裁となり、尋いで征東大將軍に拜せらる。同二十三年六月陸軍大將に任じ、翌年十二月近衛師團長に補す。同二十八年一月參謀總長に補し、三月征清役第二期作戰に當り征清大總督を拜せらる。同三十一年一月元帥府に列せられ、特に元帥の稱號を賜ふ。同三十五年二月英國皇帝皇后戴冠式參列の爲差遣、同三十六年一月薨去、御年五十八、殿下は軍務の外、日本赤十字社、大日本水産會、大日本山林會、大日本武徳會、大日本鹽業會、大日本農會等に總裁として會務を統督し給ふ。二月國葬を以て音羽護國寺豊島ヶ岡に葬り奉る。

【品川彌二郎】 政治家、念佛庵と號す。天保十四年長門萩の松本村に生る。十五歳にして松下村塾に學び、松陰の刑に死するや憤然として江戸に上る。時に年十八、久坂義助、高杉晋作等と共に天下の志士に交り、盛に尊王攘夷の大義を首唱す。戊辰の役御楯隊を率ゐて

東北各地に轉戦して功あり、明治三年普佛戰爭視察の爲渡歐、視察後獨英兩國間に留學すること數年、明治六年外務二等書記官に任じ、獨逸公使の事務を執る。同十三年内務少輔となり、同十四年農商務省新設に當つて其の少輔に任ぜらる。同二十四年内務大臣となり、後野に下つて西郷從道と共に國民協會を組織す。又夙に信用組合を獎勵し、大日本水産會、大日本農會大日本山林會等に力を效し、地方産業の發達に傾倒せしところ少からず、同三十三年病を得て長逝、時に年五十八、

補充文には近世實業界の偉人『金原明善翁』の略傳を擧げておきませう。

金原明善

金原明善は天保三年六月靜岡縣濱名郡和田村に生る。少より廣く史籍を涉獵して事理を究め、殊に經濟に精通せるを以て郷黨其の教を請ふ。奉公の志厚く、養蠶、植林、牧畜を獎勵し、愛知靜岡兩縣下を遊説し、荒蕪を拓き桑苗を植ゑしむ。

又天龍川の氾濫して沿岸の田圃其の水害を蒙ること多きを以て、家産十萬圓を工費に獻じ河身浚渫を當局に請願す。時の内務大臣大久保利通其の至情に感じ、請を容れ之が改修を始

め、其の工事を監督せしむ。竣成後獻納に倍する金額を以て之を賞し、其の勞を慰む、明善再三固辭す。許されず。乃ち其の金額を社會事業に投じ、自ら清貧に甘んず。朝廷功を賞し藍綬褒賞を授く。

偶々明治天皇行幸あらせられ、其の徳行を聞しめされ歡感の餘り拜謁仰付らるべき御沙汰ありしかば、明善木綿服を紺染にし、紙紋を張りて天顔を拜す。

後家事を長男明德に委ねて上京し、日本橋田所町に爲替屋を開き、八丈島の特産物を販賣し、東里組商社を創めて支社を八丈島に置く。

明治十八年爲替屋を東里商屋と改稱す。其の後時勢の推移に見る處あり、之を廢して合名會社金原銀行を創立し、盤根錯節を排して新生面を開き、後郷里に歸つて村長に擧げられ、誠意公共事業に盡し、治績大に擧る。

後年上京して香油、煉油、香水等化粧品を販賣し、屋號を井筒屋と稱し、商品の確實精良を期し、經營適切、未だ曾て商機を逸せず、其の名商界に喧傳せらる。

明善、儉素、簡樸、自ら奉ずる處薄しと雖も、能く集めて能く散す。三十三年苦心の經營になる山林を御料林に寄進し、五萬圓を下賜せらる。又出獄人保護に盡し、濟生會に數萬圓

を寄附する等、社會事業に貢獻せる所多し。是等の功により金杯を賜はり、正五位勳三等に叙せらる。大正十二年一月、九十二歳を以て歿す。特旨を以て御紋章入銀製花瓶を賜ひ、從四位に叙し紺綬褒章を授く。

第二十三課 漁船歸る

全然創作に成つてゐます。

鯉の大漁の光景を叙したもので、漁村の壯快な生活を描き出したところに味があります。

山村暮鳥氏の詩に

父よ、

おいらも

行きてえな

大きな海の

まんなかで

おいらも鯉が
釣つて見てえな
おいらも舟に
乗りてえな。

待つてろ

待つてろ

その腕が

櫂の木のやうに

なるまで

といふのがあります。此の氣持です。

のんびりした漁村を背景にして、勇ましく漕寄せる大漁船と、それを喜んで迎へる群衆との調和がシツクリと合つてゐて、可なり新しい印象的描寫の味を見せてゐます。

文は八段に分れてゐて、第一段は海邊の光景、第二段は入船の知らせ、第三段は船を待つ人々、

第四段は歸船の光景、第五段は大漁の目標、第六段は海邊の有様、第七段は漕寄せる船の壯觀、第八段は運び揚げる海の幸——文の山は七段の『やつさ、ほいさ』と、大漁船が勇ましく漕寄せる光景を叙した邊りにあります。

焼けつくやうな夕日は、さへぎるものもない白い砂を真赤に染めてゐる。云々

第一段は海邊の光景で全篇の背景です。全然創作に成つてゐますから、何處の海岸だかハツキリしませんが『焼けつくやうな夕日は、さへぎるものもない云々』といひ、『風のないだ海の波は、小山のやうに寄せて來ては云々』といひ、何となく荒海に面した南國のそれが思ひ浮べられます。先づ薩摩の枕崎邊りか、それとも夏の九十九里濱か、兎に角南國情調が濃厚に出てゐるところを看逃してはなりません。

『だぶりとけだるい音に崩れると、ざ、ざ、ざ、ざと布を敷いたやうに廣がる』といひ、『其の波先がきら／＼と日に輝いては、すぐさつと引いて行く』といひ、漁村の夕べが見るやうです。

『船がはいるよう。』

人影一つない廣い濱の何處からか、急にかん高い子供の聲が起る。云々

此の教材は會話が好く据つて全篇の情調を引立ててゐます。人影一つ見えなかつた靜かな海邊、

何處からか突然『船がはいるよう』と叫ぶ子供のかん高い聲がする。それをきつかけに其處からも此處からも『おうい』『今行くよう』といふ聲が聞える。さうして松の間や若の陰から年寄、子供、男、女がぞろ／＼と群を成して集まつて来る――

今まで眠つたやうな濱邊は急に賑かになつて、みな一齊に沖合遙に漕寄せて来る船を見つめる――

高い砂山の上に立つて小手を翳して沖合を見つめて居た一人が、『真先が明神下の船だ』と叫ぶと、『うん、うちの船か』と四五人が元氣よく砂山の上に駈登る。眞に光景目睹です。すべてが活氣に充ち満ちてゐて、活潑潑地の漁村生活が躍如として眼前に浮び出ます。

殊に沖から歸つて来る船を『朱を流したやうに夕焼に染まつた沖の方からは、黒い帆影がぼつ／＼と描いた筆致の巧妙さは、讀者をして一讀思はず文中の人たらしめます。『黒い帆影がぼつ／＼と描いた筆致の巧妙さは、讀者をして一讀思はず文中の人たらしめます。』の『ぼつ／＼』が能く利けてゐます。

福田正夫氏の詩に

大漁のよろこび

沖から一ぱいの歡喜が走つて来る――

夕がしづ／＼と寄つて来る頃

さうして濱一帯のよろこびとなる

其の象徴は、

舳朱の旗――大漁の白文字勇ましく

輝いてゐる漁夫の生命だ

船は眞一文字に陸に寄る

さう――さうして幼年弱等は踊り

その子の母等は綱をとる

魚市場の若い衆は後鉢巻で威勢よく駈けまはる

えんやえんや――掛聲勇ましく

船は陸へ引き上げられる

魚等は白い腹を夕闇の中に投出し

砂にまみれて籠へ移る

白いバラソルの浮いた薄明りの街に黒い漁夫の

肉がくるくまはる

この宵はまた絃歌の聲がしきりであらう

磯の荒い叫びが街から街へ狂ふであらう

自分は唯――

いつばいに迫つて来る其の大きいなる喜びを知る……………

まるで其の儘といつても宜い位能く似寄つてゐます。取扱の場合に讀んで聽かせたら、一段の興味を咬りませう。

『あゝ、また見えた。今度は太兵衛どんのうちのだ。』

と誰かがまた叫ぶ。云々

何といふ冴えた筆致でせう。印象描寫も是位まで行つたら申分はありません。『湧くく。沖の

波の間から、小さい船が一つ又一つ、後から後から視界にはいて来る』といった邊り、描寫の巧妙さは何とも言へません。

『濱に立つてゐる人々は、皆言合はせたやうに我が家の船を見守る』といひ、『子供たちはもうはしやぎきつて、緩く打ちつける波先を追つては逃げ、逃げてはまた追ふ。』といひ、獲物を積んで掛聲勇ましく歸つて来る漁船を前にして眞に情景一致、光景目睹の感があります。殊に、『あゝ、また見えた。今度は太兵衛どんのうちのだ』の會話は『湧くく。沖の波の間から、小さい船が一つ又一つ』と相應じて漁村情調が溢れんばかりに盛上つてゐます。

船は幾艘も續いて、ないだ海に夕日を受けた帆が美しく並ぶ。云々

漕寄せて来る漁船の光景です。次から次へと幾艘も續いて漕寄せて来る船、美しい夕日沿ひてきら／＼光る白帆、群飛ぶかもめ、穏かな海、まるで繪にでもしたいやうな光景です。劇で云つたらこゝらが背景で、この背景描寫が利けてゐるので文に一段と趣を添へてゐます。

『大れふだぞ。あの帆柱を見ろ。』

群集の中の誰かが叫ぶ。次第に近寄つて来る船の帆綱には、幾つもの編笠が飾のやうにつるされてゐる。云々

何といふ潤ひのある筆致でせう。「大れふだぞ。あの帆柱を見ろ」に、讀者の頭にはもう帆柱の大漁標がハツキリ浮び出ます。説明が説明に墮しないで巧く情景の中に織込まれてゐるところを味つて見たいものです。

大漁の標には幾つもの編笠が飾のやうに吊されます。その一つが百尾の目安となつてゐます。こゝらの説明を巧く情景に織込んだところに作者に筆の冴えさ加減が窺はれます。

九十九里濱では大漁幟といふのを立てることになつてゐます。さうしてあの名高い大漁節といふのが唄はれます。そこらの情景は漁村でなければ味へません。

大漁節

- 一つとせ 一番づゝに積立て、川口押込む大矢聲この大漁舟
- 二つとせ 二た間の沖から外川までつゞいて寄せ來る大矢聲この大漁舟
- 三つとせ 皆一同にまねをあげ通はせ舟の賑かさこの大漁舟
- 四つとせ 夜ひる焚いてもたきあまる三杯一丁の大いわしこの大漁舟
- 五つとせ いつ來て見ても干鯛場は明き間もすき間も更になしこの大漁舟

六つとせ 六つから六つまで粕わりが大割小わりで手に追れこの大漁舟

七つとせ 名高き利根川高瀬舟粕や油を積み送るこの大漁舟

八つとせ はちだの沖合若い衆が萬祝そろへて宮参りこの大漁舟

九つとせ この浦守る川口の明神御利益あらはせるこの大漁舟

十とせ 十を重ねて百となる千を飛び越す萬漁年この大漁舟

これは九十九里濱の大漁節ですが、田舎藝術の味はまた一入です。

濱には益々人數が増して、右往左往に入亂れる。云々

船はいよ／＼岸に近づく。待焦れた人達は右往左往に入亂れる。「籠を持つてゐるもの」「棒をかついでゐるもの」「飛廻る子供」「それを追ふ犬」と疊みかけて、右に往き左に往き、彼方此方に入亂れて——所謂右往左往の有様を想はせてゐます。きび／＼した筆致が緊張しきつた氣持とシツクリ合つてゐるところを味つて見たいものです。

やつさ、ほいさ、やつさ、ほいさ、十挺船の勇ましい掛聲は次第に近づいて、高波を乗越え、見る間に一艘二艘と寄つて來る。云々

こゝは愈々船を漕寄せるところで此の文の山になつてゐます。

十挺船の勇ましい掛聲、やつさ、ほつさと漕寄せる濱邊、風いだ海でもやつぱり荒海です。岸に近づくと大きなうねりがドタリ〜と打寄せる。その波を乗越え〜一艘二艘と岸邊に船を漕着ける。

三四十間の處まで來たと思ふと、ぐるりと船が廻る。艦の方からは仁王のやうなたくましい姿がヌツと現れる。

『綱を投げるぞ——』

太い綱がドタリと投げられる。肉體美を發揮した若い逞しい男がザンブリ水に飛込む。

『えつさ、えつさ——』

船を押す、綱を引く。艦は小山のやうに陸に向つてピタリとすわる。

眞に光景目睹です。

十挺船は船を十挺つけて漕ぐ船のことで、兩側に五挺づゝ船をつけて勇ましい掛聲に調子を合せて漕ぐ船のことです。

船からは勇ましい掛聲と共に、次から次と獲物が運ばれて、白い砂の上に投出される。云々末段の魚の描寫は一段と筆致の妙を極めてゐます。『瑠璃のやうにすんだ目』『紫を含んだ青色

の背』『勢よく張つた尾・鰭』、白い砂の上には見る見る海の幸が山のやうに積上げられる。

ドツと揚がる歡聲！ それは戰捷を祝ふ戰士のそれにも比すべく、漁村の夕は歡喜と平和に満たされてゐます。

『海幸』は古事記の海佐知山佐知から出た言葉で、古事記の神代の卷に『火照の命は海幸毘古として、鰭の廣物、鰭の狭物を取り給ひ、火遠理の命は山幸毘古として、毛の麤物毛の柔物を取り給ひき云々』とあるのが其れです。『幸』は『さき』と訓むべきですが『幸取』の意から『さち』と變化し、『海幸』『山幸』と訓むやうになつたのです。萬葉集に『さつ矢』『さつ弓』『さつ地』『さつ人』などのあるのが其れで、其の主體に對する總ての吉事を意味してゐます。此處では海の獲物を祝ふ意味で、漁獲した鰹を指してゐます。

『瑠璃』は寶玉の一、青色を普通としますが、他に白赤黒綠紺紅等の種類もあります。しかし單に瑠璃色と稱する場合には、紫色を帯びた紺色、即ち紺碧のものに限られてゐます。こゝでもやはり紺碧の意で、清澄な水のそのやうに美しく輝いてゐる有様を形容したもののなのです。この文は擬聲や擬容が澤山使はれてゐて、それがみんな生きてゐます。

『だぶり』……………如何にもだる氣な波の音、しかも風のない平穩な海が動きたくもないのに

向ふから押されるまんま、岸近くよつて砂の上のたれかゝるやうな波の情景が其の儘に見えるやうです。

「ち、ち、ち、ち、ち」……この四つの『ち』がよく据つて情景目睹の感を興へます。三つでは物足りないし、五つでは多過ぎる。さら／＼でもこの感じは表はせないし、さぶ／＼でも乗つて来ない。やはりこゝはざ、ざ、ざでないと波のおし寄せて来る静かな濱の夕の氣持が出て来ません。

「さつと引く」……さ、さ、さに對して、『さつ』と引く——調子が如何にも氣持よく、寄せて返す女波男波の有様が見るやうです。

「ぞろ／＼」……忙しさうでもなく、急ぐでもなく、唯群をなして濱邊に集まつて来る有様。

「やつさ、ほいさ、やつさ、ほいさ」……勇ましい掛聲と櫓の音が遠くで聞えるやうな感じがあります。

「えつさ、えつさ、えつさ、えつさ」……初めの『えつさ』を強めて、次の『えつさ』を低くし、強弱緩急をはかつて聲に調子をつけて讀んで見ますと、いつか知ら自

分も漁夫と一緒になつて船を陸へ引き上げてゐるやうな氣持になります。

こゝらの情調は讀ませる場合に適宜指導して、表現の巧妙さを充分に味はせて見なければなりません。

補充文にはずつと以前に出てゐた『雑誌ホト、ギス』の中から、次の『鱧釣』の一文をあげておきませう。

鱧 釣

夏の初、南洋道島に航海した歸途の事である。馬尼刺を出帆してから五日目と云ふ日に連日の風で、日本最大の帆船、四本櫓バークの大成丸は、三十有餘の帆を展じてゐながら僅かに呂宋島を離れた邊を漂うてゐる。僕は此の時、船尾の舷側に飛出して居る端艇吊柱の上に、つくねんと止つて鏽落をやつて居る。此の時、艫の方でが／＼人聲がするのが耳にはいつたので、其方を振向くと、人集がして、何か言罵つてゐる。直に、グヴィットから滑り下りて駈付ける。目を皿にして見下すと、大きな鱧が一匹、海中をあちらこちらとゆつたり泳ぎ廻つてゐる。鱧と云ふと、直ぐ獍猛なものと思はれるが、今此處から、綺麗な海水をすかし

て眺めると、たゞ美しい愛らしいといふ感じがするばかりである。身を軽く轉する度に、白いつやのある腹をちらりと見せて、日光に映る脊中が眞珠の様な光を放つ。隣に居る友達に『水先魚を見給へ。』と教へられて、よく見ると、鱸の願の下をちよろ／＼と忙しく泳いで居る一匹の小魚がある。一進、一退、右往、左轉、影の形に添ふやうに、小魚は鱸と一緒に動く。小魚が動いて鱸が動くのか、鱸が動いて小魚が動くのか分らぬ。殆ど同時である。かの鋭い眼を持つて、進退自在な鱸が、この水先を要するとは、一寸不思議である。併し幾ら空腹な時でも、こればかりは食はずに保護して居るのは、何か鱸に弱點が無くてはならん。

『早く鉤に何でも餌を付けて出せ。』と口々に叫ぶと老水夫長が『あまり大きな聲を出して騒いではだ目だ。』と例の落付いた調子で云ふ。見ると、人の好ささうな顔をして、切りと小さな鎖に大きな鉤を付けて、それに鮭の頭を引掛けて居る。暫時は、水夫長の顔と手先を交る／＼に眺めてゐる。

其の中、釣道具も出来上つたので、鉤をばかりと海の中へ投げ込む。それが、つひ鱸の頭の邊に落ちたが、びくりともしない。大様なものである。大様ではあるが、鮭の頭は食ひたらし／＼。一寸來ては、當つて見る。が、一向腹を返さない。腹を見せなければ食はないの

だ。二三遍其處らを廻つては餌に來て、またついと後の方に姿を隠して仕舞ふ。『鮭は食ひたいが、後に付いて居る綱が氣にくはぬ。』と云ふ様子である。

少時見えないので、氣の早い連中は、『もう逃げたのか。』と落膽する。『一旦鱸が附いたら、容易に退くものではない。』と一人の水夫がしたり顔に云ふ。『鱸は大抵、一匹は來ないが、是は哨艦だらう。』といふのは、海軍出身の舵取である。『來た、／＼。』と叫ぶ者があゝる。見ると、猛勢に突進して來る。『さては、思ひ返して食ふ氣かな。』と固唾を飲んで見て居ると、また一寸當つたきり、知らぬ顔をしてゐる。其處へ、船長が、ビール腹を抱へる様にして、やつて來て、例の微笑を含みながら、『皆、鱸に吞まれて、仕事を止めてはいけません。』と小さいが力の有る聲で、殊に語尾を明確に言ふ。乗組員は、船長の溫言を、他人が目をむいて怒るよりも、恐入つて聽くのが常で、皆、蜘蛛の子を散らすやうに、ばらばらと立去つて、各自の仕事を續ける。僕は、また、ダヴィットに立つて、カイン／＼と、鱸の事ばかり考へながら叩く。

午前の仕事が済んで、午後の作業に移つて間もなくである。『鱸が三匹來た。』と云ふから出て見ると、丁度其の時、朝から附いて居た奴が腹を見せた。『それつと云ふので、綱を手繰

つたが、此の時、彼は犇猛な性を顯はして、非常な力を以て、海から一寸も離れまいと極力抵抗する。終に、彼の力が優つたのか、綱が切れて釣落して仕舞つた。張詰めた元氣を凝らした息氣が一度に抜けて皆落膽する。

『物有り、海中に踊る。』と見れば、また鱧が引掛つたのである。誰かが『鱧が釣れた。』と大聲に叫ぶと、皆、四方八方から飛んで來た。手擦に餘つた者は、檣梯にも登つて居る。鱧は、例に依つて惡戰頗る努めて、水から出まいともがく、船ではえい／＼と綱を手繰る。『また釣落しやしないか。』と危ふんで見て居ると、此度は鉤がよく掛つたか、鱧は力盡きて、水から揚る。皆が一度に喝采する。水から出た鱧は、少しも暴れない。温順しく體重でも測るやうにぶら下つてゐる。二間は十分あらう。輪にした綱を綸に沿うて下げて鱧の胴體をくゞり、之を檣梯に附けた滑車に通して、えい／＼上げると、急に猛烈な勢で暴れ出した。最後の力戦を試みるのであらう。もうしめた。温順なものだと近寄つた連中は不意の活動にびつくりして飛退く。鱧は思ふまゝ其處らを跳廻る。危く鱧にはたかれようとした人もある。逃げかけて綱具に躓き、あはや鱧の下に敷かれようとした者もある。皆、顔色を變へて迷惑ふ。『吾が最期を見よや。』と、鱧は愈々其の威を逞しうする。併しさう何時までも暴れさせては

置かれない。氣早の連中は、キャプスタン、バーを振つて頸部を亂打する。鮮血がさつと迸つて、甲板をから紅に染める。實に慘憺たる光景である。大なる物の死は、小なる物の死よりも、一層悲惨な感じを與へる。終に數名で、胴體をくゞつた綱を曳いて、賄所の横まで運ぶ。鱧は何と思つたか、じつとして少しも動かなくなつた。意氣込んで振上げた棒が、空中で立疎む。ちと薄氣味悪く思つたのであらう。それも瞬間。三四人が聲を合はせて、頭部をめぐめて力一杯にうちおろす。が、びくりともしない。これに安心してまた試みる。更に、驚く氣色がない。眠る様に、段々弱つて行く。水夫長は『時到来り。』と腰にしたシーナイフを取つて、『柄も通れ。』と其の腹に突立てて一文字に引く。鱧は其の大きな體を僅かに動かした。覺悟を極めた鱧の死は、美はしくもまた痛はしい。臟腑を引出して、バケツで海水を何杯となく打ちかけ、鮮血を洗へば生臭い風が強く鼻を打つ。水夫長は平氣なもので、腹を奇麗に洗ひ、左右の鰭を拂ひ、更に刀を持ちかへて、背の鰭を半分切り掛けた。鱧は此の時猛然として暴れ出した。驚いて一度に皆が手を引く。彼は轉々として甲板上を轉び廻る。腹中已に空しく、人間にしては手足に當る鰭は切斷せられながら、尙、人の近づくことを許さないのである。これに辟易して、二三人が恐る／＼體軀を抑へて、漸く鰭を切落した。鱧

はこれから動かなくなつた。少時して来て見たが、鱧は面影も留めず、其の雪の様に白い生き／＼とした肉は、大きな鉢に積上げられて、傍では、賄長が西洋味辛を溶いて居た。さきに、太洋を我が物顔に泳ぎ廻つて居た鱧も、今頃は釜中の狭きをかこつてゐるであらう。

第二十四課 廣瀨武夫の手紙

廣瀨中佐が戦地から送つた手紙で、原文は大分縣教育會編『軍神廣瀨中佐詳傳』の中にあります。参考のため先づ其の原文を挙げておきませう。

毎度の御懇書は拜受再三精讀罷在候先以て姉上様にも馨ちやんにも不相變の御壯康大賀の外無之候從て武夫儀は例の頑健日夜軍務に従事罷在候間乍憚御休神被下度候毎回々々の御手紙は實に武夫に對する御友愛の情溢るゝ許りにて武夫は衷心感激の至りに堪へず乍毎度唯々感謝々々罷在候御惠贈の書籍吳羊羹耳袋並に靴足袋確に拜受仕候御厚情に酬る辭を見出不申候難有奉謝候先日大島艦入港し即夜家兄來訪被下れ戦後始めて兄弟の面會不覺嬉涙に暮れ申候

兄上様は昨今御身體壯健に被渡吳にて見し如き病後の様子更に無之在艦の同僚等も皆左様見受候程なれば御安心可然と存候武夫に於ても其點に於ては大に安堵罷在候報國丸にての働に付兄上様には非常に被悦武勇絶倫先考並に山縣先師に代りこれを激賞すとの御手紙をも戴き武夫の満足も不過之候翌朝大島は錨を抜きて出港致候處昨夜御手紙參り候不相變御壯健の趣御休神可被下候安井様よりも御手紙を戴き申候故昨日御返事を差上げ申置候其他知己諸君よりの祝詞多く新聞紙上にもあることなきこと書き立て鬼などの仇名をも付し申候など可笑もあり迷惑致候事も有之候而して報國丸にて働きし真相など武夫より親しく聞きしなど、書立て候も誤り多く迷惑に感じ候點も有之候負傷者に御見舞として煎餅との御意見は左ることながら彼等には焼などの自由無之候間御取止被下度候若し思召有之候はゞ武夫の姉として見舞狀を在佐世保病院第一室藤本金太郎武野敬次郎宛に御出被下候はゞ幸甚の至に不堪候右兩人には病院船に送る砌武野に十圓藤本に五圓丈け小遣として贈り置き候又閉塞隊の士官一統より梅原機關兵弔慰金と且つ前記兩負傷者の見舞金として『カツチング』十圓を出し置き候武夫儀は愈々軍功相勵み申すべく七生人間滅國賊とは一貫の精神に有之候間決して先度位の働きにて満足致す者に無之候元來天祐を確信し居ることに候へば決して／＼無用の御配慮被

下間敷候也再拜

三月二十日

弟 武 夫

姉上様御許へ

運送船の便よろしく不自由を感じ不申候間種々の御心遣は御無用に被遊度候時下御自愛を
祈り候

中佐が第二回の決死隊に加つて閉塞事業に赴かんとする際に兄の妻に送つた手紙で、第二回閉塞の丁度六日前に出したことになつてゐます。文の中にある、『七度人間に生まれて國賊を滅さん』の句は閉塞に向ふ時朝日艦の艦壁に題した、『七生報國、一死心堅、再期成功、含笑上船。』の句から出てゐます。中佐は當時朝日艦に乗組んでゐて、其の水雷長兼分隊長でした。中佐の兄は廣瀬勝比古氏で、其の當時大島艦の艦長でした。姉は其の夫人で名は春江、手紙の中に『馨ちゃん』とあるのは勝比古氏の娘で中佐の姪です。

廣瀬中佐は豊後直入郡竹田町の人で、父を重武と云ひ舊岡藩の士です。明治元年五月二十七日を以て生れ、少時より頗る膽力に富んでゐましたので、同輩にも推されてゐました。十六年の十

月に上京して攻玉舎に學び、十八年十一月豫ての素志であつた海軍兵學校に入學し、二十二年の四月を以て卒業して直に海軍少尉候補生となり、次いで少尉に任ぜられました。三十一年六月に露國に留學を命ぜられ、三十四年十月に歸朝しました。中佐が留學中には幾多の逸話に富んでゐましたが、其の中頗る痛快なのは、一日露國の一將校が中佐に向つて、『貴國の人は皆身體短小で逆も我々のやうな偉大な體の持主には敵ふまい』と冷笑したので、中佐は莞爾と笑つて『では試しに力較べをしよう。君の方から力の強い人を三人程選んで僕の相手に仕給へ』と臆面も無く申出ました。そこで三人の力士を選んで中佐が其の相手になりました。三人は勇を鼓して進みましたが、中佐は何の苦もなく一振り振つて皆蹴飛ばしてしまひました。其の勇ましい有様に見て居た人はみんな舌を捲いて驚き怖れました。此の事が何時しか露帝の耳に入つて、露帝は再び力士を選んで力を角せしめて、親しく其の技を見物されましたが、前の様に皆蹴飛ばされてしまひましたので、深く其の勇武を稱へられました。此の時侍従の一將校は『彼は獨り武力に卓越してゐるだけでなく、頭腦精密、精神透明で、なか／＼尋常の壯士ではありません。』と言上したといふことでもあります。此の一事でも其の平生を知ることが出来ませう。

斯て中佐は他日必ず日露事有らんことを察知し、歸國の途わざ／＼陸路を取り、嚴寒氷雪と戰

ひ、興安嶺を越え黒龍江に沿うて下り、竊に實地に就て山川の地勢、關塞の要害を討究して大いに期待する所がありました。中佐の豫期は過たず、果して三十七年の二月に至つて日露戦ひを交ゆることになりました。中佐は躍然として『自分の奉公の時は今だ』と『七生報國。』の誓書を神に捧げ、勇み進んで出陣し、數度の海戦に偉功を奏しました。

是より先中佐は二月六日を以て朝日艦に乗組んで出征したのでありますが、黄海の大海戦後、敵艦が旅順港内に蟄居するに及んで、彼の有名な旅順港閉塞の事業が行はれました。此の閉塞は前後三回に渡つて行はれましたが、中佐の加はつたのは第一回と第二回で、戦死したのは其の第二回目です。第一回の閉塞は天津丸、仁川丸、武揚丸、武州丸、報國丸の五隻を以て事に當り、中佐は其の報國丸を指揮して旅順港口に進み、燈臺下に船を坐礁せしめて引揚げました。第二回は千代丸、福井丸、彌彦丸、米山丸の四隻に決死の士六十五名を乗せて、三月二十六日を以て旅順港に向ひ、二十七日午前三時三十分を以て旅順港口に達しました。四隻の閉塞隊は驅逐艦と水雷艇隊の援護の下に旅順港の港外に達し、敵の探海燈の照射を冒して港口に直進し、約二裡に達する頃敵の発見する所となつて、兩岸の要塞及び哨艇から猛烈な砲火を受けましたが、之に屈せず相次いで港口の水道に闖入して、第一の千代丸は黄金山の西側海岸から約半鏈の所に投錨爆沈し、

第二の福井丸は千代丸の左側を過ぎて少しく前方に進み、將に投錨しようとした所を敵の驅逐艦から發つた魚形水雷が命中して爆沈しました。第三の彌彦丸も福井丸の左側に出て投錨爆沈しましたが、第四の米山丸はやゝ後れて港口に達し、敵の一驅逐艦の艦尾と衝突しながら、既に沈没した千代丸と福井丸との間を通過して水道の中央に投錨せし際、敵の魚形水雷を受けて爆沈し、隋力の爲に左岸に近く船首を左にして横に沈没しました。

中佐は第二の福井丸に坐乗してゐましたが、部下の杉野兵曹長に爆薬點火の重任を託して、既に豫定の任務を全うしましたが、爆薬點火の重任に當つてゐた杉野が居ない。中佐は部下を思ふの一念から三度船内を駈廻つたが見當らない。其の内に船體は漸次に沈没して海水は上甲板に達したので、已むを得ず斷念して、ボートに下りて本船を離れ、敵彈下を退却しようとしたが、不幸にして飛來つた一彈は中佐の頭部を撃ち碎き、忠魂義膽の中佐の體は哀れ一片の肉塊を艇内に残して海中に墜落しました。此の報が我が軍の捷報と共に本國に傳はりますと、知ると知らざるとなく皆爲に哭し、内外共に傳へて美談とし、軍神中佐の名は忽ち世界に轟き渡りました。此の間の詳しいことは當時聯合艦隊の司令長官であつた東郷大將の公報に詳しく載つてゐます。参考の爲に全文を擧げて置きます。

「聯合艦隊は去二十六日再び旅順口に向ひ、同二十七日午前三時三十分敵港閉塞を決行せり。四隻の閉塞隊は、驅逐隊及び水雷艇隊掩護の下に、旅順口港外に達し敵の探海燈の照射を冒して港口に直進し、約二海里に達する頃敵の發見する所となり、兩岸の要塞及び哨艇より、猛烈なる砲火を受けても之に屈せず、四隻相次で港口水道に闖入し、第一の千代丸は黄金山の西側に於て、海岸より約半鏈の處に投錨爆沈し、第二の福井丸は、千代丸の左側を過ぎて、少しく前方に進み投錨せんとする時、敵驅逐艦よりの魚形水雷一發命中し、次で其位地に爆發沈没し、第三の彌彦丸も、福井丸の左側に出で投錨爆沈せり。第四の米山丸は稍後れて港口に達し、敵の一驅逐艦の艦尾と衝突し乍ら、既に沈没せる千代丸と、福井丸との間を通過し、水道の中央に投錨せし時、敵の魚形水雷一發を受け爆發し、隋力の爲め左岸に近く船首を左にして横に沈没せり。敵の猛烈なる砲火の下に於て、斯くの如く閉塞船が勇敢沈着任務を遂行したるは、事業として間然する所なく、誠に賞讃するに餘りあり。唯遺憾なるは彌彦丸と米山丸との間に、尙空隙を存し完全に通路を閉塞するを得ざりし一事なりとす。此壯烈なる閉塞の再舉は、前回之に従事したる勇士の切願を容れ、將校及び機關士は、主として前回の者をして之に任せしめ、下士以下のみは新志願者を以て交代せしめたり。」

閉塞隊員中、戦死者中佐廣瀬武夫、兵曹長杉野孫七外下士卒二名、重傷中尉島田初藏、輕傷大尉正木義太、大機關士栗田官次郎以下士卒六名にして、其他は悉く無事我水雷艇隊驅逐隊に收容されたり。戦死者中福井丸の廣瀬中佐及び、杉野兵曹長の最後は頗る壯烈にして、同船の投錨せんとするや、杉野兵曹長は爆發藥に點火する爲め船倉に下りし時、敵の魚形水雷命中したるを以て、遂に戦死せるものゝ如く、廣瀬中佐は乗員を端舟に移らしめ、杉野兵曹長の見當らざるため、自ら、三たび船内を搜索したるも、船體次第に沈没海水上甲板に達せるを以て、止むを得ず端舟に下り、本船を離れ、敵彈の下を退却せる際、一巨彈中佐の頭部を撃ち、中佐の體は一片の肉塊を艇内に残して海中に墜落したるなり。中佐は平時に於ても、常に軍人の龜鑑たるのみならず、其最後に於ても萬世不滅の好鑑を残せるものと謂ふべし。」

日清日露の戦役に忠臣義士と稱へられ、勇烈無比と稱へられた人も尠くありませんでしたが、是程の讃辭を公報の上に遺したものは他に其の比を見ません。しかも是が謹嚴忠格な東郷將軍の手から出たといふことは頗る注意を要すべき所のもので、中佐の生涯は此の公報が言盡くしてゐ

ると思ひます。

中佐が將に第二回の決死隊に加つて閉塞の事業に趨かんとする際、兄勝比古氏に送つた手紙に、最も親愛なる

兄 上 様

頑弟 武 夫

第一旅順口閉塞の擧、家兄の激賞を受け、山縣元帥に代り、武勇絶倫を以てせらる。此讚辭は弟が他の千人萬人の口より出づるアラユル賞讚よりは、最も榮とする處なり。而して友愛の情は、上士の功に誇らざるを訓へ、有終の美を濟さんことを期せらる、感激の至りに不堪。今や第二回閉塞隊として、福井丸に上らんとす。賜ふ處の手書は、先考の眞影と共に收めて懐に在り、弟は天祐を確信し、再び其功を期すると共に、武士として決して家聲を汚すことなきを自信す。

七生報國。一死心堅。再期成功。含笑上船。

御叱正を乞ふ。

愈御武運の長久を祈る。再拜。

明治三十七年三月十九日

第一次閉塞に際し、八代兄其寫眞を賜り、其形影相伴ふの意を以てせられ、今回も同じく收めてポケットにあり。

勤王家大義分明。報國丹心期七生。

傳家一脈遺風在。盟舉名聲弟與兄。

寄家兄言志

弟 武 夫

第一次閉塞に際せし辭世は、御覽に入れしや否やを疑ふ。故に、筆末に記し申候。

丹心報國。一死何辭。與船瘞骨。旅順之陸。

日清戦役、扶桑にあり、其の辭世として

生于扶桑。死于扶桑。一死報國。七生護皇。

幾回云ふも志は同じ。弟は七生人間滅國賊の、楠氏の兄弟を以て精神と心得居候。其の意氣と決心とを付度するに足りませう。

此の教材は中佐が其の嫂あによに宛て、近況を報じた手紙で、中には兄弟の間の情愛が細々と書き記るされてゐます。軍神として武勇絶倫の中佐を想像してゐる私達は、此の手紙を通じて一面人として赤裸々なる中佐を見ることが出来るのであります。

文は六段に分れてゐて、第一段は安否と慰問の御禮、第二段は兄の消息、第三段は第一回閉塞の武勳に對する世評が過賞であつたと云ふこと、第四段は見舞品に餅を送ると云ふことに對しての返事、第五段は愈々軍務に勵んで功を立てると云ふこと、第六段は追て書で運送船の便があるので不自由はないから心配に及ばぬと云ふこと、何處までも愛情に満ちた手紙で、鬼神を泣かせるやうな中佐に斯うした優しい一面があつたと云ふことを想像させるに相應しい教材です。

教材は主として候文に成る手紙の形式を知らせたいと云ふのでありますが、併し此の手紙では何處までも内容に重きを置いて、手紙の形式を通して中佐の人格に觸れさせると云ふ所に力を用ひだいのものです。形式の上から申しましたら、『人を周旋する手紙』や『書物の購入を頼む手紙』と同じく、候文體の子供に縁遠いものですが、併し此の文は是まで出た手紙とは稍々其の撰を異にしてゐます。そこには軍神中佐と云ふ大きな背景があつて、文に一段と現實味を帯びてゐます。あゝあの中佐がと云ふ感じは此の手紙をして一段と意義あらしめてゐます。高學年に於て候文を出すとしましたら矢張斯うした形が一番適切で、而も有意義だと思ひます。

毎度御懇書拜受再三精讀仕居候先づ姉上様にも馨ちやんにも相變らず御壯健大賀の外これなく候、
く候云々

冒頭の一段は自己の安否と慰問に對する御禮ですが、そこらにも中佐の中佐らしい優しい一面が美しく現はれてゐます。中佐が姉に對する手紙と云ふのに既に讀者の興味を唆つてゐますが、而も其の内容が情緒綿々委曲を極めたもので、優に優しい中佐の一面が涙ぐましい許りに文の面ににじみ出てゐます。『先づ以て姉上様にも馨ちやんにも相變らず御壯健大賀の外これなく候』と云ひ、『毎回の御手紙實に御友愛の情溢るゝばかりにて誠に感激に堪へず候』と云ひ、中佐の風貌が文の面に髣髴として浮き出てゐます。『武夫儀例の通り壯健日夜軍務に従事致居候間云々』にはあの壯烈な旅順閉塞の壯舉のそれも思ひ遣られて一段と趣があります。最後の『御惠贈の書籍・吳羊羹・耳袋並に靴足袋確に拜受云々』の邊りにも戦争當時の氣持が濃厚に現はれてゐます。書籍には中佐が平素の修養の程が窺はれ、吳羊羹には中佐のふだんの嗜好の程を思はせてゐます。姉が慰問品に吳羊羹を送つてゐるのは一寸見遁し難い所です。中佐は大の甘黨で船が港に這入るときつと餅菓子や山程買つて來て部下に振舞つてゐられたさうです。其の中佐に取つては吳羊羹が何よりの慰問品だつたに違ひありません。中佐の平生を知つてゐた姉は何よりも先に中佐の好きな書籍と吳羊羹を送つたものと思はれます。そこらにも兄弟の友情が盛り上つてゐて、何とも言へない感じを讀者に與へます。

先日大島艦入港し、即夜兄上御來訪、出征後始めての兄弟の面會とて、覺えず嬉し涙に暮れ申候。云々

兄は廣瀬勝比古氏です。勝比古氏は當時大島艦長で、兄弟は別れくになつてそれく軍務に服してゐたのです。其の兄弟が圖らずも一緒に手を取り合つて一別以來の物語をする、而もそれが第二回の閉塞と云ふ壯烈無比の快舉を前にしてのことなのです。兄の健かな姿を見た中佐が其の嬉しさを姉に知らせた至情の程も思ひ遣られて、讀者も思はずほろりとさせられます。報國丸にての働につきては兄上にも非常に御喜びなされ早速御手紙を以て武勇絶倫先考に代り之を激賞すとの御言葉をいたさき云々

此の段は中佐が第一回の閉塞隊に加つて目覺しい働をしたことに對して、各方面の人々から激賞され、尙又全国各地の新聞が筆を揃へて中佐の武勳を賞め立てたのを餘り過賞だと云つて謙遜した所で、中佐は本當にさう信じてゐたものと思はれます。其の當時兄勝比古氏に送つた手紙の中にも

第一旅順港閉塞の擧、家兄の激賞を受け先考と山縣元帥に代り武勇絶倫を以てせられる。此讚辭は弟が他の千人萬人の口より出づるあらゆる稱讚よりは、最も榮とする所なり。而して

友愛の情は上士の功に誇らざるを訓へ、有終の美を濟さんことを期せられる。感激の至りに堪へず云々。

とあります。中佐があれ程の働をして而も其の武勳に誇らず、却つて「鬼などのあだ名を附し候もをかし」と謙遜されてゐる邊りに、中佐の面目が躍如としてゐます。

負傷者に御見舞として餅との御意見はさることながら彼等には焼くなどの自由これなく候間云々

此處等も中佐のやさしい一面が文の面ににじみ出てゐます。姉が負傷兵に對して餅を送りたいと云つたのに對して「彼等には焼くなどの自由これなく候間」と云ひ、「武夫姉として御見舞状を御出し下され候は」と云ひ、中佐の中佐らしい氣持が美しく現はれてゐます。手紙の主は強敵を前にして明日も知れぬ命の持主、手紙を受ける人は戦地の夫や義弟の安否を氣追つてゐる一女性、そこから戦争氣分の濃厚に漂つてゐる所を見通してはなりません。

武夫儀はいよく相勵み軍功を立て申すべく「七度人間に生まれて國賊を滅さん」とは一貫の精神にこれあり云々

此段は中佐の決心の程を物語つたもので、此の手紙の山です。此の手紙があつた壯烈な第二回閉

塞を敢行する前六日に出されたことを思ひますと、文に一段の嚴肅味を覺えませう。

手紙の出されたのは三月二十日、第二回の閉塞はそれから六日目のごとで、中佐は三月二十六日を以て旅順港に向ひ、其の翌二十七日午前三時三十分を以て旅順港口に達したのであります。そこらは前に擧げた中佐傳や、其の當時家兄勝比古氏に宛て、送つた手紙などを參案して、適宜補説を加へなければなりません。中佐が辭世と共に兄に送つた詩に

勤王大義分明。報國丹心期七生。

傳家一脈遺風在。盟舉名弟聲與兄。

以て其の決心の程が窺はれませう。

運送船の便よろしく何の不自由をも感じ申さず候間 云々

追て書も情味たつぷりです。姉に心配を掛けまいとして運送船の便が宜しいので、何の不自由もないから別に心配は要らないと云ふのです。情緒綿々軍神中佐の面目の躍如たる所を味はつて見たいものです。

尙ほ最近東京日日に元中佐の從卒であつた老運轉手の話が出ておりました。軍神中佐の二十三回忌に當つて、在りし昔の中佐を偲んだ思ひ出で、中佐の平生を想像するに頗る好適の資料です。

参考の爲に原文其の儘を摘録しておきませう。

軍神の柔道教訓

廿七日は軍神廣瀬中佐の廿三回忌に當るので廿六日は東京海洋少年團の小さな水兵達や神田の青年會員が中佐の銅像を洗ひ清めたが廿七日は午前九時から『淨めの式』を營み當時旅順閉塞隊長で中佐と共に生死の間に出没した有馬良橋大將外將校連が列席する、廿六日淨めの人の中に海軍技術研究所のトラックを運轉して材料運び方に一生懸命の老運轉手千葉駒吉君(五五)とて中佐の從卒として最後まで身邊の世話をした當年血氣の二等水兵であつた人があ

る。



中佐か決死隊で出發の時私も是非つれて行つて下さいと泣いてたのんだ、さうすると中佐はあの眼に一ばい涙をためられて「貴様にも永い事世話になつたナ、一緒につれては行きたいが貴様の行くべき時は別にある、おれと一所に行つちやいかんのだよ」といはれた、虫が知らせるといふのか何んだかもうお別れだナといふやうな氣がしましたよ、三月の廿六日に別

れて翌日ボートが水雷艇に引かれて来るのを見ると中佐の姿がない、私は本當に同僚のゐるのも忘れて聲をあげて泣きました、中佐はまだ少佐で水雷長で分隊長をしてゐたので私はずゐぶん長い間お世話になつたのです。

◇
よくかういひました「かうして日本一の朝日艦へ乗つて戦争をするなんてのは武人一代の名譽だ、喜んで死ぬる」つてね、中佐は日頃私室の鍵を私に預け一切外の者には掃除もさせなかつた、私を残して閉塞に行つたのも後始末の事を考へられたんでせうナ、ひどく甘黨でしてね、艦が港へ入ると上陸してきつと餅菓子を買つて來ては振舞はれましたよ、おしるこが好きで夜寝てゐる時でもしるこが出來ましたといへば起きて喜んでたべられたものです。

◇
私がある時ちよつとなまけてゐますと柔道を教へるからといつて連れて行つてイヤツといふほど投げつけました、三度も四度も投げるので口を利く事も出來なくなるのを見て「どうだわかつたか」といはれました、どうも弱りましたよ、しかし中佐は自分の氣に入つたもので

ないこの柔道いぢめは餘りやらなかつたやうです。

◇
私は四十五年に海軍を出てかうして自動車を運轉するやうな事になりましたが、いつも何所かで、あの中佐の大きな目が睨みつけてゐるやうな氣持がしてなりません。こはかつたがやさしい人でした。この銅像を見る度に、あの軍艦でお別れをした時の言葉が思ひ出されます。トラツクを運轉して青山を通るときはいつもお墓参りをして來ますよ。

これだけでも中佐の平生が大體付度されませうし、尙又其の甘黨だつたことも明かになりませう。慰問品の吳羊羹も此の思ひ出を背景にして一入の興味を添へるであります。

第二十五課 スバルタ武士

舊讀本其の儘です。

スバルタは西曆紀元前一千餘年の昔、ドリア族が南下してプロボネソス半島に入り、土着のア

カイナ人を征服して國を樹てました。ラコニアは其の一つで、スバルタ市は其の首都です。當時征服種族の數は被征服者の數に劣つてゐましたから、ドリリア人は宛ら敵國の間に陣營してゐる一團の軍隊のやうに、其の征服者たる地位を保ち更に其の勢力を發展するのは容易の業ではありませんでした。ですから彼等は一種特別の社會組織を造り、一方に於ては極力被征服種族の騷起を防ぎ、一方に於ては自己の全力を國家の維持に傾倒せしめるの策を講じ、其の結果極端な國家主義の發展となりました。スバルタの教育は此の國家主義から生まれたもので、子生まるれば其の體質を検査し羸弱にして健全に發育するの望がなければ、之をラコニアの西境タイゲトス山に捨て、唯健全な者のみを養育せしめ、七歳に及べば母の膝下を去つて、國立の教育所に入らしめ、其の監督の下に専ら身體を鍛鍊し膽力を養ひ、寒暑飢渴の苦みに堪ゆる力を養ひ、戰鬥分捕の術を學ばしめ、戦起るや一令の下に出陣するやう、常に兵舎の中に起臥せしめました。斯くて三十歳に達すれば妻帯を許します。其の目的は健全なる子女を上げて國家の用に供するにありました。故に結婚も亦國家之に干渉し、強健の婦女に非ざれば結婚を許しませぬ。だから婦人も亦體育を重んじ氣節を尊び奉公の念に富んでゐました。此の極端な國家主義はスバルタ人の日常生活の上にも現はれました。財蓄は奢侈の基となり、奢侈は人を軟化する魔力を有してゐると云ふの

で、スバルタ人は商工業を賤しみ之に従事する者は階級の低いベリオイコイで、スバルタ人は之に與らないことになつてゐました。さうして貨殖を禁じ生活の向上を防ぎました。尙ほ奢侈の風の潛入を恐れて、國人の外國旅行を禁じ、外國人のスバルタ在留に干渉しました。其の流通貨幣に金銀を用ひずして鐵を用ひたが如き、又共同食卓があつて全市民は此處に集つて質素な食事をなしたるが如き、總て此の目的に出たものであります。

スバルタの政體も亦一種特別なものでした。即ち二個の王室があつて歴代二人の王が君臨しましたが、其の政權は甚だ微弱で、其の下に元老會及人民會があつて國政に任じてゐました。元老會は六十歳以上のスバルタ人十八名より成り、人民會は三十歳以上の市民が悉く出席の權を持つてゐました。後五名のエフォロスが年々人民から選出されるやうになつてから、國王は殆ど虚器を擁する姿となり、元老會の權も亦衰へ、國政の樞機はエフォロスの手に歸するに至りました。

以上スバルタの制度は紀元前九世紀リコルゴスと云ふ聖人の定むる所として、後世のスバルタ人は之を神聖視してゐます。併し近時學者の研究に依りますと、リコルゴスは半神話的人物で、其の實在に關して之を疑ふものが少くありません。要するにスバルタの制度は決して某時代に一度に興隆したものでなくて、假にリコルゴスを實在の人物としましても、所謂『リコルゴスの

法律』はスバルタ人が數世紀間の經驗に依つて漸次に定めたものであると云ふのに學者の意見は大體一致してゐます。

スバルタは此の教育の效果に依つて、日に月に隆盛に赴き、紀元前六世紀の半頃既に他の二國を凌駕してプロボネソス半島の羈權を握り、更に進んで中部希臘に手を伸ばさうとしましたが、當時中部希臘は既に是と對立するに足るべきアテネ市がありました。アテネ市は初め王政でしたが、後貴族政治となり、平民は權力を得んとして、頻に貴族と軋轢しましたが、紀元前五百九十四年執政官ソロンが憲法を立て、平民にも參政の權を與へましてから、民權が大に伸びて民主政治となり、中部希臘に雄飛し、尙ほ東方海上にまでも其の力を張るに至りました。スバルタ剛毅素朴にして沈黙清貧を尊び、保守貴族主義を守り、アテネ人は専ら優雅向上の精神に富み、學問美術を愛し、貨殖辯論を重んじ進歩平民主義を貴びました。主義の相反した兩國は並び立つことが出来ませんでした。時に東方波斯軍が連年希臘を侵して已まなかつたので、希臘の諸市は同盟して之に當り、漸く紀元前四百七十九年のプラテエー及ミカレの役に波斯軍を擊破して其の野心を絶滅せしめてから、アテネは希臘聯合の主に推され希臘の羈權を握るに至りました。茲に於てスバルタは其の下蔭に立つのを潔しとしないで兵を擧げてアテネを討ちました。爾後連年戰爭の

慘禍を見ましたが、紀元前四百五年アテネ軍を破り、翌年アテネを陥れ、茲に初めてスバルタは全ギリシヤに雄飛するに至り、覇を稱うることに三十餘年に及びました。併しスバルタは其の指導の下にある諸市を遇することが頗る苛酷であつた爲め、テーベ市先づ背き紀元前三百七十一年にテーベの名將エバミノンタスがリユークトラに於てスバルタの大兵を破り、次でスバルタに肉薄しましたが、紀元前三百六十二年マンチネヤの大戦にエバミノンタスが戦死するに及んでテーベも亦衰へ、此の久しきに渉る内訌の爲に希臘全部は疲弊の極に達し、スバルタの尙武剛健の氣風も漸く衰退し、遂に悉くマケドニヤ國に併吞されるに至りました。

此の教材は其のスバルタの所謂スバルタ教育の一斑を叙したもので、剛毅素朴、勤儉尙武の氣風を物語つたものです。人に依ると軍國的だとか、侵略主義だとか嫌がるかも知れませんが、それは餘り新しがり屋の意見で、スバルタ教育にはスバルタ教育として又面白い所があります。今日斯うしろと云ふのではなくて、昔の希臘が斯うであつたと云ふだけのことです。其の善し悪しは讀む人の心ごころで善いと云ふ人もありませうし、悪いと云ふ人もありませう。そこが面白いのです。矢鱈に讚美するのも宜しくありませんが、妄に排斥するのも面白くありません。唯何處までも昔の話として歴史を讀ませるやうな考で取扱ひましたら、それで結構でせう。尙武剛健

の氣風に満ちてゐたスバルタ武士の生活は、文化の波に揉まれ、浮華文弱に墮してゐる現代人に取つては、確に一服の清涼劑と云つて然るべきものでせう。

文は七段に分れてゐて、第一段はスバルタ武士の士風、第二段は國立教育所の状況、第三段は青少年の教育、第四段は青少年の生活、第五段は二十歳後の公民生活、第六段は祖國の爲に一命を捨てるのを名譽としたこと、第七段はスバルタ武士の面目の一端、さうして一段から六段までは生れてから人となるまでを時間的に叙し、最後の一段は美談逸話の形になつてゐます。

昔ギリシヤにスバルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇の譽今尙高し。云々。

スバルタ國民が愛國の精神燃ゆる如く武勇の譽今尙高き所以は其の教育の方法と、生活状態とにあります。スバルタ人が極端な尙武教育を施し、ミリタリズムを奉じたのは、前にも略説した通りにスバルタ人が北方から南下して来て、土着の民族を征服して國を建て、而も其の征服者たるスバルタ人は被征服者たる土着民族の數に對して甚だ眇かつたので、恰も敵國の間に陣營する一軍隊の如き感を呈しました。随つて其の征服者たる地位を保ち、更に其の勢力を發展するには特別の手段を講じなければならなかつたのです。そこでスバルタ人は一種特別の社會組織

を造り、一方に於ては極力被征服種族の蹶起を防ぎ、一方に於ては自己の全力を國家の維持に傾倒する方策を講じ、其の結果極端な國家主義を現出し、所謂スバルタ式の教育法を適用することになつたのであります。此處では先づ其の教育方法と生活状態を紹介しようと思ふのであります。

スバルタ人は悉く武士にして、男子生まれて七歳に達すれば、國立の教育所に收容せられ、王子、王族といへども家庭に人と成るを許されず。云々

此段は國立教育所の一班で、男子は生まれて七歳に達すれば國立の教育所に收容せられて、王子王族と雖も家庭に人と成るを許さなかつたのであります。七歳と云へば尋常一年の子供です。其の小さい子供が丁度四月の初めに行はれる入學式に母に手を引かれて學校に通つて来るやうに、スバルタ人は父兄に連れられて國立教育所の門を潜り、此處で嚴格な所謂スバルタ式の尙武教育を受けなければならなかつたのであります。嚴しい教官達の手に渡された子供達は、今日から想像することも出来ないやうな嚴格な尙武教育を施されて、彼等の小さい胸には將來の將軍を夢み、他國を侵略し敵を盡しにすると云つた意氣を養つたのであります。子供を連れて来て國立教育所に送り込んだ親達は、頑丈な我兒の後姿を見送つて、今更ながら入所の大任を果し得たこ

とを喜んで、得意然と家路へ急ぐのであります。そこらは何處か知ら我が日本の武士的教育と似通つた所があるのも頗る興味があります。

教育所に於ける少年・青年の生活は、専ら廉潔・質素・克己・忍耐の氣象を鍛錬するを目的とし、其の規律は頗る嚴格なものなりき。云々

國立教育所に於ける教育は頗る嚴格なものでした。士風の養成と身體の鍛錬とが其の主な目的で、たつた一枚の蒲團に包まり、而も其の蒲團も自身河邊の蒲の穂を集めて拵へたと云ふのです。衣服は重ね着を許さず、冬も尙ほはだしで靴さへも穿つことが出来なかつたのです。毎日河水に浴して、温湯に代へ、食事は粗悪で飽食を許さない。總てが戦時としての教養で他日戦場に出て困苦と缺乏に耐へ得る意氣と身體とを鍛へ上げようと云ふのであります。何處までも極端な教育ですが、時と場合とを背景にして考へて見ますと、又一段の趣があります。歴史の面白い所はそこから時代が人を造り、境遇が人を左右すると云つた邊りに、可なり考へさせられる所があります。

言語は簡明を貴び、饒舌を戒む。故に今日に於ても、西洋諸國にては、言語の簡明明白なるを「スバルタ人の答」といへり。云々。

此の段は青少年の生活で何處までもスバルタ式です。簡明な言語、謙讓と從順の美風、それらは今日の社會でも欲しい性格なのであります。而もそれが頗る強壓的で、如何なる者もそれに盲従しなければならぬと云ふ所にスバルタのスパルタらしい所があります。武斷的壓制的な所は面白くありませんが、スバルタ人が貽した謙讓と從順の美德は、ともすれば浮華文弱に流れ勝ちな現代人に取つても確に一服の清涼劑でせう。

二十歳に達すれば、始めて共同の教育所を出でて、公民の列に入る。しかも武藝の練習は終生之を怠るを得ず。云々

公式祭禮の席に於て老弱相合して武勇の歌を歌ふ。老年先づ歌ひ、次で壯年歌ひ、最後に少年之に和して歌ふ。壯快の氣満ち、意氣天を衝くの概が偲ばれます。斯うして此の教育所に於て養成せられた士風は之を永久に維持することが出来たのであります。スパルタ人の教育は毒藥の如きもので、分量を過せば人を殺しますが、併し適度に之を用ひれば回生起死の妙藥となります。

七歳にして國立教育所に入り、それから所謂スパルタ教育を施されて、二十歳に達して初めて公民の列に入るまでの教育は、現代の社會に於ても可なり考へさせられる所が有ませう。

斯くの如き尙武教育に鍛はれたるスパルタ武士は、死を見ること歸するが如く、瓦となりて

全からんよりも、玉となりて碎けんことを希ひ、云々

此の段は以上五段の結びの形にもなつてゐますし、尙又次の段の美談を喚び起す序説の形にもなつてゐます。『死を見ること歸するが如く、云々』はスバルタ教育の結果で、其の具體例は次に挙げられた二三の美談に依つても明かです。

『瓦となりて全からんよりも、玉となりて碎けん』は北齋書元景安傳に『大丈夫寧可玉碎、不能瓦全』に出たもので『玉碎』は名譽の死を意味し、『瓦全』は徒に身を全くすることを意味してゐます。『玉碎』『瓦全』はどちらも熟語になつてゐます。

こゝにスバルタ武士の面目の一端を見るに足るべき二三の美談を記さん。云々

第七段は美談で、スバルタ教育に依つて喚かせた花です。之に依つてスバルタ武士が戦争に對し如何に自信の念が強かつたかと云ふことが知られます。始と敵を敵ともせず向ふ所必ず壓迫しなければ已まない慨は眞に痛快です。『大小の軍旗空をおほひて天日見えず』の報に接しては、『然らば其の陰に戦はん』と云ひ、『敵勢大なれば、我等の名譽も亦隨つて大なり』と云へば、『我等は敵軍の數を知るの要なし。唯其の所在を知るべきのみ』と云ひ、敵軍將に寄せ來らんとすと報するものがあれば『敵我に寄するに非ず、我、敵に寄するなり』と叱咤する。何たる痛快でせ

う。言々珠玉を連らねたるが如く、一讀自ら血湧き肉躍るの感があります。殊に最後の女子が其の子の出陣に際して自ら盾を取つて、『勝ちて持ち歸れ。然らずんば之に乗りて歸れ』と叫び、一時に五人の愛子を失ひ『我が子は祖國の爲に之を産めり』と叫ぶ、其の壯烈眞に懦夫をして立ちしむるの慨があります。

スバルタ教育は西洋歴史の花で之を一篇の昔話と眺めますと、そこに言ひ知れぬ味ひがありません。子供は斯うした文を読むことに依つて、知らず識らずの間に西洋歴史に對する趣味も養はれ尙又暗々裡に偉大な或る教訓を與へられるのであります。スバルタの興亡に付てはアテネも出て來ませうし、マケドニヤも出て來ませう。プロボネソスも出て來ませうし、アレクサンドル大王も出て來ませう。さうした所から自ら西洋歴史に對する研究心も湧き起つて來ませう。尙又軍國主義だとか、國家主義だとか云つた思想的にも相當涉りを付けることも出來ませう。そこらは教師の手腕で、教材を唯單獨の教材と眺めないで、それに背景を添へ、それに機縁を求めて大きく意義付ける所に教育の意義があるのであります。

兎に角良い教材で内容の上から見ても、形式の上から見ても可なり讀みごたへのする教材だと思ひます。

【聲譽】漢書の「聲譽出鳳遠甚」に出で、ほまれ又はよき評判の意、聲名、聲聞に同じ。

【偶然】不圖に同じく思ひがけざること、事の豫め期せずして然ること。列子の「范氏之黨、以爲偶然」に出づ。

【鍊磨】ねりみがくの意で、熱心に研究すること、

【廉潔】孟子の「行之似廉潔」に出で、清廉無欲にして潔白なること、

【克己】論語の「克己復禮爲仁」に出で、私欲を抑制すること。

【饒舌】隋書の「齊時諺、育老公背受大斧、饒舌老母不得語」に出で、多辯と同意でおしやべりに同じ。

【長幼の序】禮記の「以處鄉里、則長幼有序」に出で、年長者と年少者との社會上に於ける地位の順序の意、

【懲戒】こらしめいましむるの意で、漢書の「漢興之初、懲戒亡秦孤立之敗」に出づ。

【揚々濶歩】の「揚々」は史記の「意氣揚々、甚自得也」に出で、得意げなるさまにいふ語、「濶歩」はおほまたであるくの意で、安心して自由に行動すること、魏文帝漢文論に「得濶

歩高談無危懼之心。」とあるに出づ。

【公民】市町村の住民にて公民權を有するもの、こゝでは市民の意、

【尙武】杜甫詩の「此邦今尙武」に出で、武事をたふとぶこと、

【祖國】祖先以來住み來りたる國、其の國民の分れたものとの國、

【面目】は世に立つて相當の體面を保つことで、人に會はする面の意、こゝでは「かほかたち」又は「ありさま」

【自若】は事に遇ひて精神舉動の平常に變はらぬさま、戰國策の「曾子之母曰、吾子不殺人、織自若」に出づ。

【雲霞】は赤雲の氣、こゝでは群衆を遠く望む時の形容、

【武運】は戰爭の運又は武士の運命、

【死を見ること歸するが如く】

「太戴禮曾子制言」の「君子視死若歸」に出で、死ぬることを我が家に歸るやうに思つてゐるの意、從容として毫も死を懼れぬこと、

【瓦となりて全からんよりも玉となり碎けんことを希ひ】北齊書の「大丈夫寧可玉碎、何

能瓦全」に出で、何事もなし得ずして徒に生存するよりも、功名を立て、死することを希ふの意、「瓦全」と「玉碎」は對語、

「然らば其の陰に戦はん」それでは其の日かげの涼しい所で戦はうの意で、「大小の軍旗空をおほひて天日見えず」に對して云つたもの、

「勝ちて持歸れ、然らずんば之に乗りて歸れ」スバルタ教育の標語として西洋では諺の一つとなつてゐる。「盾」は戦陣で身を蔽ひ、敵の矢丸を防ぐに用ふる具、木製のものもあるが多くは鐵製である。

補充文には次の『スバルタとアテネ』を擧げておきます。

スバルタとアテネ

西曆紀元前一千餘年の昔、ドリア族南下し來りてペロポソネス半島に入り、土着のアカイア人を征服して三國を立つ。ラコニヤはその一にしてスバルタ市はその首都なり。當時征服種族の數は被征服者の數に劣りしを以て、ドリア人はさながら敵國の家に陣營せる一國の軍

隊の如く、その征服者たるの地位を保ち、更にその勢力を發展するは容易の業にあらざりき。故に彼等是一種特別の社會組織を作り、一方に於ては極力被征服種族の蹶起を防ぎ、一方に於ては自己の全力を國家の維持に傾注せしむるの策を講じ、その結果極端なる國家主義の發展となれり。

スバルタの教育は亦國家主義に適應し、子生るれば其性質を檢査し、羸弱にして健全に發育するの望なければ、これをラコニヤの西境タイゲトス山に棄て、唯健全なるもののみを養育せしめ、七歳に及べば母の膝下より去りて國立の教育所に入らしめ、その監督の下に専ら身體を鍛鍊し膽力を養ひ、寒暑饑渴の苦に堪ふる力を養ひ、戰鬥分捕の術を學ばしめ、戦起るや一令の下に出陣するや常に兵舎の内に起臥せしめたり。

かくて三十歳に達すれば、妻帯を許す。その目的は健全なる子女をあげて國家の用に供するにあり。故に結婚も亦國家之に干渉し、強健の婦女にあらざれば結婚を許さず。故に婦人もまた體育を重んじ、貞節を尙び奉公の念にとむ。

極端なる國家主義はスバルタの日常生活の上にもあらはれたり。蓄財は奢侈の基となり、奢侈は人を軟化する魔力を有するが故に、スバルタ人は商工業を賤み、之に従事するはべ

オイコイ（スパルタ住民中第二の階級に屬するもの）の事とし、スパルチアテ（ドリアン種の征服者）はこれにあづあらず、貨殖を禁じ生活の向上を防げり。國人の外國旅行を禁じ、外國人のスパルタ在留に干涉せるも亦外國人奢侈の風の潜入せんことを恐れたるがためなり。其流通貨幣に金銀を用ひずして鐵に限れるが如さ、又共同食卓ありて全市民集りて質素なる食事をなさしめたるが如き、亦同一目的に出でたり。

スパルタの政體亦一種特別なり。即ち二箇の王室ありて歴代二人の王君臨せしも、其政權は甚だ微にして、その下に元老會及人民會ありて國政に任ぜり。元老會は六十歳以上のスパルチアテ二十八名より成り、人民會は三十歳以上の市民悉く出席の權を有せり。後五名のエフロオス年々人民より選出せらるゝに及び、國王は殆んど虚器を擁する姿となり、元老會の權亦衰へ、國政の樞機はエフロオスの手に歸するに至れり。

以上スパルタの制度は西紀九世紀頃リコルゴスといへる賢人の定むる所として、後世のスパルタ人之を神聖視せり。然れども近時學者の研究によれば、リコルゴスは半神話的人物にして、その實在に關して之を欸ふもの少からず。要するにスパルタの制度は決して某時代に一度に確定せるものにあらず。假にリコルゴスを實在の人物とするも、いはゆる「リコルゴ

スの法律」は、スパルタ人が數世紀間の經驗によりて漸次に定めたるものなりといふに於て、現今學者の説一致せり。

スパルタは此教育の効果大に顯れて日に強盛に赴き、紀元前六世紀の半已に他の二國を凌駕してペロポネソス半島の實權を握り、更に進みて中部ギリシヤに手をのばさんとせしが、當時中部ギリシヤは已に之と拮抗するに足るべきアテネ市ありき、テテネは初め王政なりしが、後貴族政治となり、平民政權を得んとして頻りに貴族と軋轢せしが、紀元前五九四年執政官ソロン憲法を立て平民にも參政の權をあたへしより、民權大いにのびて民主政治定まり、中部ギリシヤに雄飛し、なほ東方海上までもその力を張るに至れり。

スパルタ人は剛毅素朴にして沈黙清貧を尙び保守貴族主義を守り、アテネ人は専ら優雅、向上の精神に富み、學問美術を愛し貨殖辯論を重んじ、進歩平民主義を尙べり。兩雄ならび立つべからず、將來衝突の期免るべからざるものありき。

時に東方ベルテヤ軍連年ギリシヤを侵して已まさりしが、ギリシヤの諸市は同盟して之に當り、漸く紀元前四七九年のプラテエー及ミカレの役にベルシヤ軍を撃破して其野心を絶滅せしめしより、アテネはギリシヤ聯合の首に推され、ギリシヤの實權を握るに至れり。こゝ

に於てスパルタその下風に立つを潔しとせず、兵をあげてアテネを討つ。紀元前四四五年三十年間の休戦の約なりしと雖も、間もなく紀元前四三一年再び開戦し連年慘禍を極めたり。紀元前四二一年又休戦の約なりしも間もなく平和破れて紀元前四〇五年アテネの海軍を破り翌年アテネを陥れこゝに始めてスパルタ全ギリシヤに雄飛するに至り、覇を唱ふること三十餘年、然れどもスパルタはその指導の下に立つ諸市を遇すること苛酷なりしかば、テーベ市先づ背き、紀元前三七一年テーベの名將エパミノングス、リュークトラに於てスパルタの大兵を破り、續いてスパルタに肉迫せしかど、紀元前三六二年マンチネアの大戦にエパミノングス戦死するに及びテーベも亦衰へ、此久しきにわたる内訌のためにギリシヤ全部疲弊し、スパルタの尙武剛健の氣風漸く衰頹し、遂に悉くマケドニア國に併合せられたり。

第二十六課 統計

舊讀本の卷三に出てゐたものと構想は大體同一ですが、内容は全然新しく書替へてあります。挿入の統計や圖表其の他が新しい材料と入替へられて、從來のものよりも餘程新味を帯びてゐま

す。

統計は文化諸科學や或種の自然科學に、其の根據となるべき重要な資料を提供したり、政治經濟及び社會的施設經營に、必要な資料を提供したりする、至極肝要なものなのです。統計その物の學的統制に深甚な注意が拂はれるやうになつてから、茲に統計學なる一科の學問の成立を見るに至りました。さうして文明諸國には何れも其の特別な調査機關を有つてゐます。我國に於ても大學に統計學の講座が設けられ、内閣には統計局が直屬してゐます。

斯の如き刻下の情勢なるに拘らず、科學的訓練に缺くる所ある我が國民には、統計の何たるかを解する者が尠く、學者或は爲政治家の依囑を受けて、統計調査の材料を彙集提供する場合なども、孟浪杜撰始ど無價値のもの往々にして存在し、學的研究を沮碍したり、實際上の施設經營に支障を來さしめたりすることが屢々です。此の教材はそこらを狙つたもので、此の文を讀む事に依つて統計の概念を獲得せしめ、尙統計に對する妥當な理解を得せしめようと思ふのであります。

文は四段に分れてゐます。第一段は男女の割合に甚だしき差異なきこと、第二段は社會現象は一見甚だ不規則の様だが大數に就いて觀察すれば自ら整然たるものがあると思ふこと、第三段は統計の意義、第四段は統計の價値——第一段と第二段で統計その物の如何なるものかを説明して、

第三段で定義を下し、第四段で其の價値を述べてゐます。

一家に就いて見るときは、男女の數甚だしく異なるもあり。云々

第一段と第二段は、社會現象には整然たるものゝ存することを知らしめんが爲の叙述です。かうして先づ統計の原理を理解させ、次いで其の意義を説き、更に其の價値に及ぼし、統計その物についての一般觀念を附與しようといふのであります。

此の段は序説の形で、一家に就いて見るときは、男女の數に甚だしく相違があるが、範圍の擴大すると共に、其の差異は次第に減少して、遂に殆んど同數となることを説いて、それを實際の數字に依つて例證してゐます。

國勢調査は國家社會の構成状態を知る爲の調査で、人口其他必要事項について全國的に調査を行ふものです。我國では明治三十五年法律に依つて十年毎に調査を行ふべきことを規定し、其の第一回は大正九年の十月一日午前零時を以て施行されました。

男女の割合斯くの如くなるは、此の時の調査のみに限らず、從來の人口統計に就きて見るも、常に相似たる結果を示し、其の割合は略々一定せり。云々

此の段は前段を承けて男女の割合の大略一定してゐることを述べ、尙進んで其の他の社會現象

に就いても、一見甚だ不規則のやうだが大數に就いて觀察すると自から整然たるものがあるとしてゐます。こゝら社會學的に可なり大きな意味があるので、所謂大數觀察なるものが社會現象の説明に重大な意義を有してゐることを補説しなければなりません。

斯く同一種類に屬する事物又は現象の大數に就きて調査し、數字を以て表したるものを統計といふ。云々

此の段で初めて統計の意義を述べ、更に其の表し方に説及んでゐます。挿入の統計及び圖表は本文の具體例で、本文と對照させることに依つて初めて意義が有ります。其の間統計の見方を知らせ、大數觀察の意義を明にしなければならぬのは言ふまでもない事です。

百十三頁の人口統計は數字に依るもの、百十四頁の民有租地地目別割合は面積、百十五頁の繭産額と牛馬豚頭數は線、百十六頁の耕地面積は色別、百十七頁の大正十四年米收穫高は形象——數字に依るものは正式の統計、面積、線、色別及び形象を用ひたるものは圖表で、見る者をして一見容易に其の數量の多寡を知らせ、具體的に印象を深からしめんとする用意になつたものです。こゝらは適宜算術科と聯絡させて、平易な統計を示してそれを線や面や色別などの圖表に接へ直させて見るのも一興でせう。

統計の意義

社會現象を數量によりて觀察・研究する方法。大數觀察の方法とも云ふべく、社會現象を一々原單位に付視察し、其多數を取り分異合同して觀察・研究するものにして、社會學又は經濟學と密接の關係を有す。我國にて統計と云へば、普通には統計表又は統計書中の數列の義に解せらる。原語スタチスチクスはラテン語のスタツス即ち現況を意味する語より出でたるものにして、我國に於ては、明治の初、杉亨二により蘭書より輸入せられ、初め抄写契又は抄録若しくは政表等と稱せられしが、明治十四年太政官に統計院設けられし以後廣く統計と稱せらるゝに至れり。

統計の材料

統計の材料は社會現象を主とす。マイルは社會現象を三様に區別し、(い)組織・(ろ)作用・(は)結果とし、すべてこれを統計の材料とす。例へば人口・其體性・年齢・職業及び配偶關係並に社會の營業組織又は土地・家屋・家畜等の分配は組織にして、人の出生・死亡・婚姻・離婚・犯罪・貿易等は作用に屬し、物價・貨銀生産等は結果なり。いづれも皆統計の材料となる。な

ほ自然界の現象も統計の材料となることあり。氣象・溫度・雨量等の如し。統計の材料は大數なるを要す。分異の際あまり小數にては全く意義を失ふべければなり。其他統計の材料たるに適せざるものあり。人の智識・道德心の如く、分異し又は數を以て現はす事絶對に不能なるもの、各人の所得額の如く生活の裏面に關し、調査をゆるさざるもの、調査微細に亘り、勞力・費用に比して得るところの效果多からず不利なるもの是なり。

統計の時期

或一定の時期に於ける現象を調査するものあり。これを靜態統計と云ふ。國勢調査又は年末の人口調査、若しくは職業調査の如し。或は一定繼續期間に於ける調査あり。これを動態統計と云ふ。一年間の出生・死亡・婚姻・離婚・輸出・輸入・手形の振出・受込等の如し。

統計の機關

統計は社會現象を一々各單位につき、統一的に視察するを要するを以て、熟練したる多數の人を要す。故に小規模の特殊調査の場合のほか、今日に於ては多く行政組織の機關による。殊に國勢調査の如き大調査に於て、一時に多數の人を要する場合は、特に調査機關を訓練し

て、これを用ふ。

單位觀察

統計は數量を取扱ふものなるも、數學と異なり、一々原單位に就きて精細なる觀察を要す。調査の事項を取調べ一定の形式に記入することなり。然して國勢調査の如く特に現物に就きて取調ぶる事あり。又多くの統計の如く、臺帳・届書等既に存在する書數を本とし、單位觀察の用に供する場合あり。其一單位を一枚に記入するを小票式といひ、數單位を一枚に列記するを目錄式と云ふ。

製 表

單位觀察の結果を集め、豫め計畫したる統計表の様式に従ひ、時・場所・事項等を分異合同して統計表を調製す、これを計表といふ。其分異合同の事務を集計といひ、集計を行ふには單位は目錄式にて徴せられたる場合も、更に單名式の小票に分記するを便とす。而して其小票により一々、例へば男女の體性・年齢等の各事項に就き、同じきを集め異なること分ち、然る後これを計へ、統計表に記入し、以て原表を調製す。集計の手段として歐米の大調査に於

ては統計器を用ふることあり。

比例及平均

統計表調査せられたるときは、これによりて既に若干の數量的研究の用に供せられ得べきを以て、直にこれを公刊すること多きも、統計は數量の比較研究をなし、二者の關係を見るを目的とするを以て、更に原表を縮約し、比例を算出し、各種の比較をなし、平均を附して各地各時期等の状態を一見するの便に供す。比例は總數に對する各部の割合を見ることがあり。これを内譯比例といふ。例へば大正二年末我國の人口百中男五〇・五、女四九・五といふが如し、又異りたる二種間の比例を見ることがあり。これを關係比例といふ。例へば大正二年日本内地の人口一万里に付二・一三四人、明治四十四年人口千に付生産三四・〇、死亡二〇・三、人口一萬に付犯罪人二二・五といふが如し。

統 計 圖

統計の方法によりて社會現象を研究するには、比例・平均のほか、更にこれに基き統計圖を畫くことあり。比例平均等と相俟て現象の相互の關係・差等、逐時の傾向等一目瞭然たるを

得べきなり。統計圖に二種あり。主として數量を線の長短、面の廣狹を以て示せるものを統計幾何圖といふ。又地圖の上に各地の數量の大小を色彩の濃・淡を以て現はすものを統計地圖といふ。統計圖は多く通俗的に數の概要を知らしむるの用に供せらるゝも、なほ社會現象の統計的研究方法の重要なものなり。

統計的法則

統計の方法により社會現象を大數に就き觀察するときは、其間に何等かの定律あることあり。個々の現象が此の定則に支配せらるるといふにもあらず、個人の自由意志を羈束する法則にもあらず、單に大數を集めて始めて行はるゝ規則なり。これを統計的法則又は大數の法則といふ。フォン、マイルは此法則を區別して四種とす。即ち状態の法則、發現の法則、開展の法則、因果の法則是なり。

統計によりて觀察するときは、社會各般の状態を明らかにし、随つて其の原因結果の關係をも審にするを得べし。云々

此の段は統計の價値で、此の文で一番力が入つてゐます。

先づ「統計によりて觀察するときは、社會各般の状態を明らかにし、随つて其の原因結果の關係をも審にするを得べし」と斷じ、次いで其の然る所以を説明して統計の價値を知らせ、最後に「されば統計は、政治經濟及び社會上の施設經營には勿論、自然現象又は社會現象の學術的研究にも亦必要缺くべからざるものなり」と其の必要を説いて、「これ文明諸國に於て、特殊の機關を設け、多額の費用を投じて其の調査を怠らざる所以」を説破してゐます。

文は如何にも抽象的で、固苦しい内容が固苦しいまゝに轉がされてゐます。随つて讀解にも可なり努力を要しませうが、しかし教師としてはそれだけ活動の範圍が廣いわけで、一々實例を示して統計の讀方を授け、其の利用の方法を知らせ、尙圖表形象などを示して興味を添へ、統計に就いての一通りの觀念を與へるやうに仕向けなければなりません。

「統計」 同一範圍に屬する個々の現象を集め、數字計算により其の状態を表はすこと、

「結果」 或る原因によりて到達たる状態、できればの意、

「内地」 屬地又は島地に對して、本土の稱、

「觀察」 事物のありのままの現象を注意して經驗すること、

「整然」 秩序正しくよくと、なひたるさま、

「現象」 哲學上の語で、五感を通じて吾人の經驗し得るすべての事物の稱、

「形象」 なりかたちの意、形態に同じ。

「印象」 哲學上の語で、現在直接に物に觸れて得たる感情が、深く心に銘じて、生き／＼せる心の有様、

「自然現象」 自然は人爲の加はらぬ状態、天然に同じ。自然現象は山川草木雲霧などの天然

自然のあらはれた有様、

「社會現象」 社會の組織せらるゝより起る現象、

「内閣統計局」 内閣所屬の一局、行政各部の統計の統一、行政各部に專屬せざる統計、其の

他統計に關する事務を管掌するところ、

「自治團體」 國家より委任を受けたる政務を處理すべき義務を國家に對して負ふ公法人、即

ち府縣市町村及び商業會議所、水利組合などの類、

第二十七課 筏流し

優美な題材で一寸題目を見た瞬間には、あの雨の吉野川の優美な筏流しのそれがふいと頭に浮び出ます。併し此の文はさうした優美な一面ではなくて、全然實用的に筏を眺めたもので、深山から伐り出された木材が筏に組まれて海邊まで運搬される有様を抽象的に説明してゐます。文の背景としては紀伊山脈が取られ、十津川や熊野川が取られ、おまけに天下の勝景瀨八丁や九里峽まで取り入れられてゐながら、それがちつとも生かされてゐないのは、何としても惜しいことだと思ひます。

編者は尋常科でも矢張此の手で失敗してゐます。國讀卷十二で態々十和田湖を捉えながら、無味乾燥な湖沼學的の説明文を拵へて、あつたら天下の勝景を臺無しにしてゐます。これも矢張其の筆法で折角の題材をちつとも個性が出せないで、何處に持つて行つても當筈るやうな味も香もないものにして仕舞ひました。傳統的なやかましい束縛から己むを得ず斯うなつたものとは思ひますが、併し惜しいことをしたものです。

教材の出所は杉村廣太郎氏の『へちまの皮』で、原文は其の『斜に見たる紀州』の中の『熊野川の筏』です。参考の爲め左に其の原文を擧げておきませう。

熊野川の筏

新宮の整板所の裏に出た。大小の角材平材を積んだ間に木片鋸居屑が一面にちらかつて、工場には焦々と蟬の鳴くやうに鋸の音が聞える。兎ある土堤を一つ上れば、前は目もはるかに打ち開けた貯水場——此處に何萬本とも知れぬ材木がぎつしりと水の面に浮んでゐる。水に浮んだ處だけを見ると、材木が山から自然に水の中に滑り落ちて、何時しかこの新宮の河口まで流れ寄つたやうな氣もするが、何しろ一本大道に轉つてゐてさへ始末に悪い奴を何萬何千と一つ處に集めて來るのは、普通大抵の世話でない。先づ某の山で若干の立樹を切り倒したとする。枝葉を拂つて、丸太のまゝで送り出すのもあるが、大抵は更に四周をはらつて、何尺角と言ふ小角材に作る。材木となつてから、杉檜なら一箇月、其他の黒木なら四箇月の間、其處等に轉したまゝ乾かして置いて、乾きが一應入つたと見たところで、初めて愈々山出しにかゝるのである。

都合よく切り出した場所が谷近くなら、そのまゝ滑り落されもするが、生憎と谷まで出るのに勾配が緩いとか、高低があるとかいふと、已むを得ずその切り出した木を其のまゝ利用してスラを作る。スラとは木を二本縦に列べて道を作り、その上へ材木をのせて滑らせる仕組で、滑らせる材木が盡きると、スラに使つた木を後から順々に取つて次のスラへ滑らせ次から次と次第に切り倒しただけの材木を運び去るのである。小溝に會へばスラで橋を作り冬ならば水をスラに撒いて氷らせた上で、滑りよくすることもある。

やつと山の中の小谷へ材木を落してしまつた所で、さて小谷のこととて水を流す程の水がないとなると、柴や苔を集めて小谷を堰き止めて、水の溜る迄待つのである。水が溜つて堰とすれ／＼の高さになれば、木は堰を溢れ出る水に流されて一本づつその上を越えて行く。越えた所でその前途にも水が乏しければ、何度でもこんな堰を繰り返さねばならぬ。所が初手から全く小谷に水がないとなると、其處等の雜木を切り集めてサデを作り、スラと同じ仕組でその上を滑らせるか、さては木馬道を作つて、木馬に材木を載せて引きずる。木馬道とは木で作つたレールで、木馬とはその上を滑る櫓だ。

斯くして漸く大川へ出ると、取り敢へず、一本づゝバラの儘で川へ流す。之を川狩とも管

流しともいふさうな。さて川を流して幾里か行つた後、綱場といふに着く。綱場とは一に土堤とも言つて、此處で初めて筏に組むのである。綱場には川を横つて鐵線はりがわを架け渡して、上から流れてくる材木を受け留め、留めた材木を河原の廣場へ三組に組み上げる。此の組み上げたのを臺取といふ。材木にはそれ／＼持主の焼印があるから、綱場で止つた木に他人のがあれば、そのまゝ下へ流して、次の綱場へ送りやる。

臺取に組み上げた木は、更に一本づゝ川へ落し込んだ上、尺締しゃくじり二間の材木四本を標準として一カモに組む。カモに組むには、近頃猫環ねこたまと唱ふる鐵釘を二本に跨いで打ち込み、別にタマゴといふ藤の蔓で縛る。昔は大抵材木にメガと稱する穴を明けて、之にネジ等を通したものだ、かくては材木に大きな穴が明いて寸が縮まると、今はあまり用ひぬといふ。

カモが出来た。カモを普通十四箇繋いで、此に初めて一筏が成るのである。一カモは言はゞ一輛の車で、筏とは列車みたいなものだ。筏には角材なら八十本以上、丸太なら三十本以上ついである。筏の流るゝ途中ぐら／＼せぬやうにとて、カモ毎に二本づつ棧を入れて、別に筏の舵を取る爲にとて、第一番のカモの後部に舵が一つある。乗手は普通二人で、前部ではカモにつけて櫓楫を押し、後部の者は竿を取る。而して悠々と水に任せて、この熊野川を

流れ下るのである。折節水の少い處では鐵砲土堰と唱ふる關門のついた堰を作つてある。この門を閉ぢて水を堪へた後、颯と門を開けば、筏は瀧の如く關門より落ち下る水に浮んで、すらくと流れ行く。見た所は壯快だが、乗る者に取つては、雨露に曝されて、足は始終水に浸り、僅に舵の取柄の端に縛つた辨當を立ちながら食つて、日がな一日水と睨めくらでは餘り面白いものでもあるまい。瀧峽も九里峽も、其眼中にあるものでない。

大和の十津川から梅の尺締一本一丈五尺五寸のものを、此處まで持つて來るとして、收支初めて相償ふ最少の數量一萬三千本の平均を取つて見ると、山では一本四十錢に當つたものが、柚賃、運賃、筏の組賃、問屋の保護賃、縣稅、堰代、之に非常の費用、使用人の給料及び金利を見積つて、丁度二圓九十錢になると言ふ。道程凡そ二十六七里。切り出してから此處へ着く迄の日數約六箇月とある。

見渡せば、ごろ／＼と轉つた此の材木も、今日假寢の夢を此處に結んで、明日は何處で切るゝとも何處へ賣り飛ばさるゝとも知れぬ。

教材は和歌山縣下熊野の大森林から木材を伐採して、それが各地に運送されるまでの有様を叙

したもので、文は八段に分れてゐます。第一段は筏流しの壯觀で全篇の序説、第二段は筏流しが容易でないこと、第三段は立木の伐採、第四段は伐出し、第五段は伐出しの困難、第六段は流した木材を『あば』で受止めること、第七段は筏組み、第八段は筏流し――

第一段では熊野河口に集つた木材材の壯觀な有様を叙して全篇の背景とし、第二段では此處まで運び出す徑路が容易な業でないこと云ふことを叙して、筏流しの主題に入る伏線としてゐます。

第三段から愈々主題に入り、此の段では先づ其の木材が伐倒されてから山出しに掛かるまで、第四段は谷へ送出すまでの有様、第五段は其の木材が大川に出るまでの徑路、第六段は大川に出て愈々筏になるまで、――以上の三段で山から立木が伐出されて筏になるまでの概略を述べ盡したことになつてゐます。

第七段八段は筏流しの困難さで、第七段では先づ其の筏の組方、第八段ではそれを流す筏師の並々ならぬ苦心を物語つてゐます。文の中心は矢張筏流しで、八段の『筏師が此の間の變化極りない景色を縫つて下る様は、云々の邊りにあります。』

紀伊山脈の間を縫つて流れて下る十津川と北山川の沿岸は、有名な木材産地である。云々、一篇の背景で是れあるが故に此の筏流しがピタリと据ります。

紀伊山脈の間を縫つて下る十津川と北山川の沿岸は、日本でも名高い木材の産地で、其の二川の合した熊野川の河口にある新宮の町には、立派な製材所もあれば、木材を運ぶ船も澤山着いてゐる。その製材所の貯木場や川口に行つて見ると、何萬とも數知れない木材が川面一面に浮んでゐる。川上からは大きな筏が後から／＼と下つて来る。其の有様は洵に壯觀だと云ふのであります。日本は細長い島國ですが、併し内地の山野には想像も及ばないやうな大森林があり、それを伐出して木材に仕上げる、所謂製材事業なども盛に行はれてゐると云ふことを、地理的に眺めて見ようと云ふのが此の文の狙ひ處だと思ひます。

尋常科の讀本にも森林だとか、植林だとか、日光の杉並木だとか、阿里山の檜林と云つたやうな題材が出されてゐる、或る程度までの林産的智識は與へられてゐるのでありますが、併し其の天與の森林に斧を入れ、それを材木に仕上げると云つた所謂製材業に至つては、まだ少しも觸れてゐなかつたのであります。而も其の原産地たる大森林は社會と懸離れた人跡稀な深山にあつて、それが伐採せられ、運搬せられ、製材せられて、私達の手に入るまでには、想像も及ばないやうな努力が拂はれてゐます。此の教材はそこらを狙つて、ふだん何の事なしに見過してゐる一本の柱も一枚の板も、中々容易に得られるものでないと云ふことを、それとなく知らして置かうと云

ふのであります。

新宮町は人口約三萬、熊野河口を去る約一里の地に位し、元紀州家の家臣水野氏三萬五千石の城下です。熊野川に依つて運ばれる木材を此處で集めて製材してから各地に送出しますので、殆ど木材薪炭の取引を以て生業としてゐます。町には熊野三社の一たる官幣大社熊野速玉神社があり、尙又秦の徐福が童男童女五百人を率ひて此の地に遁れ、餘生を送つたと云ふ傳説もありまゝす。本州の極南交通不便の僻地、文化の恵みには遅れ勝ちですが、そこに又言ひ知れぬ味ひがあります。背後に控へた熊野の大森林を命として、悠々閑々迫らず焦らずのんびりとした生活を營んでゐる所は、確に一小樂天地と云つて然るべきでせう。而もそれが天下屈指の製材地で、何萬とも數知れない杉や檜の大木が、白い膚も美しく川面一杯に並んでゐる情景は、實に想像しただけでも懐しい氣持がします。

斯うたくさんの木材が集つてゐるところだけを見ると、わけもなく此處まで運ばれたもの、やうに思はれるが、云々

一寸見ただけでは如何にも容易い仕事のやうですが、併し二十里三十里の深山の奥深く立木となつて地面を覆ふてゐた大木が、此處まで運び出されには中々容易なことではありません。

此段は前段を承けて其の容易でないことを知らせて、是からそれが伐出されて筏にして流されるまでの有様を物語らうと云ふのであります。紀州は由來木材の産地で、あの三十三間堂棟木の柳の傳説などは、淨瑠璃文學で國民の頭に詩的な印象を刻み付けられてゐます。それらを背景にして此の文が一層優美な印象を讀者に與へませう。

先づ某の山で幾百本かの立木を伐倒す。さうして木の大きさや種類によつては、其のまゝ直に出すものもあるが、云々

伐倒して直ぐに運び出すものは先づ宜いとして、大抵のものは山で乾かさなければなりません。而もそれが谷に近ければ何の事はありませんが、遠い所は一通りの骨折ではありません。私達は此の難事業に人知れぬ苦しみを嘗めてゐる人達の所謂日影の働を思ひ遣らなければなりません。山の本と木の間小屋を建て、全く世事と離れた別世界で、鳥や獸を友として淋しい生活を續けてゐる人達の生活を思へば、そこには深い感謝と同情とを拂はなければならなくなるのでありませう。

伐出した場所が谷に近い處なら、其のまゝ押落すが、云々

此處は伐出しの困難で谷に近い所は其の儘押落し、遠い所では木材を數本並べて自然のレール

を拵へ、其の上を滑らせて段々送出すと云ふ、其の困難は並大抵ではありません。蟻が物を引くやうに棒切れで木材を捏ね上げながら、分、寸、尺と木材を滑らせる有様は想像しただけでも同情したくなります。そこらは適宜附説して其の困難さを忖度させなければなりません。

やつと谷へ木材を落しても、多くは木を流す程の水の無いのが常であるから、今度は此の谷をせき止めて、氣長に水をためる。云々

谷へ下りた木材が大川に出るまでには随分手数が掛ります。又水の渴した時は堰をするやら、滑りを附けるやら全く想像外の苦心です、斯うしてやつと大川へ出るとそこで筏に造り上げます。「今度は此の谷をせき止めて、氣長に水をためる。云々」と云ひ、「勿論行く手にも水が乏しければ、幾度でも之を繰返す。云々」と云ひ、こゝらは可なり精しく其の困難な有様を叙してゐますので、讀んだだけでも其の骨折の一通りでないことが想像されませう。殊に「木材を一本々々流し落す」と云ひ、「たくさんの細い木を二尺おきぐらゐに横に並べて、其の上をそりのやうなものに載せて運ぶのである」と云つた邊り、可なり委曲を極めてゐます。

さて漸く大川へ出たとすると、管流しといつて、其の木材を一本一本のまいで川へ流す。云々

此處は管流しをして筏に組むまでの有様で、一本一本大川を流す有様を叙する間に、「管流し」や「あば」などの説明を巧に織込んでゐます。説明が説明に墮しないで、木材を川に流す有様を想像させると共に「管流し」や「あば」がどんなものだと云ふことを知らせた邊りは、可なり圓熟した筆の冴えを見せてゐます。

筏の組みやうは、先づ尺縮四本を標準として一組とし、此の一組の木材を幾つもつないだものが一筏になる。云々

此處は筏の組方です。尺縮は註にもあるやうに、方一尺長さ二間の體積で、尺縮四本を標準にして一組とし、其の一組の木材を幾つも繋いで一つの筏を組み上げる。そこらは是非繪畫や圖解などに依つて其の實際の有様を想像させなければなりません。『いはば一筏は一列車、各組の木材は一輛々々の車に當るのである』の形容も頗る巧です。

一筏には普通二人乗つてゐる。一人は前の方で舵をとりながら櫂を使い、一人は後に居て竿を執つて筏を操る。云々

是からが愈々主題で筏流しの有様です。一人が前の方で舵を執れば、一人は後にゐて竿を執つて筏を操る。途中開門があつたら、其の開門を潜つて奔流の間を縫つて、水のまに／＼矢のやう

に馳せ下る熟練な筏師の離れ業は、見てゐても面白いやうですが、乗り手に取つては本當に生死の境です。一度油断をすれば一命にも拘ります。一寸の油断もしないで奔流岩を嚙む間を縫ひながら、巧に筏を操る骨折は並大抵なものではありません。『筏師が此の間の變化極りない景色を縫つて下る様は、如何にも愉快さうに見えるが、云々』は本當に其の實感を物語つたものと言へませう。

百十三頁の挿畫は瀨八丁附近の溪流を筏に乗つて下る有様で、前の筏師は筏の中央にある舵を操つて方角を決め、後の筏師は竿を鹽梅しながら、筏が岩に打當らないやうに操つてゐる有様です。兩岸の岩のたゞづまひ、奔流岩を嚙む急潭、飛沫は飛び渦は巻く、見るからに戰慄を覺えます。

百十四頁のは開門の有様です。水の涸れた川、特に川幅の狭い所を選んで圖のやうな水門を拵へます。水の漏れないやうに木材を組合せて、中央に閉閉自在の扉か拵へてあります。今水を堰止めた所で、水が一杯溜まりますと、上の方に取附けた門かんぬきを外します。すると水は扉を押開いて奔流は筏と共に一度にどつと流れ出ます。圖の上にあるのは門で木材を横に渡して扉の開かないやうに喰止めるやうに仕組んであります。

最後の瀨八丁と九里峽は文の添景で、熊野川の情景を想像させるにはどうしてもなくてはならない景色です。瀨八丁は北山川の溪谷に在つて、新宮から北山十津兩河の會合點まで上り、それから北山川を遡ること約四里で東牟婁郡玉置村大字玉置口に達する。其處から兩岸の峯巒水を挾んで急に相迫り、斷崖壁立深潭に臨んで幽邃な溪谷を爲し、鬱蒼たる森林は碧潭と相俟つて幽邃閑雅な別天地を成してゐます。天龍木曾の溪谷と共に絶勝の地として夙に其の名が現はれてゐます。九里峽も亦其の附近であります。

本課は筏流しの實況を説明すると云ふのが主な任務になつてゐますが、併し文の主題となつてゐる筏流しは、壯快で而も趣味ある日本特有の木材運送法で、古來歌にも詠まれ畫にも描かれて、國民趣味の中に美しく溶け込んでゐます。殊に筏師が此の急流に筏を乗り出して、千番一番の離れ業を演ずる光景は、傍で見てもはらくします。奔流の間を縫つて、あつと云ふ間に巧に岩の間を潜り急潭を乗り切るかと思ふと、又悠々閑々、緩流の間を煙草をふか／＼吹かしながら呑氣さうに流して行く。そこらの情景は眞に詩的で、筏流し其の物が立派な藝術を成してゐます。筏流しはそこらの情景を狙つて初めて意味があるので、之をあつさりとして説明し去つたのは何としても惜しいことだと思ひます。取扱の場合には是非そこらの情景を詩的に背景附けなければ

なりますまいし、尙又それに依つて一枚の板片も一本の柱も、決してぞんざいに扱つてはならぬいと云つた感じにまで、子供を導かなければなりませんまい。

「筏」 烏賊手の義といひ、また浮棚の轉化ともいふ。竹木を繋ぎ合せ、舟の如くして舟行運送の用に供するもの、論語註に「桴。編竹木、大曰筏、小曰桴」と見ゆ。桴は筏に同じ。

「製材所」 山から伐り出した木材を用材に仕上げるところ。

「貯木場」 木を集めて貯へおく場所、

「壯觀」 壯大なみもの、りつばなながめ、偉觀に同じ。

「堰」 水を塞ぎ止むる所、おぜきに同じ。

「そり」 橋、雪國にて積雪の上をすべらかして、物を運搬し又は人の乗るに用ふる具、形種々あり。

「尺締」 木材の體積の單位、方一尺、長さ二間の體積、尺メに同じ。

「舵」 船具、船尾につけて船の進み行く方向を定むるもの「舵をとる」は取舵の意で、舵を

取りて舟行を誤らしめざるやう、適當に處置すること。

「權」 船具、眞直なる棒の上端に撞木をつけ、半ばより上を丸く、末の方を平たく削り、舷にかけ、水を掻き分けて船を進むるもの、楫に同じ、

「閘門」 船舶をして高低の差大なる運河船渠などを安全に出入せしむる爲に、其所に設けたる門の意、

「日がな一日」 朝から晩まで、終日に同じ、

尙参考として東京朝日所載の『日本の木材』をあげておきませう。

日本の木材

天井板が米材で、床柱は樺太の紅松丸太、根太は沿海州の落葉松角材で、ヌキは内地の杉材これ等が巧に組合さつて、一個の家屋が出来る。近頃では九尺二間のむね割長屋でも、かうした各方面の材木が入組んで、要所々々にその特長を發揮してゐる。

既約注文より思惑仕入の小賣商

外國よりの輸入材はもちろん、内地材の大部分は東京方面の需要のためには、深川の木場か芝浦埋立地に一旦集まつて、そこで勢ぞろひして、それから市中の材木屋へくり込み、材木屋は特別の注文を除く外は、暑い夏の日でも、寒い冬でもおかまひなし、店先に立看板同様野ざらしして積み重ね、直接需要者に小賣する。

金融は出来ぬ一ヶ年の需要數量

半成品で小賣するといふものは他に餘り類がない、ところが木材はひき材か、角材、丸太材のまゝ小賣されて、需要者の手に移つて初めて加工される。今日賣れなければ明日は棄てねばならぬといふ生魚や、野菜ものとは違ふにしても、何時までも賣れない場合には、野菜物以上に處分に困るのは木材である。第一取扱に不便である。おまけに我國には木材倉庫がない（個人の小規模は二三あるが）から、倉庫にいられて銀行から金融をつけるといふ事が出来ぬ。大連の豆粕同様野積するか河にけい留さして置くより外に方法がない。材木屋は實に水商賣でそれに商品擔の金融擔保がつかぬから、自然危険が伴ふ、商賣がなくて閑で困る場合もあれば大失火が起つて木材の直段が一時に暴騰することもある。東京横濱を中心に、各所

から陸送又は海送で入つて来る木材數量は、大正十四年度に八百八十四萬石、價格七千三百三十四萬圓、これを種別にすると北海道の雜木角五十萬石四百萬圓（百石八十圓）松角中丸太十萬石五十五萬圓（百石五十五圓）樺太松中丸太百三十萬石六百八十九圓松ひき角十萬石九十萬圓、沿海州エゾ、ト、落葉松紅松等十五萬石百五十萬圓、西まはり青梅材、甲州材東海道材三十萬石四百五十萬圓、米國材三百四十一萬石三千四百十萬圓見當に達してゐる。なほその外東京横濱を除く各地方に米國材が四百萬石、北海材九十萬石、樺太材（虫害材を含む）九百萬石伐採され、秋田の曲り材の如きは濠洲方面へも輸出が試みられてゐる。

一山いくらで元木の賣買をする

一體世間では藥九層倍といふが、材木もその立木の原價といふものは、實にお話にならぬ程安價なものである。縁日のバナナ屋ではないが第一『一本いくら』といふやうな微溫的な取引ではなく『この山がいくら』又は『百町歩何程』と極く大體の目分量で賣買される、それを多くは冬の積雪期に雪を利用して、河なり鐵道なり、運送上の便利なところまで運ぶ。山元の工場で大體の形を作る、それから船なり鐵道によつて需要家に送られる。

米材の輸入は木材業者に苦の種

それであるから木材のみは原價の何かけといふことなしに、工賃と、運送費と利じゆんと金利とを標準として一本の角材なり一束のひき材に對し、値段をつける。大正十二年の震災の時や大きな火事が二つ三つもあつたものなら、材木屋はホク／＼もので、直ぐ値段を上る。それでも賣れるからそこに又商賣の面白味が現はれて來るのだが、近來米國材の思惑輸入が非常に多く、秋田、山梨、静岡等の山林地方でも、米國材を建築用として使ひ、比較的値段の高い自國材を賣ることは、あだかも臺灣人がその本地産の米を移出し、外米を輸入して常食とすると同じやうである。かくして内地の木材界は一方米國材に脅かされ他方木材を商品としての融通化が出来ないから、金融上にも損の立場にある。

第二十八課 瀧澤馬琴の苦心

此の教材は馬琴一代の大作八犬傳の著作を中心を取つて其の苦心と勞力を物語つたもので、教

材の出所は、馬琴自身が八犬傳の最後に書載せてゐる回外剩筆です。

回外剩筆は馬琴が著作の苦心を物語つたもので、約二百頁に亘る可なりの長篇ですが、特に必要な部分だけを左に摘録して参考の資に供しませう。

回外剩筆

文化十一年甲戌の春正月下澣、本傳の作者曲亭主人。這小説を綴るが爲に、案を拭ひ硯に呵して、將新研を開まくす。時に廻國の頭陀あり、上總より到る。一日著作堂の松の扇を敲きて、主人に對面を請ふ。頭婢是を告ぐ、主人の道く、咱塵を厭ふの故に、間嘗に惟を垂れ客を辭して、書を読み書を綴りて、もてこの半生を送る而已、然るを世の遐邇人、親疎となく、雅俗となく、吾虚名を謬認めて、訪來て對面を請う者、幾許名ぞ、吾其人毎に、出て言を費し、日を費さば、かばかり煩はしきことはなし。この故に吾疾病に推て、敢て面することなし。只相識る紹介ある客には、只得出て來意を聞のみ、开は相識に願れば也。遠方なる未見の人の、書を寄するも、皆かくの如し。多くは吾を見まくする者、兩國橋邊なる、勾欄戲場を看て、故郷へ還るの日、話柄になさまく欲するが如し。遣りね遣りね、と手を掉ば、頭婢

こゝろ得て、又出て頭陀に謝するに、主人の疾病をもてす。頭陀是を聞いて、否野衲は、翁の相識某甲が、紹介の手簡を齎したり、枉て對面を饒させ給へと、連りて請ふて已ざれば、主人已ことを得ず、書齋へ召容れて、對面す。云々。

是年（文化甲戌）冬十二月八犬傳第一輯十回五卷、刊行の書賈、山青堂發販す。其明年の冬、第二輯、五卷出るに及びて、這書をいふ者、漸々に多かり。第三四五輯に至りては、本傳多く賣ぬるものから、山青堂他事に耽りて、本錢續ずやありけん。是よりの後書賈涌泉堂其舊板を購求めて、代りに第六輯を刊行す。然ども是も亦其人にあらざれば、第七輯を彫ぬる時、文溪堂の援助を得て、辛くして發兌しけり。この比本傳は、いよくますます時好に順ふて、其利尠からずと聞えながら、この兩書賈の等閑にて、刊行中絶しぬる者、徒に前後五六年を歴たり。恁而今の書賈文溪堂が其舊板を咸購得て、第八輯第九輯を、續刻發行しぬる隨に、是書の流行類稀にて、只江戸京攝のみならず、縣田舍間、漁浦樵山、約莫足跡に至る處、舟車の通ふ處、年貢の出る所、店賃を債らるゝ所、鶏犬の聲する處、洪鐘の響く所、國字四十七言を知る、田翁野奶山妻收童、約血氣ある者、是書を見て愛玩ばざるはなしと云風聲耳に暇なきまで、年々是を聞さる日はなし。抑本傳初版の年より、光陰流るゝ水に似て

年老の至るを知らざりける。作者古稀又半なりける。今茲天保十二年辛丑の秋八月まで、星霜二十八にて、本傳稿本思ひの隨に、全局を結ぶ折から、彼頭陀何等の風に吹れけん、いと珍らかにも訪來にけり。迭に別後の口議訖りて、頭陀が道く、昔年御教諭を承まつりしより、忘れたるにあらねども、年來西海南海なる、九國四國を行脚して、淹留の地も多かりければ幾春秋を累たる、疎濶の罪を饒させ給へ。去歲より又安房に到りて、某甲の院に居り、西にありても東にありても、只八犬傳の流行に、耳目を驚すのみなれば、いよく翁のなつかしさに、叱られまつらんとは思ひながら、俺から居し關の門を、踰て推參仕りぬ。相別れまつりしより儂れば三十稔に近かり。翁も痛く老給ひにき。琴嶺君の早逝は、八犬傳の附録にも識されたるものなれば、驚き悼む所なるを、今さらに又いひ出て、物を思はせまつるべうもあらず。二十稔あまり、さきつ比より、故賢郎（琴嶺をいふ）と同居にて、神田にいまするとは人傳に聞たれども、この山檀に卜居の事は、知らで尋控たりき。八犬傳の多卷なる、第九輯四十五の卷までは、年々に續出さるゝを、待得て閱したりければ、翁の今も恙なく在するを歡び思ふ。心いそぎのせらるゝは、一日もはやく結局編を見まくほしう候也。稿本は遺もなく、綴り果し給ひし歟。厭しからずは一卷なりとも内見を饒させ給へ。と乞れて主人は

領きて、然也、九輯は多編にて、第四十九の巻より、第五十三の巻なる、第百八十勝回の下編まで、九巻にして局を結びぬ。追刻の首巻と共に、全本一百零六巻也。其四十七の巻は、楮數多きをもて、釐て、上下に分ちて、四十六より五巻なるを、今茲の冬發販すべく、遺る所五十の巻より下五巻も、續きて明春出すべしと云。刊行の書肆、文溪堂の情願に任せたり。是見給へと譬近なる、稿本四五巻を、抗拿たかひて出し示せば、頭陀は受載きて、讀に及ばず甲乙と、聞き見て且訝りて、御稿本は女筆なるべし、何とて自筆にもしたまはざるや、と問はれて主人は嗟嘆に堪ず、然也、この三四年來、我老眼年々に病衰して、去歳の冬十月より、書を讀ことも字を寫ことも、絶て不自由なりしかば、只得せうた婦幼に代筆させて、這稿本を綴りにき。といへば頭陀は眉を擧めて、开は不便なることに侍り、琴嶺君世にいまそかりせば、かゝる折筆勞の帮助にならせ給はん、今は千萬惜むともかなし、稿本の代寫を命じ給ふ、門人は候はずや、と問はれて主人は頭を掉て、否とよ、酒家わかれは昔より、戲墨に門人といふ者なし、三四十年前、吾戲作なる畫策子に、門人魁蕾子（又作傀儡子）などといふ名號を出したるもあれど、开は未生の人にて一時の戲れのみ、實に其人あるにあらず、然を文化文政年間、生狂才ある壯俊等が、吾弟子にならまくほりして、由縁に就き、紹介の人を求めて

漸次に訪來ぬる者八九名ありしかど、吾一人も是を許さず、且其輩に諭すやう、戲墨は讀書の餘樂にて、吾眞面目にあらねども、是をもて且暮に給し、又是をもて有用の書籍を購んとする也。素より宜き技也とは思はず、己が欲せざる所をもて、何ぞ人に施すべき。入門の義は決て承がにし。各這無益なる、遊戯に、光陰を費さんより、其師に就て學問せば、必ず裨益多かるべし。且戲墨は師に従ふて、學ぶべきにあらず、各其才に儘するのみ。吾は唐人の稗史小説を多く見て、其文其巧致なるを擇みて、他に效へり。晤譚の爲に訪れんは、聊か厭しからず。御所望の一條は、思ひ絶給へなどいふに、各望を失ひながら、猶懲すまに、折々訪來ぬるものありしかば、其壯俊等のこゝろ得の爲に、身を脩め、家をととのふべきことを説示し、又暇ある折は、老子壯子などを講するに、打盹なむりを催さざるは稀なりき。开が中に入門御辭退の義はちから及ばず、いかで戲號に琴字を許し給へといふ。琴字をもて名號と做す者は、吾のみならず、昔も今も、儒に琴所琴臺などあり。开は各位の隨意なるべしといふに、皆歡びて、或は琴雅、又琴梧、或は琴川又琴魚など告る者、五六名ありしかども、それも一兩稔の程にして、夙く胡越の如くになりけり。今思へば、三十餘年の昔なれば、其人猶生るや、死せりや、いまだ知らず、是等の内中に、樸亭琴魚は同じからず、他は吾知音の

友、伊勢人篠齊の弟にて、窓螢餘譚、青砌石文などいふ。物の本の作者なりしに、惜むべし、四十餘歳にて、身故りにき。這他女流も、遙に吾に書を寄て、开が綴りたる策子の稿本を、示し、雌黄を乞ひしもあり。或は戲墨の弟子にならまほしとて、其親をもて請し少女もあり。近會又一妻婦の消息して、其子に教べき事と、内を理べきことなどを問しもありけり。志は然ることにて、感じ思はぬにあらねども、婦女子なれば答ざりき。开が中に陸奥なる、眞葛てふ才女も婦婦にて、吾には七ばかりの姉なりと聞えしに、この老女は、書を善し、歌をよみ、和文も亦拙からず、且殊なる男魂をもて、獨考といふ。議論の書三卷と、奥州はなしといふ隨筆一卷、又磯づたひといふ紀行一卷、其餘も小冊子、四卷綴りしを吾に寄て、筆削を乞るゝことの切なりければ、吾已ことを得ず、獨考論といふ二卷を編述て、もて是に答にき。然ども是も女流なれば、辭して久しく、交はらず。こは文政元年のことなりしに、後七稔ばかりを歴て、竟に鬼籍に入りたりき。と風の便に聞えけり。是等は要なき多辯なれども、門人なしとのみはゞ、實言ならじと思はれんか、とて、漫に諄言しつるにこそ、と告れば頭陀は感嘆して、世の戲作者は門人弟子の一名も多きを榮にして、某甲某乙と、其書に名を録ししも見ゆるに、翁の用意は格別にて、人の及ばぬ所なるべし。扱御眼病はいかに候や、

开は易からぬ病厄なれば、いかで療養效驗あれ、本復を祈るのみ。然るにても這稿本を、女筆にてよくも代寫せられしものかな。見るに漢字も假名使ひも、皆誤あらざるは、非除教給ふとも、容かるべき事ならず。這義も示し給ひぬ。と請れて主人は嗟嘆に堪ず。然ばとよ其事なれ、言多くとも緩やかに、坐して徐に聞給へ。吾鬢歳の時よりして、書讀ことを好みしかば、成長に及びては、一日も書卷を把ざることなし。憊而寛政二年の冬、創めて戲墨の、畫策子二卷を編て、書肆甘泉堂が刊行せしより、今に至り五十二年、刊行の雜書物の本共に、二百九十餘筆に及びり。這他刊布せざる筆記雜纂、或は二三葉の小紙子多かるを、數へ盡すべうもあらず。就中文化年間は書賈に乞るゝ、大小の物の本多かりければ、日毎に夙に起出て、机案に面ひつゝ、其夜人定まで、稿本を綴りて、人の爲に疲勞を厭はず、亥の時過ては睡氣つくまで、書を讀て、みづからの樂みにす。尙佳境に入る時は天の明るを覺えず、隣鶏の鳴くに驚されて、躓て起出て、又机案に向ふ日もありけり。憊而年來を歴ぬる隨に、逆上口痛の患起しより、年五十に至ては、齒は皆年々に脱て、一枚もあらずなりぬ。且夜枕に就く時仰ぎ臥せば、瞑眩して堪られず、横に臥せばさもなかりき。この比一名醫と晤譚の折、吾この事を告しかば、名醫驚きて、足下生來血氣人に勝れたれども、人の氣根は涯りあり、

九石の弓も常に緊く張て緩めざれば、其弦斷ざることを得ず。其樂む所をもて名利の爲に殉するは、賢者のせざる所事。今より些し緩めよ、といはれし義の理りなれば、吾答て、教諭承り候ひぬ、名利の爲に身を忘れて、無益の筆硯に耽るにあらねども、少かりし時愁に義俠の心ありしかば、今に至て其癖うせず、一旦書賈に諾ひし稿本を、等閑に做す時は、他等は發販の時日後れて利を失ふこと尠からず、是も亦不義に似たれば、事のこゝに及べるを、思へば愚に候ひき。と謝して是より夜學せず、物の本も稿本の、年に二板と相定て、其餘は需に應ずることなく、夜は人定を限にして、はやく枕に就しかば、身も漸々に安くおぼえて、仰臥しても瞑眩せず、をさく養生を宗としける程に、吾還曆の年、丁亥の夏より秋まで、大病に嬰りて、命危かりしも、幸にして瘥りにき。左右する程に、九年以前癸巳の秋、八九月の時候にやありけん、有一朝不圖起出けるに、右の一眼見ることを得ず、うち驚き且訝りて、故兒に示すに、瞳子上の方流たり、療治なさるべしといひけり。其後親族朋友、書賈等まで、治療を薦る者多かりしかど、吾敢従はず、且おもへらく、吾は幼稚より、眼の患なく、流行目だにも病ことあらず、然るを今一朝に、右明を失ひしは、年來讀書筆研の疲勞なるべく、且冬春毎に高き火桶を坐右に置いて、机邊の寒氣を防ぐ事、久しくなりしかば、其火氣

何時となく、右明に入りて、乾かされたるにぞあらむらん。譬は老樹の片枝立枯たるに異ならず、非如醫療に術を盡すとも、草根木皮のよく及ぶべきにあらず、と尋思して、一日も筆研を排斥せず、初は硯心見難て、毫を染るに不便なりしに、それも熟ては不便にも思はず、其後故兒の憂に丁りし年も、世渡りなれば忌ども果ては、又筆を把らざることを得ず。其次の年、四谷へ移徙しても、左明は異なることもなければ、著編は尙年々に綴りぬる程に、戊戌の春の時候より、何となく左明も亦翳むやうになりしに、夏に至りては、いよく其異なるを覺しかども、尙悟らず、こは眼鏡の曇りたる故ならめ、と謬思ひて、俗に本玉と歎いふ、水晶製の眼鏡の、價貴きを厭はで、此彼と多く購求めて、掛替々々凌ぐものから、巳亥の春に至りては、いよくかすみて、病眼なるを知りながら、本傳いまだ大團圓に至らねば、書肆の需に推辭も得せで、猶辛じて綴る物この外にもありけり。恁而去歲(庚子)の春までは、本傳の稿本も、故の如く、十一行の、細字にもせしかども、夏に至りては、只朦々朧々として、細字を寫こと得ならねば、其稿本を、五行の、大字にしつ、其も手撈りにて、去歲の秋九月本傳第九輯、四十五の巻まで、綴り果して刊行の書肆、文溪堂の責を塞ぎにき。かくては明年四十六の巻以下を、綴り果さんこと心許なし、先や尙かくてある程に、今一卷なり

とも綴らばや、と愚心を勵して、第九輯百七十七回、一顆の智玉途に一騎の驕將を懲すといふ一段を、五行或は四行の大字にもしぬるに、字形も鈴釘兵しどうへいにて、且墨の續かぬ處ありて、讀がたしといへば、开を宅眷やからに補せなどしぬる程に、十一月に至りては、宛雲霧の中に在如く、又朧月夜に似て、一字も寫こと得ならずなりぬ。只筆研不自由なるのみならず、書畫を見ても楚ふかと見えす、僅に晝夜を辨じ、東西を知るのみ。いかにともせん術なければ、書案を退け筆を投捨て、獨歎息のあまりに、

なからふるかひこそなければ見えすなりし、書卷川に猶わたる世は。

とうち詠じて、爐に寄てのみ居程に、文溪堂及貸本屋などいふ者さへ聞知りて、皆慨しく思はぬはなく、爲に代寫すべき人を索るに、意に稱なふ然る者の、あるべくもあらず、吾も亦失明めいては生甲斐もなければ、這年の秋九月より次の年まで、人の薦る醫師を三名まで、轉藥しぬれども、いまだ毫も效驗あらず、然ば今茲(辛丑)の春に至りて、吾又おもふに、八犬傳は今昔有がたき、大部の物の本なるに、始ありて終なくば、只看官みらくわんの飽す思はんのみならず、文溪堂が爲には、後々までも利を全くしがたくして、遺憾ひんげんこそあらんすらめ、人の爲に謀りて忠ならぬは、吾も亦恥る所也。然ばとて吾孫興那は、尙乳臭ある机心うせず、且武藝を奸

める本性なれば、恚る幫助になるべくもあらず、他か母は人並に、にじり書もすれば、教て代寫させばや、とやうやく思ひかへしつ、第百七十七回の中、音音が茂林濱にて再生の段より代筆させて、一字毎に字を教へ、一句毎に假名使を誨るに、婦人は普通の俗字だも、知るは稀にて、漢字雅言を知らず、假名使てにをはだにも辨へず、偏傍へんぼうすらこゝろ得ざるに、只言語をのみもて、教えて寫する吾苦心は、いふべうもあらず。況て教を承て寫く者は、夢路を辿る心地して、困じて果はうち泣くめり。然而代寫一枚に滿みちれば讀反させて、又教て傍わが訓を寫するに、熟字を知らず、又句讀をこゝろ得ねば、讀時或は字を脱し、或はなき字を添て讀めり、讀すら輒ついでからざるに知らずこゝろ得ざる事を口授せられて、寫く者の艱難を、思へばいと痛しさに幾度か已ばやと思ひしを、又思ひかへして

筆捨の松のふる葉も言の葉も、子等にをしえてかゝするぞ憂き。

とうち詠じて、且慰めつゝ、一二巻代寫させぬる程に、他もやうやくに熟て、苦心初の如くにはあらず、偏傍などは、稍わきまへ知りて、言を費やすも、舌の疲るゝまでに至らず。編中の出像さしなは、代寫さすべき者なければ、君わが只其人物を圈點して、もて畫工に傳ふるに、委細に注文を代寫させぬるのみ。稿本はさら也、書畫工の寫本も、吾いふ如く寫りや否いな、心許な

く思へども術なし。況文中に故事などを引用ひんと思ふに、原本に涉らざれば暗記の失あらんことを恐れて、命じて其書を拿出させて讀するに、漢籍は及ぶべくもあらず、假名まじりの古書といへども、傍訓なきは得讀す強て讀すれば、けつご缺舌侏離しかりにて要をなさねば、ひやも援用ふべくもあらず、寫することは教もすれど、讀する事は吾見るにあらざれば、いよ／＼難義にて實にせん方なし。然ども教誨を承る者の、困しながらも倦傳よく勉にあらざれば、這十卷を綴り果して、局を結ぶに至らんや。縫刺の技薪炊の事などこそ他が職分なれ、文墨風流の事に代らせで、其要を做さまく欲するは、理なしとも理なしと、知りつゝも月を累ねて、今茲辛丑の秋八月廿日といふ日に、本傳第百八十勝回の下編附録目、諸將の成敗其尾を備にす。といふ結局大團圓まで、稍稿じ果たりき。噫無益し、老の諄言よ、といひつゝ呵々とうち笑へば、頭陀は感嘆の聲を得たゝず、姑且して道く、云々

尙中等學校の國文教科書にも、「瀧澤馬琴著作の苦心」と題して次のやうな教材が出てゐます。これもやはり回外剩筆を基にしてゐますが、讀本の文は筋も叙述も大體これに準據してあります。

瀧澤馬琴著作の苦心

瀧澤馬琴は近世第一の小説家なり。著せる小説二百六十餘種、雜著を合すれば、無慮三百數十種あり。雄篇、大作、甚だ多く、ことに、八犬傳のごときは、四十八歳の時より七十五歳の時まで、二十七年かけて完成せしものにして、巻數、すべて百六卷に及べり。さて、馬琴は、いかに勉強して、かゝる、多くの書を著し、いかなる艱難をへて、かゝる大作を完成せしか。そは、其八犬傳の末に自記せるもの、頗る詳なれば、いま、其要を記すべし。

馬琴が、始めて、小説を出しゝは、二十歳のときなり。それより、毎年、平均七八種を出して、筆をとらざる日とはなかりしか、ことに、文化年間は、書肆に乞はるゝ、大小の著作、頗る多かりしかば、毎日、つとに起きて、机に向ひ、夜、十時にいたるまで、稿本を綴り、十時よりねむけづくまでは、讀書して、心を慰め、興到るときは、曉に達するを知らざるこゝとありき。かくて、年をへぬるまゝに、逆上、口痛の病起りて、齒、年々に脱け落ち、年五十にいたりては、遂に、一枚もあらずなりぬ。又安眠も得られずなりしかば、ある日、之を

醫に謀りしに、醫驚きて、『君、生來、血氣人に勝れたれども、人の氣根には限あり、強弓も、つねに、きびしく張りてゆるめざれば、其弦たえざるを得ず。名利のために、身をそこなふは智者のせざるところなり。今より少しくゆるめよ。』といふ。馬琴答へて、『教諭承りぬ。名利のために、身を忘れて、無益の業にふけるにはあらねど、いつたん、書肆と約せし稿本をなほざりにするときは、出版の時後れて、利を失はしむること少からず。是れ不義理なればとて、事のこゝに及べるなり。思へば、愚にて候ひき』とて、それより夜學せず、著作も一年に、二種と定めて、其餘は、需に應ずることなく、夜は、人定まるを限として、早く、眠に就き、大いに、養生を旨としたりしかば、身も、やう／＼安く覺え、又、安眠をも得るにいたれり。とかうするほどに、馬琴が六十歳の秋は來りぬ。ある朝、ふと起き出でけるに、右の一眼見ることを得ず。うち驚き、且、怪みて、其子に示すに、『ひとみの上部流れたり。療治せらるべし。』といふ。されど、馬琴は思ふよう、『われ、いとけなき時より、はやり目だに病みしことなし、しかるに、一朝、右眼を失ひしは、年頃の讀書の疲にもあるべく、又、冬、春ごとに、高き火鉢を、左右に置いて、寒を防ぎしかば、其火氣の右眼をおかしたるにもあるべし。醫療及ぶべからず。』とて、遂に従はざりき。

かくて、左眼を頼みて、尙一日も、筆をとらざることなかりしに、六十四歳の春の頃より、左眼も、また、何となくかすむようになりぬ。されど、『眼鏡の曇りたる故。』と思ひて、水晶製の價貴きをもいとはず買ひ求めて、かけかへ、かけかへ凌ぎしが、其かひ、さらになくて、眼は、いよ／＼悪しくなりまさるのみなりき。されば、馬琴も、遂には、病なることを悟りしかど、四十八歳のときより書きそめし八犬傳、未だ完成せざれば、尙、つとめて、筆をとり、生活の必要に迫られては、此ほかのものを綴ることもありき。かくて、七十四歳の春までは、ともかくも書きつぎしが、夏より秋にいたりては、さながら、雲霧の中に立つがごとく、これまで、十一行に書きし稿本を、五行、四行に書きしかど、尙しどろにて、墨のつかぬところさへあり。秋の末になりては、遂に、一字も書かれずなりぬ。『盲となりては、生けるかひなし。』と、こゝに、始めて、なほざりにせしことを悔ひ、醫を轉ずること三度にも及びしかど、時後れけん、驗だになし。

馬琴、つらく／＼思ふよう、『八犬傳は、古今まれなる大部の小説なるに、始ありて、終なくば、讀者は、あかす思ふならん。又、書肆も、後々まで、利を全うすることあたはずして、遺憾に思ふなるべし。されど、我子は、すでになし。孫はあれど、乳の香うせぬ子どもなり。

かゝる助となるべくもあらず。唯、嫁は、人並に、にじり書もすれば、之に教へて書かすべし。』とて、それより、口述して筆記せしむるに、漢字、雅言はもとより、假名遣、てにをはもわきまへず、くどくど教へざるべからざるもどかしさに、『くちをしの目や』と、馬琴は思ひしなるべし。まして、教を受けて書くものは、さながら夢のこゝちして、困りて、はては泣くのみなりき。されど、一二巻と筆記させるほどに、嫁も、やうやくなれて、苦心はじめのごとくならず、漢字の偏傍などは、やゝわきまへ知りて、言を費せども、舌の疲るゝまでにはいたらず、七十五歳の秋八月、遂に、名におふ八犬傳を完成することを得たり。

あゝ、馬琴は、かく勉強して、多くの書を著し、かゝる困難をへて、大作を完成したるなり。讀むもの、誰か感歎せざるべき。

讀本の文と對照して見ますと、文の構想も叙述の體裁も殆んどこれと同じです。

馬琴の略傳

瀧澤馬琴は明和四年六月九日深川に生る。是より先、父興藏は川越松平侯の支族松平信成に仕へて其の家老たりしが、旨に忤ふことありて浪士となり、江戸に來りて深川に住居し、幾

干もなくして歿したるを以て、兄興旨に寄り。母の育する所となれり。幼にして稗史小説を好み、十一二の頃には、印行の淨瑠璃は大抵閱讀し畢りたりと云ふ。十二三歳にして武家奉公に出でしも、其驅使に堪へず、遂に遁れて旗本戸田大學頭の徒士となる。然れども永續せず、爾來數度家を代へて仕へたれども、意に満たざりしを以て、遂に思を仕官に絶ち、これより或は山本宗洪の門に入りて醫業を學び、龜田鵬齋の從僕となりて儒道を修め、石川五老を訪ひて狂歌を、橋千蔭に就きて書道を學びしも、皆其の目的を貫かずして中止し、茲にはじめて小説家たらんとし、山東京傳に師事して、寛政二年の冬『廿日餘四十兩盡用而二分狂言』といふを著はし世に行はる。即ち處女作なり、尋で書肆薦屋重三郎の家に寄寓して著作を試み、其の名漸く世に知らるゝに至りしに際し、薦屋の叔父にして新吉原に引手茶屋を營めるもの、深く馬琴を愛し其の女に配せんとしたりしが、自重して之に應ぜらりき。尋で飯田町なる下駄家の寡婦に入贅して、著述の傍ら手習師匠となり、また神女湯奇應丸等の藥を製して之を賣りなどして利殖の道を圖れり。されど他姓を冒すことを快く思はざりしがゆゑに、其の女に養嗣して家を譲り、己れは本姓瀧澤に復し専ら筆硯に親しみしが、寛政九年京傳罪を得て筆を收めしより、當時の文界は馬琴の隆盛を極め、其の著益々行はるゝに至り、

文化二年椿説弓張月を、四年三七全傳南柯夢を出すに及び、名聲頗る高し。十一年に至り、はじめて南總里見八犬傳を著すや一篇出づる毎に洛陽の紙價爲に高く、老若男女争ふて之を求めしといへり。天保十二年に至りて成る。時を費すこと凡そ二十年。行文の妙、結構の奇、相並びて近代の傑作と稱せらる。是より先き、子琴嶺松前侯に聘せられて醫官となりしが、天保五年馬琴に先ちて歿したるより、藏書一切を賣りて、其の子興那の爲めに御家人の株を買ひ與へたり。かくて琴嶺の歿する前年即ち天保四年の秋、右眼明を失し、天保十年又左眼明を失し、全く盲目となりたれども、八犬傳及び美少年録其の他の續稿なほ完了に至らざるものあり。筆を中途に絶つるに忍びざるのみならず、書肆の請又切なるものありしを以て、琴嶺の妻ミチに口授し、辛苦の中に之を大成し、嘉永元年十一月六日歿す。年八十二。小石川茗荷谷深光寺に葬る。馬琴資性剛毅にして世俗に阿らず、交友を絶つことあり。故に人物上の毀譽交々到り、其の一時師事せし京傳及び又其の弟京山、畫工豊國等とも遂に協はざるに至れり。而して其の學問また博洽にして健筆比なく、筆を執れば千言立ち所になる。加ふるに其の小説を著すや一定の主義を有し、必ず勸善懲惡の意を寓せざるはなく、他の作家のごとく淫奔輕薄の弊に陥らざりしは、馬琴の自負するところなりき。

作家としての馬琴の生涯を通覽しますと、第一期は黄表紙作家時代で、寛政三年から享和三年に至る間です。其中寛政七年以後に武王軍談漢楚軍談の如き翻案にも筆を染め、後年讀本作家としての基礎を造つてゐます。彼の黄表紙洒落本は量に於て京傳一九に及ばず、内容に於ても其の本領たる輕快洒脫とは頗る縁遠く、作品としては甚だ低劣な評價しか贏ち得ませんでした。

第二期は享和三年以後嘉永元年に至る四十五年間で讀本作家としての時代です。若し此の間に區劃を求めますと、前期は文化十年迄で短篇が多く、材料も巷談街説を主として敵討や孝行談を作り出し人物も世間並の者を點出して普通に近い戀愛をも取扱つてゐます。後期は文化十年以後で、長篇大作を物した時代に當り、主人公は總て史上の人物から取り、且つ道德的に非難の無いことを期し、理想的の英雄美人を現しました。尙此の期を更に小別しますと、文政三年迄は典型的な敵討物語で、それ以後は敵討でない傳説巷談に種を取つてゐます。しかし、それらの區劃は形式的のもので、内容上には發達變遷の痕迹が著しくありません。

馬琴の作品は長短取混へて三百數十篇に上りますが、其中黄表紙洒落本及び合巻類を除いた本だけでも三十篇に近いと言ひます。彼の名聲は一に讀本の述作に懸つてゐますし、兎角の非難はあつても彼の眞價は讀本よみほんに存在してゐますから、馬琴を紹介するには主として此の方面を考察

しなければなりません。

馬琴の讀本を作品の基調に依つて區別しますと、敵討物、巷談物、傳説物、歴史物の四種類となります。

仇討物 此の種類の作品には夙く寛政七年の『高尾千字文』（仙代萩と水滸傳とを取合せたもの）がありますが、此の傾向の著しくなかつたのは享保三年以後のことです。第一の特徴としてはそれ／＼の典故を傳説巷談に仰いで之を補説して全篇を構成し、或は幾多の傳説類を挿話として取込んでゐることです。例へば享保三年に出た『比翼文』では白井權八と小紫との目黒の戀塚の由來を語り、文化二年に出た『小夜中山言遺響』では夜泣石と無間の鐘との巷談を結合し、文化三年に出た『三國一夜物語』では謡曲の富士太鼓、梅ヶ枝、弱法師を取合はせてゐます。又同年に出た『仇討たそや行燈』では、佐野次郎左衛門と吉原萬字屋の八橋との情話を材料としてゐますし、同じ年に出た『枕石夜話』の淺草の一ツ家の媼や、文化四年の『雲絶間雨夜月』の鳴神上人や、文化五年の『巷談坡堤庵』の土手の道哲など、いづれも人口に膾炙してゐる説話を素材としてゐます。

第二の特徴としては、此の種類の作品には大概怪奇談が附隨してゐる事です。或は信仰の徳に

因つて神佛が冥護を垂れ、或は生靈死靈又は禽獸が作中人物の運命を暗々裡に支配するの類です。例へば享和三年に出た『月氷奇縁』では無辜の罪で殺された娘の怨念の爲に、或豪族の一族が悲運に陥るし、文化二年に出た『稚枝鳩』では、辨天と觀音とが孝子を庇護してゐます。これらの奇怪な構想即ち超自然的要素は各作品に有り餘るほどに撒きちらされてゐますが、これを眞面目に解釋しますと馬琴の運命觀とも見られませう。しかし、それを眞面目に取扱ふべきか否やば問題で、此の種類の構想は單に興味中心で彼の思想を云爲すべきではありません。此の系統は寧ろ支那稗史の素材を傳統的に流用したに過ぎないものです。木馬が人を受けて一夜の中に出雲から飛驒へ疾驅したり、雷獸が人に落雷を豫報するなど全然童話式で、いかにも罪のない奇抜な面白味があります。一般に低級な讀者を相手にしたことであり、智識階級の人士も小説によつて人生の機微に觸れようなどは夢想だもせず、單に娛樂として取扱つた時代のことです。深く咎めるに當りませぬ。そのみならず近世の社會問題たる仇討を中心とする物語にいろ／＼の傳説を取混へ、極めて複雑な仕組によつて何處までも因果應報の理に節義の觀念を絡まして説話を進行させた點は認めてやらなければなりません。しかし京傳の如く構想に比較的無理もなく巧に説話を展開させて行く手腕は彼の名聲を重からしめた素因です。而して仇討に對する彼の思想は、言ふ

までもなく武士道の精華として極力讃嘆し此の美的幻影に陶醉して他意なきの態度を示してゐます。

巷談物 巷談を取入れ、しかもそれを説話の核心とした作品をこゝに一括して見ますと、

- | | | | |
|------|----------|------|------------|
| 文化四年 | 三七全傳南柯夢 | 五冊、 | 北齋畫(三勝半七) |
| 同 五年 | 括頭巾縮緬紙衣 | 三冊、 | 豊廣畫(椀久松山) |
| 同 年 | 旬殿實々記 | 十二冊、 | 豊廣畫(お俊傳兵衛) |
| 同 年 | 松染情史秋七草 | 六冊、 | 豊廣畫(お染久松) |
| 文化七年 | 常夏双紙 | 五冊、 | 春亭畫(お夏清十郎) |
| 文化九年 | 糸櫻春蝶奇縁 | 八冊、 | 豊清畫(お糸佐七) |
| 文化十年 | 美濃舊衣八丈綺談 | 六冊、 | 北嵩畫(お駒才三) |

これは皆歌舞伎浄瑠璃によつて流布した材料で、すべてが若き世の戀の悲劇です。然るに馬琴は之を讀本として取扱ふに當つて、先づ戀愛の説話を中心とすることを回避しました。さうして孝悌忠信を標榜し、戀愛は單にこれが因となり縁となり又果となるに過ぎないものとし、彼は戀愛をば一種の宿命的因果律に左右せらるゝものと見、許嫁であるか然らざれば前世の約束

に因らなければならぬと考へました。故に自由戀愛の如きは道德的罪惡で、不義密通の名の下に排斥し、此の種の人物は總て終りを善くしないことになつてゐます。例へば『松染情史』に於けるお染と久松とは共に南朝の遺兒で親の許した仲であつた。然るに名のみを聞いて人を知らず同じ家に住みながらそれを覺らず、許嫁なるが故を以て空に相戀して居た。或機會に是まで朝夕に顔を見合せて居た同士が當の相手と知れて急に戀愛が成立する。此の傾向は巷談物に限つたことではないが、材料を現實界の情話に取つてゐるので殊に目立つて見えるのであります。

馬琴は斯かる市井の話柄をすべて武家の世界に移植しました。さうして近世武士に適應するやうに説話の變遷を試みました。そこで全體の事實が可なりに違つた色彩を以て現され、浄瑠璃歌舞伎に於ける市井の男女は一躍して堂々たる豪傑義人節婦を成果うせました。ですから人名に類似がなければ其の出典を模索するに苦しむものさへあります。然らば何故に其の人名を從來の儘にして置いたでせう。彼が道義教訓を提唱しながら何の爲に彼の淫奔な男女の名を其の儘に踏襲したでせうか。これは要するに當代の小説が興味本位であつたからで、人氣を得るの手段に外ありませんでした。即ち人口に膾炙した説話を取り因果關係を複雑にして讀者の好奇心を唆らうとしたのでした。

要するに馬琴の巷談物は換骨奪胎の妙を得たもので、兎に角在來の説話を一度消化して後彼れ自身の説話として打出したものです。斯くて町人間の私事も武士階級に在つてはそれ／＼の意義有るものとして取扱はれ、戀愛も殺生も總て忠孝節義の道德的行爲として讚美の對象となりました。こゝに彼の巷談物の特色があります。

傳説物 此の種類のもも取扱の方法は巷談物と變りませんが、其の材料を現世に取らないで古典に仰いだ點に差異を認めます。例へば

- 文化二年 勸善常世物語 五冊 北馬畫（謡曲鉢の木、北條九代記）
- 同 三年 隅田川梅柳新書 六冊 北齋畫（謡曲隅田川、斑女——梅若傳説）
- 同 年 新累解脫物語 六冊 北齋畫（死靈解脫物語）
- 同 年 標註園の雪 五冊 北齋畫（薄雪物語）
- 同三、四年 盆石皿山記 前二冊後二冊 豐廣畫（鉢かつぎ、刈萱傳説、盆屋敷説話）
- 文化十年 皿々郷談 六冊 北齋畫（落窪物語、謡曲唐船）

以上の諸篇は傳説が原形の儘に存してゐますので、巷談物の如く別趣の感を與へません。かの巷談物では其の擇んだ材料が私通情死等の自由戀愛を中心としますから、如何に馬琴が利用して

も、彼の道德的見地から見れば許し難いものばかりでした。そこで思切つた變化をも必要としましたが、この傳説物では此の點に於て融和する所がありました。『皿山記』の發端には刈萱傳説を其のまゝ利用し、『皿々郷談』では落窪物語の人物事件をそっくり持込んでゐます。たゞ傳説物に表れた馬琴の作意は、三世に跨がる因果の理法を以て闡明しようとしてゐます。

歴史物 爰に謂ふ歴史物は正史中の人物又は傳説化せられた詩的人物を主人公として小説的潤飾を加へたものと、又架空の人物でも或時代或藩邦の盛衰の中に終始した者を主要人物として取扱つた作品を指すのであります。此の種類のもものは作者の後半期に屬し然も大概長篇です。

棒説弓張月 三十卷 北齋畫（文化三年——八年）

保元物語から脱化したもので、八郎爲朝を主人公として琉球經營を叙してゐます。讀本中の傑作といつたら先づ是れでせう。

松浦佐用姫石魂録 十卷 豐廣畫（文化四年）

後集十卷は英泉畫で、文化十年に出てゐます。大伴狹手彦との別離を悲んで石に化したと傳へられる小夜姫の傳説を骨子とした作です。

頼豪阿闍梨怪鼠傳 十卷 北齋畫（文化五年）

木曾義仲の子義高が頼朝を仇として狙ひ、頼朝の念力が義高に宿つて不思議の力を現す。これに猫間中納言の子道實が義高を仇とする事件を絡ましてゐます。盛衰記や東鑑から取材した作です。

俊寛僧都島物語 十二卷 豊廣畫（文化五年）

初は平家討伐の密謀、中頃は俊寛の流竄及び妻子の辛苦、終は鬼一法眼と義經との關係を叙してゐます。此の篇では鬼一は俊寛が島から逃れて來つた後半生の名で、其の娘を義經の配としてゐます。平家物語や義經記から着想したことは言ふまでもありません。

南總里見八犬傳 九輯 百六卷（文化十一年から天保十三年まで二十八年間）

上總の豪族里見氏の興隆を骨子とし八人の理想的武士を活躍せしめたもので、着想は水滸傳から史材は里見軍記、代々記などから得てゐます。挿畫は柳川重信で、第五輯から溪齋、英泉が加はり、八輯以後に二代重信になり、九輯では英泉、貞秀、國貞などが描いてゐます。

朝夷奈巡島記 六篇三十一卷（未完）豊廣畫（文化十一年——文政九年）

朝夷奈義秀を主人公として諸國遍歴を叙した作です。

近世説美少年錄 二十卷 國貞畫（文化十一年——天保五年）

續篇を『新局玉童子訓』といひ、三十卷、豊國畫（弘化二年から四年迄）

此の作の前半はお夏清十郎の情話を取り、其の間に生れた珠之助後身を大内氏の臣陶晴賢となし、史實たる毛利との確執と結付けてゐます。これに現れた人物特にお夏の性格は馬琴の讀本に於ける女性中最も人間性に富んだもので、彼の小説に異彩を放つてゐます。

開卷驚奇俠客傳 四輯 二十卷 英泉、國貞、重信畫（天保二年——五年）

南朝没落後に於ける楠、新田の子孫の孤忠を描いたものです。

以上歴史物に現れた主人公は皆英傑の士です。之を淨瑠璃の時代物に於ける勇士と比較しますと、人間を描いたものとしては甚だしく見劣りがします。即ち淨瑠璃の時代物では、一方に典型的な武士を點出し、其の犠牲的献身的な悲壯な説話を綴ると共に、其の半面には情緒纏綿たる光景を寫すのを常套手段としました。具體的に言へば、淨瑠璃では討死自殺等の場面に當つて親子の悲歎、妻子の苦衷、夫婦の情愛を寫すことを忘れませんでした。然るに馬琴は同じ英雄を描きながら勇壯な一面のみを數々並べてゐますが、其の半面に及ばず、或は『此のところ情態多し、細かに寫さばなか／＼ならむ、看官宜しく思ひ見るべし』として回避してゐます。これは丁度保元物語と太平記との差異に等しく、馬琴は正しく太平記の撤を履んだものと謂へませう。——

此の教材は其の馬琴を馬琴の大著八犬傳を中心として紹介したもので、八犬傳は實に彼が一代の大作、其の心血を注いで成した苦心談は一讀愔夫をして尙起たらしむるの概があります。彼は壯年時代の勉強の結果、八犬傳を執筆し始めた頃は病弱をかこつ人となりました。常人では筆を執るところの沙汰ではありませんが、剛直な義理堅い馬琴は、藥餌に親しみながらも専心著述に力めたのでありきす。しかも其の内に右眼は失明し、頼みとする左眼も亦病んで、十一行が五行となり四行となり、それすら探り書でした。しかも彼は固く筆を執つて放しませんでした。其の内に左眼も失明してしまひました。其の苦惱にかへて、加へて一字興繼を先だて、女婿興利と糟糠の妻を失つて、悲痛苦惱の極殆ど狂せんばかりであつたに拘らず、彼は勇猛心を振起して、多少の文字を解するに過ぎなかつた嫁を教へながら口授を筆記させたのであります。一字一句の末までも教へ導く馬琴の苦心と其のもどかしさは如何ばかりでしたらう。八犬傳は斯うした苦心と努力の結果完成されたのであります。八犬傳は徹頭徹尾彼のなま／＼しい血潮の結晶でした。文は四段に分れてゐて、第一段は序説、第二段は八犬傳著作に努力した事、第三段は其の爲にたうとう失明するに至つた事、第四段は八犬傳完成の苦心となつてゐます。文の中心は最後の第四段で、嫁みちを相手にして血の惨み出るやうな苦しみを嘗めたあたりにあります。

瀧澤馬琴は徳川時代に於ける有名なる小説家として、其の著作二百六十餘種、雜著を合すれば、無慮三百數十種に及ぶ。云々

冒頭の一段は馬琴の偉業を物語つたもので、彼が一生の著作無慮三百數十種に及んだと云ふに先づ其の精力絶倫さが窺はれませう。然もそれが雄篇大作のみで、彼が一生の名著八犬傳の如き、巻數總て百六巻といふ老大なる大作、然もそれが四十八歳から七十五歳に至る二十八年間の努力の結晶だといふのです。此の文は先づ其の偉業の一般を想像させてから、其の一例として八犬傳著作の苦心を物語らうと云ふのであります。此處では是非前に擧げた作家としての馬琴の一般を紹介して、是から讀ませようとする八犬傳著作の苦心に對する背景を描かなければなりません。馬琴の雅號は澤山あつて、著作堂主人、飯臺陳人、玄同陳人、信天翁、簑笠漁隱等があります。曲亭馬琴も其の一つです。曲亭は支那の山の名、馬琴は小野篁が『才非馬卿、彈琴未能』の句から取つてゐます。

元來馬琴は非常の勉強家にして、壯年の時代には、早朝より夜の十時に至るまで稿本を綴り、就寢後は更に讀書に夜を更して、時には曉に及ぶことありき。云々

此の段では馬琴の生ひ立と其の爲人の一般を述べたもので、彼が異常な勉強家であつた事と、

彼が謹直で義理堅い人であつたといふ事とは、彼の一生の歴史をして光彩陸離たらしめてゐます。馬琴は幼年の頃から逸話に富んだ人で、其の點だけを眺めても眞に立志傳中の一人と謂つて然るべきでせう。人名辭書に、

馬琴甫めて九歳、留りて小主に仕ふ、馬琴幼にして書を讀むことを好み又稗史野乘を喜びて晝夜手に卷を釋てず、小主驕暴動もすれば之を虐使す、馬琴憚ばず、一夜俳歌を房壁に書して曰く、

木がらしに思ひ立けりかみのたび

と遂に逃れ去る、時に年十四、兄興旨戸田氏に仕ふ、之を聞いて諭示すること再三、之を主に薦めて徒士と爲す、其の好むところに非ざるなり、幾くもなくして辭し去り、更に幕士數氏に歷仕す、皆終へずして去り、醫官山本宗英の家に寓し醫を學び宗仙と號す、又經を龜田鵬齋に受く、皆學を終へずして罷む、小説家山東京傳の家に寓す、京傳其才を愛して之を待つこと甚だ篤し、馬琴慨然として曰く、吾官となり醫となる能はず、又儒となる能はず、寧ろ稗史小説を作りて名を後世に著はすも亦快事なりと、乃ち始めて一書を著し壬生狂言と曰

ふ、京傳驚き歎じて曰く、今より二三十年にして世復た老夫を説かじと、京傳爲に介して書肆蔦屋重三郎の管店の爲す、時に花の春風の道行二冊を著す、北齋之に畫く、大に行はる。馬琴身の丈け六尺餘ありて容貌魁偉、角觥長某來りて曰く、子余に従はゞ必ず名を海内に揚げんと、馬琴笑つて答へず、蔦屋の叔父の家は妓館の側に在り、茶屋を以て業と爲す、女あり甚だ美なり、馬琴を以て婿と爲さんと欲す、馬琴曰く、妓家何ぞ乞盜に異ならん。父母の遺體を以て之を汚すに忍びずと、蔦屋に居ること三年にして、飯田街中坂の履商伊勢屋の寡婦に入婿す、然れども筆硯を好むを以て履の業を嫌とせず、則ち其の女に婿を取り、自ら書を兒童に教へて給し、其の暇を以て著作す。其の所作文辭絶妙にして引證精博なるを以て、海内馬琴の書を讀まざる莫し、而して八見傳尤も著はる。云々

とあります。以て其の一斑が窺はれませう。

とかくする中、馬琴が六十歳の秋、右眼俄に明を失しぬ。彼は今更に過去の不注意を悔みつゝ、例の負けじ魂より、以後は左眼のみを頼みとして、なほも屈せず著作の筆を進めたり云々。

是からがいよ／＼八犬傳著作の苦心で、彼は過度の勉強のため遂に右眼を失ひ、わづかに左眼を頼みとして尙も著作の筆を進めましたが、遂に其の左眼きへも失するに至りました。彼が『衰眼實にせんかたなし』と歎じ、『衰眼かすみで見えかね、唯手如減のみなり』と云つたあたり、其の心中の程が察せられませう。こゝら回外剩筆には

とかくする程に、九年以前癸巳の秋、八九月の時候こころにやありけん。ある一朝不圖起出けるに、右の一眼見ることを得ず。うち驚き且つ訝りて、故兒に示すに、瞳子上の方流れたり。療治なさるべしといひけり。其後親族朋友。書賈等まで、治療を薦むる者多かりしかど、吾敢て従はず。且つおもへらく、吾は幼稚より眼の患なく、流行目だにも病ことあらず。然るを今一朝に右眼を失ひしは、年來讀書筆研の疲勞なるべく、且つ冬春毎に高き火桶を坐右に置き、机邊の寒氣を防ぐ事久しくなりしかば、其火氣何時となく右眼に入りて、乾かされたるにぞあらむすらん。譬は老樹の片枝立枯たるに異ならず。よしや醫療に術を盡すとも、草根木皮のよく及ぶべきにあらず。と尋思しんして、一日も筆研を排斥せず。初めは硯心見難て、毫こを染るに不便なりしに、それも熟れては不便にも思はず。其後故兒の憂にあたりし年も、世

渡りなれば忌どもはてゝは、又筆を把らざるを得ず。其次の年、四谷へ移徒しても、左明は異なることなければ、著編はなほ年々に綴りぬる程に、戊戌の春の時候ころより、何となく左明も亦かすむやうになりしに、夏に至りてはいよ／＼其異なるを覺しかども、なほ悟らず、こは眼鏡の曇りたる故ならめと謬思ひて、俗に本玉とかいふ、水晶製の眼鏡の、價高きを壓はで、これかれと多く購求めて、掛替々々凌くものから、巳亥の春に至りては、いよ／＼かすみて、病眼なるを知りながら、本傳いまだ大團圓に至らねば、書肆の需にいなみも得せで、猶辛じて綴るものこの外にもありけり。かくて去歲（庚子）の春までは、本傳の稿本も故の如く、十一行の細字にもせしかども、夏に至りては、只朦々朧々として、細字を寫すこと得ならねば、其稿本を五行の大字にしつゝ其も手さぐりにて、去歲の秋九月本傳第九輯、四五の卷まで綴り果して刊行の書肆文溪堂の責を塞ぎにき。云々。

とありますが、以て其の苦心の程が窺はれませう。

斯かる境遇に至れば、多くは失望落膽して、年來の事業をも廢するが常なれど、彼はなほも志を屈せず、如何にしても其の大作を完成して、一は讀者の期待にこたへ、一は書肆の利を

も、全うせしめんことを期したり。云々。

此の段は前段を承けて其の苦心の一通りでなかつたことを物語つてゐます。彼は多年の苦心の結果兩眼の明を失し、加ふるに一子興繼を失ひ、家庭的にも幾多の悲哀に苦しめられました。彼が不撓不屈の精神と其の旺盛な創作慾とは、僅に文字を知れる嫁みちを相手にして、一字一句を教へ導きながら一行また一行と口授を續ける其の困難さは、想像しただけでも思はずホロリとさせられます。八犬傳のあの大著は實に彼が血と膏の結晶で、言々血を吐く思に成つたものなのです。こゝら回外剩筆には

かくて明年四十六の卷以下を綴り果さんこと心許なし。いでや倘かくてある程に、今一卷なりとも綴らばやと愚心を勵して、第九輯百七十七回、一顆の知玉途に一騎の驍將を懲すといふ一段を五行或は四行の大字にものしぬるに、字形もしどろもどろにて、且墨の續かぬ處ありて、續みがたしといへば、それを宅眷やからに補せなどしぬる程に、十一月に至りては、さながら雲霧の中に在る如く、又朧月夜に似て、一字も寫かくことを得ならずなりぬ。只筆研不自由なるのみならず、書畫を見てもしかと見えす、僅かに晝夜を辨じ、東西を知るのみ、いかんと

もせん術なければ、書案つとを退け筆を投捨て、獨歎息のあまりに

なからふるかひこそなけれ見えすなりし

書卷川に猶わたる世は

とうち詠じて、爐に寄てのみ居程に、文溪堂及び貨本屋などいふ者さへ聞知りて、皆慨はしく思はぬはなく、爲めに代寫すべき人を索るに、意に稱ふ者のあるべくもあらず、吾も亦失明ては生甲斐もなければ、この年九月より次の年まで、人の薦る醫師を三名まで轉藥しぬれども、いまだ毫も效驗あらず、されば今茲(辛丑)の春に至りて、吾又おもふに、八犬傳は今昔ありがたき大部の物の本なるに、始めありて終なくば、只看官の飽す思はんのみならず、文溪堂が爲には、後々までも利を全くしがたくて、遺憾こそあらんすらめ、人の爲にはかりて忠ならぬは吾も亦恥る所也。さればとも吾孫興邦は尙乳臭ある机心うせず。且つ武藝を好める本性なれば、かゝる幫助になるべくもあらず、かれが母は人並ににじり書もすれば、教へて代寫させばや、とやうやく思ひかへしつ。第百七十七回の中、音おと音ねが大茂林濱にて再生の段より代筆させて、一字毎に字を教え、一句毎に假名使を誨るに、婦人は普通の俗字だも、知るは稀にて、漢字雅言を知らず、假名使てにをはだにも辨へず。偏傍すらこゝろ得ざるに、

只言語をのみもて教へて寫かする吾苦心はいふべからず。まして教へを承けて寫く者は、夢路を辿る心地して、困じて果はうち泣くめり。さて代寫一枚に滿れば讀反させて、又教へて傍訓を寫するに、熟字を知らず、又句讀をこゝろ得ねは、讀む時或は字を脱し、或はなき字を添へて讀めり。讀すらたやすからざるに、知らずこゝろ得ざる事を口授せられて、寫く者の艱難を思へば、いと痛ましさに、幾度か已めばやと思ひしを、又思ひかへして、筆捨の松のふる葉も言の葉も

子等にをしへてかゝするぞ憂き

とうち詠じて、且つ慰めつゝ、一二卷代書させぬる程に、かれもやうやくに熟れて、苦心初の如くにはあらず、偏傍などは、稍わきまへ知りて、言を費すも、舌の疲るゝまでに至らず。編中のさしゑは代寫さすべき者なければ、われ只其人物を圈點して、もて畫工に傳ふるに、委細に注文を代寫させるのみ、稿本はさら也、書畫工の寫本も、吾いふ如く寫りや否や、心許なく思へども術なし。況いて文中に故事などを引用ひんと思ふに、原本に涉らざれば暗記の失あらんことを恐れて、命じて其書を取り出させて讀するに、漢籍は及ぶべくもあらず、假名まじりの古書といへども、傍訓なきは得讀ず。強て讀すれば、缺舌侏離にて要をなさね

ば、ひき用ふべくもあらず。かゝることは教へもすれど、讀することは吾見るにあらざれば、いよゝ難儀にて實にせん方なし。然れども教誨を承る者の困じながらも倦までよく勉むるにあらざれば、この十卷を綴り果して、局を結ぶに至らんや、縫刺の技、薪炊の事などこそ、かれが職分なれ、文墨風流の事に代らせて、其の要を做さまく欲するは理なしとも理なしと、知りつゝも月を累ねて、今茲辛丑の秋八月二十日といふ日に、本傳第百八十回の下編附録目、諸將の成敗其のをはりを備さにす。といふ結局大團圓まで、稍稿じ果たりき。噫無益し。老の諄言よ。云々。

以て其の苦心の程が想像されませう。

八犬傳は實に斯うした苦心の結果に成りました。此の著が一たび世に出でますと所謂洛陽の紙價をして高からしめ、一篇を刻する度毎に萬本立どころに售れ、遠近争ひ看るといふ盛況を呈しました。馬琴の満足も思ひやられませう。

馬琴の苦心を想像すると共に、嫁みちの骨折をも忖度しなければなりません。馬琴の大著は實に嫁みちの力に負ふところ尠くなかつたのであります。彼が引證精博、難詰な漢語を並べ立てる

のを一々書取らなければならなかつたみちの苦心も一方ではありませんでした。此の文は一方には馬琴の苦心を物語ると共に、一方には嫁みちの内助の骨折を忖度させようとした所に編者の用意があります。

嫁みちは子興繼の遺妻で琴童と號しました。馬琴が右眼の明を失したのは天保四年の事で、同十一年の夏に其の左眼の明を失し全く盲目となり、加ふるに五年に其の子興繼を先立て、同八年には女婿興利を、同十二年には其の妻會田氏を失ひ、憂きことの數々に狂せんばかりの馬琴を助けたのは實に此のみち女即ち琴童でした。馬琴が八犬傳の末に「教を受くる者の困しながらも倦まで勉むるにあらざれば、此の十卷を綴り果して、局を結ぶに至らんや」と云つたのは眞に其の實感を物語つたものでせう。

「構想」 作り構へた思想の意で、想を構へること、

「稿本」 韵會の「稿本草勅之本」に出で、下書又は草稿の意、

「攝生」 養生の意で、老子の「善攝生者、陸行下遇兇虎、入軍不避甲兵。」に出づ。

「落膽」 力を落すの意で、がっかりすること、

「書肆」 書物をあきなふ店の意で、書店、本屋、書林、書舖に同じ、

「期待」 豫期して待つゝの意で、然かあるべしと待ちかまへ居ること、

「句讀」 讀むに便するために施す點のことで、句と句の中での小區分をいふ。「讀」は「よ

み」、「句」は「きり」、讀點は「、」、句點は「。」、

「宜」「うべ」に同じく、げにさもあるべくの意、肯ふ意に「ふ語、

補充文には八犬傳の中から芳流閣の一節を摘出して置ませう。

龍虎の争

古の人云はずや。禍福は糾ふ繩の如し。人間萬事往として塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る處、將禍の伏せる所、彼れにあれば是れにあり、とは思へども豫てより、誰れかよくその極を知らん。憐れむべし。犬塚信乃は、親の遺言紀の名刀、心に占めつ身に傳つ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、遙々滄我へ齋して、名を掲げ家を興すべかりし、其の福は禍と、ふりかはりたる村雨の、刀は舊の物ならで、我が身を劈く譬とぞなりし。憾を爰に釋くよしもなく、猝急にして意外にあり、僅に當座の辱めを避けばやと思ふばかりに夥

の圍を切開きて、芳流閣の屋上に、攀ち登れども左右に、脱去るべき道のなければ、其處に必死を極めたる心の中は如何なりけん。想像だにいと痛まし。されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繋れし、禍は今恩赦の福、我が縛めの索解けて、人にぞかゝる捕手の役義、犬塚信乃を搦めよとて、慙に擇み出されつ。他の憂ひを身の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、推辭て許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き、彼の樓閣は三層なり。其の二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき。時は六月二十一日、きのふも今日も乾蒸の、燄熱をわたる敷瓦は凹凸隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、洄溯は名におふ坂東太郎。水際の小舟楫を絶えて、進退既に谷まりし、敵にしあればいかでわれ、繋ぎ留めんと颯の、樹傳ふ如く、さらくと、登り果てたる三層の屋背には目柴騎よしもなく、迭に透を窺ひつゝ、疾視あうて立つたる形勢、浮圖の上なる鶴の巢を、巨蛇のねらふに似たりけり。廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の老黨、若黨圍繞せし、床几に尻を打ちかけて、勝負いかにと見上げたり。芳流閣の東西には、腹巻したるあまたの士卒、槍・長刀をきらめかし、或は箭を負ひ弓杖突き立て、組んで落ちなば繋ぎ留めんと、項をそらしてこれを觀る。しかの

みならず外の方は、連綿として杳かなる、河水めぐりて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鷲を借らされば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも羅に入りぬ、獸ならずも狩場に在り。三寸息絶ゆれば絆みな休まん、脱れ果てじと見えたりけり。

その時信乃思ふやう、『初層・二層の屋の上まで、追ひのぼらんとせし兵等を、斫り落しつる後は、絶えて近づくものなきに、今たゞひとり登り來ぬるは、よに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便が、虎を暴にする勇あるか、また富田三郎が鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫ひとりの敵なり、引組んで刺し違へ、死するに難きことやある。よき敵ごさんなれ、目に物見せん。』と血刀を、袴の稜もて押拭ひ、高瀬の如き方桴に、立つたるまゝに寄するを俟てば、見八もまた思ふやう、『かの犬塚が武藝・勇悍、もとより萬夫不當の敵なり。さりとても搦め兼ねて、他の援を借ることあらば、獄舎の中よりこの役義に、選み出されしかひもなし。搦め捕るとも撃たるとも、勝負を一時に決せんものを。』と思ひにければちつとも擬議せず、『御説さふ。』と呼びかけて、拿つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桴の、左の方より進み登りて、組まんとすれど寄せつけず、『心得たり。』と鋭き太刀風に、撃つをはつし

と受け留めて、拂へば透さず切り込む刀尖、支へて流す一上一下、迂る蔓を踏み留めて、頻りに進む捕手の秘術、あなたも劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負も判かざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるものなく、瞬もせず氣を籠めて、見るめもいと遙かなり。

去る程に、犬塚信乃は、悔り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音被聲、兩虎深山に挑む時、鏗然として風發り、二龍青潭に戦ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき、春ならば、峰の霞か夏ならば、夕の虹歟と見る可りなる、いと高閣の棟にして、死を争ひし爲體、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎌脇當の端を裏かくまでに、切り裂かれしかど、太刀抜かず。信乃は刀の刃も續かで、初めに淺痕を負ひしより、漸々に疼を覺ゆれども、足場を揃つて撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を、見八右手に受け流して、返す拳につけ入りつゝ、ヤツと被たる聲と共に、眉間を望んで礮と打つ、十手を丁と受け留むる。信乃が刃は鏗際より、折れて遙に飛び失せつ、見八得たりと無手と組むを、そがまゝ右手に引き著けて、迭に利腕楚と拿り、振ち倒さんと曳聲合して、揉つ揉るゝ力足、此彼齊一蹈みちらして、河邊の方へ滾々と、身を輾

第二十九課 足柄山

從來からあつた詩ですが、幾度讀んでもあきない詩です。

此の詩は二十年ばかり前に出た坪内博士の長詩に據つたもので、原詩は殆ど散文的に出来てゐました。

足柄山

霞たなびく小松原

漣寄する近江路を

ばせし覆車の米苞、坂より落すに異ならず。高低險しき棧閣に、削り成したる、蔓の勢、止まるべくもあらざめれど、迭に拿つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋上より、末遙なる河水の、底にはいらで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、打ち累なりつゝ撞と落つれば、傾く舷と立つ浪に突と音す水烟、纜丁と張り断つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐き出されつ。爾も追風と虚潮に、誘ふ水なり洞舟、往方もしらす成りにけり。(八大傳第四輯)

征東軍に加はらんと
 駒走らす後より
 これぞ豊原時秋なる
 美濃路尾張路三河路と
 足柄山に着きにけり
 櫻にかゝる月影の
 鬼神も心や和らがん
 笙吹くことに巧なる
 我はいくさに臨む身の
 世にたぐひなさ靈妙の
 世に傳はらで亡びんは
 よし時秋に傳へんと
 傳授の秘曲盡くしつゝ
 萬山寂と靜まりて

新羅三郎義光が
 追絶りたる武者一騎
 我も共にと從軍し
 日數重ねて相模なる
 頃しも彌生半ばにて
 おぼろに霞む春の空
 文武の道を兼備へ
 義光のこの時思ふやう
 生死のほども測られず
 笙の秘曲をこのまゝに
 斯の道のため惜むべし
 二人岩が根に座を構へ
 月下に吹くや笙の音
 すみ上りたる笛の聲

岩間の清水か松風か
 義光やをら吹きをへて
 いでや時秋道の爲
 言ひつゝ立てば驚きて
 思ひ定めしものゝふが
 重さは劣らん文と武や
 藝術の道も尊しと
 西と東へ別れ行く

妙音天地にあふれけり
 秘曲つぶさに授けはて
 はや〜都に歸れよと
 なほ從軍を願へども
 動かぬ心は磐石の
 行くは武の道引返す
 名残惜さを忍びつゝ
 西と東へ別れ行く。

讀本の詩は足柄山で笙の秘曲を授ける場面だけを詠じたもので、其の前後の關係は一切讀者の想像に任せてあります。ですからそこらに幾分の敷衍補説を必要とするのは無論です。

豊原氏は代々笙を以て聞えた名家でした。時秋が幼少の折に父の時元は死んでしまつたので、豊原家傳來の秘曲は時元が高足の弟子新羅三郎義光に傳へられました。時秋は義光が奥州に出陣したと聞いて、後を追つかけて近江國鏡宿で義光の軍と一緒にたつて、それから美濃尾張三河と

だん／＼東國に下つて足柄山に差蒐つた時、義光は時秋が何故に自分の後を追かけて来たかといふことを付度して、此處で初めて笙の秘曲を授けることになつたのであります。

時は彌生の半ば、空には朧に霞んだ月影がぼんやりと光を投げてゐます。谷間を流れる水の音は夜の静けさを破つてさら／＼と聞えます。その寂寞な山中に朗々と吹き出す大食入調の秘曲、題材その物が既に立派な詩です。

時秋が多年の願望は爰に達せられました。義光は尙も後を慕つて東國へ下らうと云ふ時秋を諭して、君は都へ歸つて藝術を末代に傳ふべき人、我は武人として戰場に屍を曝さなければならぬ者、君は藝術の爲、我は武の爲、はや／＼都へと促して、しほ／＼と都へ歸つて行く時秋の後姿を、千萬無量の思ひで見送つたといふのが此の詩の筋です。

詩の狙ひ處は足柄山中の情景で、義光の優にやさしき武人の一面です。場所は足柄山上、澄みわたる月下に潺湲と響く眞清水の音、萬籟寂として聲なき夜半に朗々として響く笙の音、教を受ける人は藝術に一生を献ぐべき人、教へる人は千軍萬馬の間に馳驅すべき武夫、しかも其の間に哀別離苦の切ない思をこめた邊り、本當に氣持よく出来てゐます。

詩の據所は『古今著聞集』で、坪内博士の詩は全然それに據つてあります。

源義光は豊原時元の弟子なり。時秋未だ幼かりける時、時元は失せにければ、大食調入調曲をば時秋には授けず、義光には慥に教へたりけり。陸奥守義家朝臣永保年中に武衛家術等を攻めける時、義光は京に候うてかの合戦の事を傳へ聞きけり。いとまを申して下らんとしけるを、御許しなかりければ、兵衛尉を辭し申して陣につる袋をかけて馳下りけり。近江國鏡の宿につく日、はなだの單衣狩衣にあをばかまきて引入烏帽子をしたる男おくれじと馳せきたるあり。あやしう思ひて見れば豊原時秋なりけり。あはれ如何に何しに來りたるぞと問ひければ、とかくの事は云はず、只御供仕るべしとばかりぞ云ひける。義光此の度の下向物騒がしき事侍りて馳下るなり。伴ひ給はむ事最も本意なれども、此の度におきてはしかるべからずと頻りにとどむるを聞かず。強て従ひ給ひけり。力及ばで諸共に下りて、遂に足柄の山まで來にけり。彼の山にて義光馬をひかへて曰く、とどめ申せども用ひ給はで、これまで伴ひ給へる事其の志淺からず。さりながら此の山には定めて關もきびしくてたやすく通す事もあらず。義光は所職を辭し申して都を出でしより命をなきものになしてまかり向へば、如何に關きびしくとも憚るまじ。かけ破りてまかり通るべし。それには其の用なし、すみやかに是より歸り給へと云ふを、時秋尙承引せず、又云ふ事もなし。其の時義光は思ふ所を悟りて

閑所に打寄りて馬より下りぬ。人を遠くのけて柴を切りはらひて、楯二枚をしきて、一枚には我身座し、一枚には時秋をすゑけり。うつぼより一枚の文書を取出て時秋に見せけり。父時元が自筆に書きたる大食入調曲の譜、又笙はありやと時秋に問ひければ、候ふとてふところより取出したりける用意の程先づいみじくぞ侍りける。其の時是までしたひ來れる志定めて此れ故にてぞ侍らんとて、則ち入調曲を授けてけり。義光はかゝる大事によりてくだれは身の安否知りがたし。萬ヶ一安穩ならば都の見參を期すべし。貴殿は豊原數代の樂工、朝家要須の仁なり。我に志をおぼさばすみやかに歸洛して道を全うせらるべしと再三云ひければ理におれてぞのぼりける。

尙大日本史にも此の話は可なり詳しく出てゐます。

源義光は伊豫守頼義の子なり。元服を新羅明神社に加ふ。因て新羅三郎と稱す。又館三郎と稱す。幼にして弓馬を善くす。長ずるに及で勇にして智謀あり。左兵衛佐と爲りて京師に宿衛す。兄義家清原武衡を撃ちて利あらずと聞き、奏して之を援けんことを請ふ。許さず。遂に官を辭して陸奥に赴く。義家大に悦び感泣して曰く、今日汝を見る尙ほ先大人の再生する

がごとし、力を戮せて賊を討つ之を破るは必せりと。遂に義家に從ひて金澤柵を圍む。武衡義光に就て降を乞ふ。聽さず。再びす。義光義家に告げて將に入りて降を受けんとす。義家固く之を止めて藤原季方を遣る。武衡之に賂ふ。季方受けず、怒りて出づ。城陥る。義光武衡を庇ひて其の死を貸さんことを請ふ。義家聽かず。尋で義家に從ひて京師に歸る。刑部丞に任ぜられ、常陸介甲斐守を歴て從五上に叙せられ、刑部少輔に至る。大治二年卒す。

義光幼にして音律を好み、其の精妙を究む。嘗て笙を豊原時元に學ぶ。時元卒する時、其の子時秋尙ほ幼にして祕曲を傳ふことを得ず。乃ち義光に大食入調を授く。義光陸奥に赴くに及びて、時秋追ひて近江鏡驛に至り、乃ち與に俱せんことを請ふ。義光止むる數次、可かず。行て足柄山に至る。義光轡を駐めて之に謂ひて曰く、吾深く子の志に感ず。然れども此の山に關あり。嚴に關出を禁ず。吾已に死を以て自ら誓ふ。必ず當に關を破りて過ぐ可し。子身を以て之に殉せんは無益なり。宜く速に歸るべしと。時秋猶ほ從はんことを請ひて已まず。義光稍々其の意を曉る。乃ち馬より下り二楯を布て俱に坐す。因て胡籥中より時元傳ふる所の大食入調の譜を出して之を示す。又問ふ笙を齎らしたる乎否やと。時秋乃ち懷中を探りて

笙を出す。義光曰く、子我に従ふ所以は想ふに必ず此の事ならん。我今戦に赴く、生きて歸るは期し難し。子は官守あり、宜しく歸りて其の業を全くすべしと。乃ち悉く秘曲を以て之に傳ふ。畢りて各々別れ去る。

此の話は武人の優雅な一面を物語つたものとして世に傳唱されてゐますが、最近史家の研究に依りますと、年代や其の他に不確かな所があつて、實際に有つた話かどうかといふことに付て議論が區々です。年代を繰つて見ますと、義光が東國へ下つた際にはまだ時元が存命中で、當面の人時秋も生れて居なかつたさうです。時元が存命中で而も時秋がまだ生れて居なかつたとしても、此の話はちよつと變なものになりますが、しかしそれは歴史の領分です。國語は何處までも國語で、そんな面倒な考證だては unnecessary です。傳説を傳説のまゝ取扱ふことの出来るのは讀本獨自の境地で、歴史では出来ない事です。事實の如何に關らず、斯うした傳説が昔から傳はつてゐて、然もそれが古今著聞集にも出てゐれば大日本史にも載せられてゐます。それらを據所にして、斯うした美しい場面を詩化して、武人の優雅な一面を鑑賞するは國民文學として些とも差支のない事です。此の教材の如き、之に依つて歴史的事實を知らしめようと謂ふのではありません。一

個の詩として立派に獨立を保つてゐます。立派に獨立してゐる以上は詩としての独自の使命を有してゐる譯で、隨つて其の間に事實の如何や、面倒な歴史的考證などは全然必要のないことです。何處までも此の詩がもつ趣味と潤ひとを第一の目的に置いて、深い感激と憧憬とに讀者を導かなければなりません。

足柄山のよはの月、

空すみ渡る笙の音に、

草木も耳をそばたて、

谷の眞清水響き合ふ。

處は足柄、空には皎々たる月が澄みに澄んでゐる。満山寂として聲なく、遙に潺湲たる溪流の音、背景その物が既に立派な詩です。楯を敷いて對ひ合つて居るのは新羅三郎義光と豊原時秋、一人は武人、一人は貴公子、背景と人との調和が頗る詩的で、眞に情景一致です。

『空すみ渡る笙の音に』の『すみ渡る』は、空のすみ渡ることと、笙の音のすみ渡ることとの兩方に掛かつて、所謂双叙法です。『草木も耳をそばたて』と『谷の眞清水響き合ふ』は、どちらも無情を有情化した所謂擬人法です。

足柄山は箱根山彙で、相模と駿河の國境に在ります。此の傳説の地は今の地藏峠の頂上で、明神といふ小さな部落の附近だといふことです。尙箱根の神山の麓にも、祕曲を授けた古蹟だといつて石碑が建つてゐます。傳説ですからどちらが本當だかハッキリしません。

新羅三郎義光は

更に祕曲を吹添へて、

取出したる一卷を

時秋が手に渡しつゝ、

後を慕つて附いて來た時秋の心を推察して祕曲を傳へた義光は、興味の高調するに任せて更に祕曲を吹添へて、夜の更けるのも忘れてゐます。『更に』に所謂三昧の境を仄かしてゐます。『祕曲』は大食入調の曲です。

やがて祕曲を傳授し了つてから、義光は物の具の間から取出した一卷を時秋の手に渡しました。無論其の一卷は時秋が夢裡にも忘れることの出来なかつた祕曲の一卷です。渡す義光、受ける時秋——何といふ美しい場面でせう。

「汝が父より傳はりし

祕曲は之にをさめたり。

今の調を耳にしめ、

都路さして歸れとく。」

さすが名残の惜しまれて、

時秋尙も「御後に

従ふべし。」とためらへど、

義光頭をうち振りて、

祕曲の一卷、それは亡き父の記念です。時秋は今其の祕曲を目のあたりに聴くことが出来、しかも其の祕曲を收めた一卷を手にすることが出来たのです。時秋は義光の笙によつて亡き父の聲を聴き得たのです。さうして其の一卷によつて傳家の祕曲に接することが出来たのです。時秋の喜びはどんなでしたらう。時秋の眼から見ますと、此の時の義光はもう義光ではなかつたのです。亡き父の姿であり亡き父の聲だつたのです。時秋が憧がれて別れを惜んだのも無理からぬことです。そこら情緒纏綿たるところを味つて見なければなりません。

「我戰場に向ふ身の
野末の露と消てん時、
汝にあらでは此の曲を
誰かは後に傳ふべき。」

我は武の爲、家の爲
汝は世の爲、道の爲、
つゝがなかれ。」と西東
露けき袖を分ちけり。

尙も附従はうとする時秋、それを無理に都へ歸さうとする義光、そこらの情調が此詩の山です。

「御後に従ふべし」とためらう時秋に對して、我は戰場に向ふ身で何時野末の露と消えるかも知れない、我が亡き後に此の祕曲を誰が後の世に傳へよう、我は武の爲家の爲に捨つべき身、お前は世の爲道の爲に殉すべき人、血氣に驅られて其の本分を忘れてはならない——ためらう時秋に對して諄々として説く義光、そこらに人それく適くべき道があつて、一時の私情に驅られて其

の本分を忘れてはならないといふ、所謂斯道に殉ずるといつた貴い教訓が仄かされてゐます。「我は武の爲、家の爲」といひ「汝は世の爲、道の爲」といひ、何といふ尊い場面でせう。「つゝがなかれ」の一句に千萬無量の思をこめてゐます。

藝術愛護の至情を中心にした足柄山の古傳説、それがどんなに私たちに趣味と潤を與へることでせう。

「足柄山」 相模と駿河の境にあり、東北第一の險要の地として當時關を置いてゐた。

「笙」 雅樂に用ふる樂器の一種、匏を切りて其中に十三、十七又は十九の管をたて並べ、每管の端に簧を付け、吹き鳴らすもの、

「眞清水」 眞は美稱、清水に同じ。

「祕曲」 祕傳の樂曲の略で、祕して容易に傳へざる曲の意、こゝでは大食調入調の曲のこと

「調」 調子の意で、音律又は樂曲に同じ。

「都路」 都の路の意で、都へ向ふ路の意、

「ためらふ」 躊躇の意、心に決しかねてぐづぐづしてゐること、

『名殘』餘波の轉、物事が過ぎ、人の別れ去つた後、なほ其の面影の残ること、こゝでは袂別の際の意で、別れぎはに同じ。

『野末の露』野末は野のはて、野におく露のやうに、もろく消えて行く命の意、

『霽けき袖』露にぬれたやうに涙でぬれた袖の意、涙ながらの別に同じく、泣く／＼別れること、

尙補説の資として、今昔物語の中から蟬丸の事蹟を摘出しておきませう。

博雅の三位

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克明親王と申す人の子なり。よろづのことに勝れてありける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に弾きけり、笛をもえならず吹きけり。この人、村上の御時に四位の殿上人にありけり。その時に、逢坂の關に、一人の盲庵をつくりて住みけり、名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雑色にてなんありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙に弾く。

然る間、この博雅この道をあながちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲、琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば、行かずして、人を以て内々に蟬丸にいはせけるやう、『など思ひかけぬ處には住むぞ、京に來ても住めかし。』と。盲これを聞きて、その答をばせずして曰く、

世の中はとてまかくても過してん宮も薬屋もはてしなれば

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いよいよそのみやびの心に感じ、思ふやう、『我音樂の道を好むによりて、この盲に逢はんと思ふ心深し。されど、この盲の命いつまであらんも計りがたし、我が命も知りがたし。琵琶に流泉・啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。たゞこの盲のみこそこれを知りたるなれ。かまへてこれが弾くを聞かん。』と思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども、蟬丸その曲を弾くことなかりければ、その後三年の間、夜々逢坂の盲が庵のあたりに行きて、その曲を今や弾く／＼と密かに立ち聞きけれども、更に弾かさりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはぐもりて、風少し打吹きたりけるに、博雅、『あはれ、今宵は興あり。逢坂の盲今夜こそ流泉・啄木は弾くらめ。』と思ひて、逢坂に行きて立ち聞きけるに、盲琵琶を搔鳴して物哀れに

思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞く程に、盲獨り心を遣りて詠じて曰く、
逢坂の關のあらしのはげしきにしひてぞゐたる世をすこすとて

とて琵琶を鳴したるに、博雅これを聞きて涙を流して哀れと思ふこと限りなし。盲獨言に曰く、『あはれ、興ある夜かな。若し我にあらぬ數寄者や世にあらん。今夜心えたらん人の來よかし、物語せん。』といふを、博雅聞きて、聲を出して、『王城にある博雅といふものこそこれに來たれ。』といひければ、盲の曰く、『かく申すは誰にかおはする。』と。博雅の曰く、『我はしかじかの人なり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに来つるに、幸に今宵汝に會ふ。』と。盲これを聞きて喜ぶ。その時に、博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅、『流泉・啄木の手を聽かん。』といふ。盲、『故宮はかくなん彈き給ひし。』とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、返すく喜びて、曉に歸りけり。

これを思ふに、諸々の道はたゞかくの如く好むべきなり。それに近代は實に然らず。されば、末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸賤しきものなりと雖も、年ごろ宮の彈き給へる琵琶を聽きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりければ、逢坂にはゐたるなりけり。

り。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなん語り傳へたとや。

補充文には五十嵐力氏の詩『自分の秋』を擧げておきませう。

自分の秋

自分の秋が來た

目の秋は澄み切つた

天上の月だ

耳の秋は鳴き細る虫の音に

かさこそと落葉をさそふ

風のさびしい音楽だ

鼻の秋は木犀の

そこともない沈んだ薫

番茶を焙じるやうな

落葉を焚く匂だ

肌の秋は寒暖の中を得て
身體にしまりを與へる涼しい空氣だ

最後に口の秋味覺の秋

これが自分に取つて第一の秋で

茸に魚に野菜に果物に

數は多いが

分けて第一は柿だ

空に眞紅の纓絡を飾つて

ほしいまゝに目を悦ばして後

喉に甘露の濃漿をそゞぎこむ

あの柿だ

妙丹・衛門・鶴の子・縞御所・禪寺丸

家の庭のだけでもこれだけある

ゆかしいあの柿だ

あゝ〜日本の選まれた此等の秋が

自分の眼耳鼻舌身の五官から

見よ聞けよ匂へよ觸れて味へよ

讚めよ稱へよこれでもか〜と

隙間もなく押寄せて來る

おゝ自分の秋が來た

忙しいしかながら楽しい〜秋が來た

『目路遠くあこがれし秋の我が秋の

目路近く來たりな行きそね疾く』

第三十課 郷 土

郷土を讚美し、田園の愛すべきことを各方面からふんはりと組織立てたところに棄て難い趣があります。文は圓熟した漢文調で、其のきび／＼した語感に口語文で得られない別箇の味があります。

先づ田園の自然が如何に愛すべく親しむべきかを叙し、郷土の山河一本一草悉々く思ひ出の種ならざるなきことを述べ、郷土の由来を知り其の今日に至れる跡を追懐する時、眞に之を愛し之に親しみ、其の發展の爲に全力を捧ぐるに至る所以に説き及ぼし、堂々想を構へ句節を練り、一氣に筆を呵して巧みに舊時を語り傳説を配し、短い文の中に變化の妙を見せたあたり、文章軌範か八家文でも讀んでゐるやうな氣がします。

文は六段に分れ

第一段は郷土の風土の愛すべきこと。

第二段は郷土の山河の傳説美。

第三段は産土神社の莊嚴。

第四段は郷土の歴史美。

第五段は一木一草悉々く思ひ出の種なること。

第六段は一篇の趣旨で、郷土の由来を知り、其の今日に至れる跡を尋ねる時、之に對する眞の理解を生じ、愛郷の情の油然たるをおぼえること。

となつてゐます。

郷土にあつて郷土の山河に親炙し、日常目にし耳にしてゐますと、其の有難味を知らないのではありませんが、足一歩郷土を離れ、他郷の落寞たる自然に接しますと、今更ながら我が郷土の愛すべく親しむべきことを痛切に感ずるであります。

他郷の自然も郷土の自然も、自然には異つたところもありますまい。山あり。河あり。森あり。林あり。春は花咲き、秋は紅葉の錦を飾る。自然の風光は何處に行つても變りはありませんが、其の山河自然に何等の感興も起きないのは何故でせう。山のたゞすまゐ、水のせゝらぎ、唯々美しと眺め、景色好しと感ずるだけでしたら、郷土の自然、必しも他郷のそれに勝つてゐるとは云へますまい。しかし遊子の目には矢張り郷土の自然が戀しく慕はしいのは何故でせう。